



(写真は山岸一章氏)

【筆者紹介】  
一九二三年五月、東京渋谷に生れた。小学校卒業以前からプレス工場、綿工場、電機部品工場、陸軍科学研究所、印刷工場などで働いた。戦後は国鉄大井工場で朝鮮戦争(一九五〇年)当時のレッド・パージ、首切り反対を戦い、『民族独立行動隊の歌』を作詞した。処女短篇『幽霊助役』が『赤旗』紙に掲載された後、アカハタ記者として活躍しながら、労働者作家として創作活動に入り、一九六五年には二カ月にわたって北ベトナム各地を訪れ、ルポ『詩と竹と英雄の国—ベトナム』を発表した。

主な作品には『黙秘』『墓碑銘(連作)』などがある。



個人加盟の労働組合に入りたい方・相談したい方は、下記へ連絡して下さい。

- 金属・機械関係の方は……  
(471) 8936 全国金属・品川地域支部へ
- 出版・印刷・製本・新聞関係の方は……  
(812) 4007~8 全印総連・東京出版印刷製本産業労働組合へ
- 大工・左官・土工・資材・電気工・オペレーター職員・建設関係の方は……  
(919) 7901~2 全国建設及び建設資材労働組合へ
- タクシー・ハイヤー・観光バス・練習所関係の方は……  
(403) 0931・(402) 5393 全自交・東京自動車交通労働組合へ
- 化学・プラスチック・食品・医薬品関係の方は……  
(960) 8381 東京化学産業労働組合へ
- 映画・テレビ・放送関係の方は……  
(414) 5106~7 日本映画テレビ産業労働組合へ
- 大学・高校・中学・小学・幼稚園・ろう学校・養護・各種学校関係の方は……  
(261) 4087 私教連・東京私学単一労働組合へ
- 病院・医療・研究所関係の方は……  
(351) 2520 東京医療連・東京医療単一労働組合へ
- 保育所関係の方は……  
(261) 4087 東京都保育所労働組合へ
- 商店・問屋・食堂・販売・商事会社・美容関係の方は……  
(261) 4673 東京商業労働組合へ
- 繊維・被服関係の方は……  
(624) 8456 東京繊維被服労働組合へ
- 信用金庫・信用組合 など金融関係の方は……  
(409) 0819・8512 全信労・東京金融労働組合へ

¥300

太郎書店

ルポルタージュ

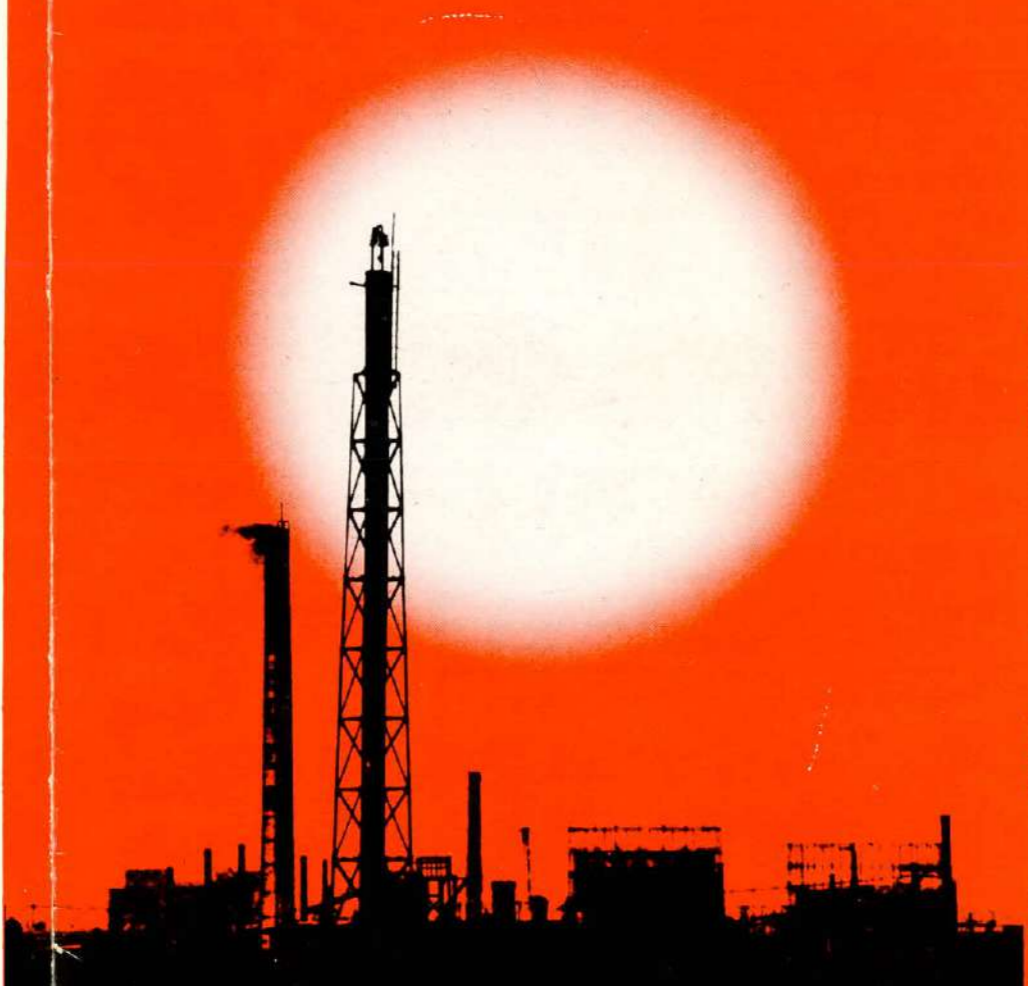
# たたかう個人加盟労働組合

山岸一章著

太郎書店

ルポルタージュ

# たたかう個人加盟労働組合



山岸一章著

推せんのことば

感動して一気に読んだ。  
このルポルタージュは団結と組織だけが  
われわれにとって唯一の力であること  
を教えている。全国の働く人々にす  
めたい。

日本社会党委員長 佐々木更三

組織労働者が未組織労働者のたたかい  
を援助し、連帯を深めることは現在の  
運動にとって決定的な意義を持って  
いる。本書は、労働運動の前進に貢献  
するすべての人々にとって必読のルポ  
ルタージュである。

総評事務局長 岩井章

千八百万の未組織労働者が組織される  
ならば、それは明日の日本を創る大  
きな力となる。このルポルタージュを、  
党員をはじめ、労働者のみなさんに  
すすめたい。

日本共産党労働部長 袴田里見



ルポルタージュ

# たたかう個人加盟労働組合

山岸一章著



ルポルタージュ

# たたかう個人加盟労働組合

山岸一章著



## はじめに

このルポルタージュは、現在、非公然の組合でたたかっている人たちの記録が主なので、ぶつうのルポルタージュのように、目で見、耳で聞き、肌で感じたことを、そのまま書くことはできなかつた。それで表現にいろいろな工夫をせざるを得なかつた。しかし、あくまでも事実をもとにして、心に感じたことを書いた。事実がないことは書いてない。

わたしは、このルポルタージュを、まだ労働組合に入っていない未組織の人たちに、読んでもらいたくして書いた。さらに既存の労働組合で活動している人はもちろん、労働者の家族、労働者の故郷の農民、そのほか労働運動に関心をもっている人に、「個人加盟の産業別労働組合」のことを知ってもらいたくして書いた。

活動家の人たちだけでなく、まだ労働組合に入っていない人たちにも読んでもらって、その感想を話し合うことが、個人加盟の産業別労働組合に入るきっかけになることを念願しながら書いた。その意味では杉浦正男さんのすぐれた入門書『組合活動のしかた』などの副読本にしてもraithたくて書いた。またこのルポルタージュが、未組織の仲間たちとくわしく話し合わなければ

ばならない時間を、少しでも短くでき、また話し合う内容を少しでも豊富にするのに役立てば幸いである。

「個人加盟の産業別労組」が生まれてきた労働運動の歴史や、第二組合などの組織破壊と、どうたたかうかなどの問題、個人加盟産業別労組のもっとくわしいことなどは、前記の杉浦さんの著書や、その他のものを勉強して下さい。

最後に、このルポルタージュの取材に協力し、あるいは指導して下さい、各産業別労組のみなさんに心からお礼を申しあげます。またこのルポルタージュを生み出す推進力になった太郎書店のみなさんに感謝します。

一九六七年三月



目次

はじめに

詩 “樹の根が岩を砕くように”

9

---

東京商業労働組合

一、どこで働いても面白くねエ

三年間に

七回も職場を変えた

14

二、働く者に辛抱させて

金がなるのは

資本家だけ

24

——全国金属労働組合・板橋地域支部

三、ああ組合があつたらなア

女装でビール獲得の

宴会闘争

四、いっせいサボターシユの後で

忘年会に社長を招待

百万円獲得

——全国金属労働組合・品川地域支部

五、会社が

大きく発展した後は

古参の労働者にいやがらせ

——東京私学単一労働組合・青葉幼稚園分会

六、砂場に砂もなかった幼稚園が

いまでは

運動会の賞品も

山盛り

1. 十人のうち八人の先生を首切り
2. 個人加盟労組があったから勝利できた

---

東京自動車交通労働組合・目黒支部

七、不当な“下車勤処分”の撤回へ

新妻も

夫を支持して

がんばった

1. 始めは社長の第一の気に入りだった
2. あんたは組合にだまされているのよ
3. 労働者の大船は団結だった

日本映画テレビ産業労働組合

八、オバQのテレビ漫画のかげにも

個人加盟労組の仲間たちがいる

130

全国建設及び建設資材労働組合

九、一日の純利益千四百万円のかげに

無権利で働く

野丁場の建設労働者

148

東京医療単一労働組合・A病院分会

十、いつも

同じ顔ぶれの

金太郎飴から

非公然組合員を七倍化したカギは

1. 一人でもたたかう副看護婦さん

167

2. グチでも悩みでも自由に話そう——一年で

七倍化したA病院分会の経験

171

---

東京私学単一労働組合・えい進学園分会  
十一、学園ぐるみ

公然化のよろこび

公然化への四原則を守った

勝利

1. 憲法では保障されていても
2. 盈みちあふれ、そして進む

200 191

---

全国金属労働組合・下丸子地域支部  
十二、夜明けをめざす

労働者の合言葉は

“すべての職場に組合員をつくろう”

1. 企業のワクを越えた大きな組織へ
2. 非公然でもしぶとく、しなやかに

---

勝利のためにあらゆる要求をもちよって

### 十三、全都単一労組一万人決起集会

氷雪と

寒波の中に

燃える闘魂

1. 一九六七年二月一二日
2. 胸をうつビラ、ビラ、ビラ
3. 「入る時は一人でも……みなさん、ともに  
頑張ろう」
4. 人間の誇りをとりもどすたたい

あとがき

杉浦 正男

樹の根が岩を砕くように

山  
岸  
一  
章

ひとすじは毛のように細く

ひとすじは糸のように柔らかいが

若い樹の根は

地上に

美しい花を咲かせ

ゆたかな果実をみのらせるために

薄い土の下に堅い岩があれば

岩の裂け目に突き刺さっていく

強い風が若樹をゆさぶり

なが雨が岩にまで浸みこむ

冬の寒さはきびしく

夏の日照りは烈しい

が、樹の根は強く生き続ける

無数の支根とひげ根を伸ばし

しつかりと岩盤に根をはる

もう嵐も、樹を倒すことはできない

樹の根はさらに長く、ふとくなる

岩も割るほどの強さと力を持つ

ついには堅い岩も砕く、粉ごなに砕く

岩は堅くとも過去のものだからだ

樹の根は柔らかくとも生きているからだ



一人ひとりが生きて、働いて、闘っている

いのちと力と希望を一つにした

個人加盟の産業別単一労働組合は

樹の根が岩を砕くように

社会の堅い岩を砕くのだ

樹の根は糸のように柔らかくとも

砕けない岩はないのだ

□ カット  
橋本  
哲

□ カバー  
武川  
耕

東京商業労働組合



一、どこで働いても面白くねエ

三年間に

七回も職場を変えた

人口千百万人をこえた東京は、世界一の巨大都市にふくれあがっている。千百万人といっても、その生活は千差万別でピンからキリまでさまざまである。

汚職、ゆすり、詐欺、横領と悪事の限りをつくしている自民党の大物代議士が、帝国ホテルで一人分一万数千円の夕食をとっているかと思うと、ラッシュ時間の満員の国電を、二十五円の即席ラーメンで腹ごしらえした国鉄労働者が運転している。すし詰め電車に乗っている労働者の家では、一日中働いても百円前後にしかならない内職をしている妻が、子供の世話もできないでいる。五十円のチョコレートではもったいないから、二十円のキャラメルでがまんしなさいと、子供をなだめたり叱ったりしている母親がいるかと思うと、銀座四丁目の和光では数百万円もする宝石が売れ、六十万円もするハンドバッグが並んでいる。デパートでは二、三十万円の正絹の訪問着が毎日のように売れ、百万円以上の訪問着、七十万円もするつづれ帯を買う人もいる。日本で三百家族といわれている独占資本階級の娘は、こんな着物を百も作ってか

ら嫁入りする。スキヤ橋の洋服屋「壱番館」では、生地代四、五万円、仕立て代二万五千円の背広が最低である。その背広をふだん着にしている連中は、二、三万円の下着をきて、一万数千円の靴をふだんばきにしている。大会社や官庁のトップクラスの連中である。

東北の漁港のある町の高校を卒業した岩木港一君（仮名）は、有楽町駅に近い、ある大会社のビルの地下にある社員食堂でもう二年近く働いているが、その前は上京してからの三年間に主に銀座の高級レストランを七回も職場を変えた。どこの職場も、人間らしく生きたいと思っている岩木君にとって、面白くなかったのだ。

有楽町から、スキヤ橋を中心にして銀座にかけての一带は、日本の消費文化の中心である。ソニー、三愛、和光などのビル。東宝、東映、日活など映画会社の本社ビルや日劇、日生劇場、宝塚劇場などの劇場群や数えきれない封切映画館。朝日、毎日、読売の新聞社。そごう、阪急、三越、松坂屋、松屋、小松ストアなどのデパート群。その他東京会館や、大会社の本社ビルが林立して、その間をぬうようにして新幹線が通過し、高速道路の下は風雨知らずの西銀座デパートになっている。地下には地下鉄が三本も走り、地下の大駐車場も完成している。夜空を飾るビルの屋上の広告塔やネオンの豪華さは、この消費街の象徴である。

東北から始めて上京したばかりのころの岩木君は、この街の夜景の美しさに目を奪われた。ウインドーに陳列されている商品の豪華さに驚いた。岩木君は高校卒だけの勤め人になるよりも、「腕千金」の洋食のコックになろうと考えたのだが、働きだしてみると、日本最高の消費街は、「見ての極楽、住んでの地獄」だった。ビーフステーキが二千円もする高級レストランでも、調理場は店とはまるで別世界で、岩木君たちは働く人間として認められなかった。

調理場の仕事は、円乗淳一氏の「摂氏五十五度」という小説に書かれているとうりで、特に真夏の暑さは常識ではとても想像もできないひどさだった。円乗氏の小説からすこし引用させてもらおう。

「調理場の中は暑いだけでなかった。それはむしろ釜の中の様な暑さなのである。七坪ばかりの調理場には六尺のガスレンジが二台すえつけてある。一つには六つのバーナーと二つの天火がついている。今一つの方は三尺巾のグリル板と直径五十センチと言う巨大なバーナーが一つついている。このバーナーの上には六十五番のフライパンに八升のラードが煮立っている。グ  
リル板はカッカと熱気を吹いて、その上には直径一尺五寸のズン胴ナベが二つ、だいたい百人前のカレーソースが煮立っている。その他三台の営業用炊飯器、ガス自動湯沸器。スープレスト  
ックが煮えくり返り、ドミグラスがふきこぼれ……。低い天井には蒸発したラードの湯気が真

黒な滴になって凝結し、時々熱したガスレンジの鉄板に滴下して青い煙をあげる。

調理場には、一間巾の窓が二つついている。勿論この二つの窓はガラス戸を全部外してあけっ放しになっている。だが二尺向うはとなりの建物のモルタルの壁だ。窓の上には合計四つの換気がブンブンまわりつづけている。しかし、そんな事ではとてもさばき切れない熱気と湿気なのだった。この中では、何一つ体を動かさなくても、じっと立っているだけでも、みるみる全身の毛穴から汗が吹きだして来るのだった」

「……仕事場では、もう戦争がはじまっていた。ガスレンジのすべてのバーナーには青白いガスの焰がもえさかり、平鍋の湯が煮たぎっていた。スパゲッチ、マカロニ、付合せのサヤインゲン、フライポテト、それらを先ず、ボイルする。それが出来るまでに、英一はカツライスの肉を百枚きる。それが終るときり出しの仕事はやめて、ストーブ前にうつる。二番コックの彼はストーブ前の仕事の責任者である。朝の仕込みは、どんな事があっても十一時までには完全に終らせなくてはならない。ポタージュを仕込み、白ソースを仕込み、カレーソースを仕上げねばならない。ドミグラスに味をつけ、付合せの温野菜を作り、天火の中では三羽のローストチキンと二キロの牛ロースを焼いておかなくてはならない。この仕事の中では彼はすべてを忘れる。仕事というより、むしろ時間が彼を追いまくるのだ。彼の眼は殺気立ち、苛立ち、物も言わずに汚れたスパテルやフライパンを洗場へ放り出す。渦まく熱気と湯気の中で、誰も



が口一つきかず立働いている。話す気力もないままに、時間のベルトにのせられていると言ふ感じだった。時たま、とてつもない声で流行歌の一節をどなる奴がいる。そして、ふいに洗場の少女に抱きついたりする奴がいる。彼女らの午前の主な仕事は飯を炊く事だった。一斗入っている米袋をかかえあげて米とぎ機にあける。ホースでその中へ水を注ぎハンドルをまわすと一度にそれだけの米がとぎ上る。この仕事を四回くり返して一俵の米をとぎあげ、それを目の細い金網のザルにうつして水を切っておく。その仕事をやりながら、前夜の汚れものを洗い、次々と流しへなげ込まれるフライパンや平鍋やmana板を洗いつづける。手拭を水にひたしてはひたいをおさえ、くびすじを冷やす。汗は彼女らのほつれ毛をベッタリとうなじや頬にはりつける」

岩木君が働いて来た調理場も、大体同じだった。高校を卒業してから、最初に住み込みで働いた銀座の有名な大きなレストランでは、朝八時から夜九時半までの十三時間半の勤務だった。そして賃金は一カ月働いて、たったの三千五百円だった。食事つきといっても、まずいメシで、朝などはタクアンと味噌汁だけだった。夜、つかれきって眠るふとも垢だらけの汚ないやつだった。冬になってもこたつがなく、部屋にはテレビも入れてくれない。日曜、祭日なしで、休みは月二日だけ、それも替りばんこに休むのだった。一カ月三千五百円の賃金では、

全くの小づかい銭で、季節の変わり目の衣類も買えない。郷里でのびのびとした高校生活をすごしてきた岩木君には、なんの楽しみもない、ちつそくしそうな毎日の連続だった。それでも岩木君は仕事をおぼえるまでのがまんと考えて、そのレストランで一年半も働いた。

そして二度目の冬がきた時、住み込みで働いていた者は全員ががまんでできなくなった。部屋にテレビを入れてくれ、ふとんにこたつを入れてくれ、月に一日は店を休んでみんなで休めるようにしてくれと、みんなで話し合つて要求した。すると年長の三人があつさりとクビになつてしまった。岩木君はクビではなかったが、五、六人の仲間といっしょに、「面白くねエから、やめちやえツ」と、やめてしまった。

それから岩木君は、友人と二人で六千五百円の四畳半を借りて、新聞に求人広告が出ていた西銀座のビーフステーキ専門店で働き始めた。朝九時から夜十一時までの勤務で、大井町の自分の部屋にいる時間は五、六時間だけだった。月給は一万三千円だった。この店で働き始めてから数カ月たった時、いっしょに働いていた同僚が、コンソメスープを仕込んでから、冷蔵庫に入れようとして、あやまってひっくり返してしまった。すると五十歳ぐらいのチーフががんだなりだした。同僚はあやまっているのに、日ごろからいばっているチーフは、「おめえみていない奴はもういらねエ。あしたから来なくてもいい」とどなりつけている。

正義感の強い岩木君は、もう黙って見ていられなくなった。同僚はわざとひっくり返したのではない。不注意をあやまっているのにヤメロとはひどいと、チーフに言った。するとチーフは、岩木君に反抗されたように勘ちがいして、こんどは岩木君にも怒りだした。岩木君も、分らず屋のチーフにどなり返してその場で、同僚といっしょにやめて、とびだしてしまった。

岩木君は、帰りにスポーツ新聞をたくさん買った。そして求人広告の内容をくらべて、こんどは銀座を離れた自由ヶ丘のフランス料理で有名なレストランに就職した。カレーライスが三百五十円の高級レストランで、月給は一万八千円だった。働きだして一カ月もたないうちだった。ポタージュ・スープを皿に入れて、ウェイターに渡す前にちよつとなめてみた。すると店のほうから調理場を監視していた奥さんが見つけて、さんざに文句をならべてから、クビだという。徳川時代の殿様だつてそんなにカンタンにはクビが切れなかつた筈だ。まるで人參でも切るように、いともカンタンにクビだとわめく奥さんに、始めはあやまっていた岩木君も腹が立ってきた。そしてけんかしてやめてしまった。すると西銀座のビーフステーキ専門店の時とは立場が逆になって、岩木君を応援してくれた同僚も、「こんな店にいられるものか」と、いっしょにやめてしまった。

岩木君は面白くなくてしょうがなかつた。どうしてこの社会では、使うほうの人間は、満足

な賃金も払わないで、わがまま勝手にいばりくさっているのだろう。そして二言目にはすぐに入参のしつぽでも切るように、クビだというのだろう。使われる人間のほうは、どうしてへいこらしてなくてはいけないのだろう。主人には齒のうくようなおべんちやらを並べてペコペコし、目下のものには、まるで自分が主人でもあるようにいばる奴がいるのだろう。あんな卑屈な人間にならないと、この社会を渡っていけないのだろうか。岩木君は、上役にペコペコばかりしているサラリーマンを嫌って、「腕千金」の調理士の道に入ったのに、くさくさしてしようがない。

岩木君は四、五日してから、こんどは乳製品メーカーが、宣伝のために銀座で赤字経営をしている。パーラーに、友人の紹介で就職した。給料は自由ヶ丘の高級レストランと同じ一万八千円で、仕事は気楽だった。そして七、八ヶ月たった時、就業規則が変わることになった。従業員の意見も聞かれたので、ちよっとだけのうがきを言ったら、意見を求めておきながら、「へんな奴だ。ほかの従業員に影響があるといけない」というので、東京駅の駅ビルの中にあるスタンド店に配転されそうになった。岩木君は働く人間として、ごくひかえ目な、休憩時間をちゃんと休めるようにしてほしいという意見を言っただけなのだが、自分でも気がつかないで、独占企業が経営するパーラーで、「アカ」とまちがえられたのだ。岩木君は、そんなふうに見られ

たなどとは夢にも知らなかった。「コックが、スタンドでサンドイッチばかり作っていられるか。ばかにするな」とタンカを切って、そこもまたやめてしまった。

岩木君はまたスポーツ新聞の求人広告をさがして、西銀座に新築されたビルの地下に開店した食堂にもぐりこんだ。開店したばかりで調理場は徹夜だった。ところがこの店では、岩木君と同じぐらいの腕のコックが最初からチーフで、岩木君は下働きや、残飯整理ばかりさせられた。岩木君は面白くなくて、すぐにやめてしまった。調理士はみんな一カ月二百五十円の会費を払って、全日本司厨士協会の会員になっている。そして協会の中では大ボス、小ボスのナワ張りがあつて、親方と子分、先輩と後輩でつながっている。そのつながりの中で、可愛いがられたコックだけが、どこかで開店するところがあるとチーフとして送りこまれてくる。岩木君が考えていたような、腕だけが勝負の世界ではなかったのだ。

岩木君はそれでなくとも、レストランの仕事にいや気がさしていた。自分の月給の全部をほしいても、二、三回しか喰えない、高級料理ばかり作っているのがいやになってきたのだ。自分たちとは別世界にいるような連中のために、汗を流して、うまいものを作る仕事がばからしくなってきたのである。

そして岩木君は、大新聞社の社員食堂に就職した。ところがここの仕事がすさまじかった。新聞社なので、週に二回は夜勤がある。朝八時から夕方五時までの勤務のほか、正午から夜八時までと、夜八時から翌朝五時までの勤務があつて、だれかがばてて休むと徹夜して、また夕方五時まで働くことも珍しくない。そして仮眠するところは、表から見ると堂々たる大新聞社なのに、冷房のモーターが回っているとかなりのじめじめした部屋で、冬でも蚊がいるようなところだった。

岩木君は眠れないで、三カ月も働いているうちに体をこわしてしまった。岩木君は、上京してから始めて、おじさんの家でやっかいになつた。一カ月ほどごろごろしながら、のんびりとした。おじさんは区役所を三十年以上も勤めあげて停年になつた、堅い一点張りの人だつたから、顔を合すたびに、自分の経験で「石の上にも三年」の辛抱だ。「辛抱する木に金がなる」と説教をした。岩木君自身も、「こんどはすこしがんばってみよう……」と考えた。この三年間のこともいろいろに考えてみた。

岩木君は、こんどこそ一つの職場でがんばりぬいてみようと思つた。就職したのが、いま働いている大会社のビルの地下にある社員食堂であつた。寮も浜松町の駅の近くにあつて、初

任給は一万七千円だった。

二、働く者に辛抱させて

金がなるのは

資本家だけ



決心をあらたにした岩木君は、七回目の職場である社員食堂で、朝八時から夕方六時まで（一時間の休みがある）息をぬかず、きっちりと働いた。六人の調理士で千三百人分の昼食をつくるのだから、仕事はレストランで働いている時とくらべると、ものすごくきつかった。岩木君は調理士なのに、洋食の残飯整理までやらされた。三カ月たったとき、主任がやめたので、洋食の仕事ができる岩木君は、給食責任者になった。主任心得手当てが六千円ついて、月給は二万三千円になった。ここまでは、おじさんが言っていたように、「辛抱する木に金がる」のは、本当のようだった。

ところが夏場になると、洗い場のおばさんたちの人手が不足してきた。おばさんたちは朝九時から夜六時半までの勤務で、水槽に一日中かがみこんでお湯と石鹼で千三百人分の食器を洗う。お皿を百枚ぐらいは持ち上げる力仕事でもある。それで昼と夜の食事がついて一万四、五千円の低賃金だった。仕事がきついで体をこわしてやめる人や、もっと楽で賃金の良い職場

を見つけてやめるおばさんがつづいた。五、六人いたおばさんが三人にへってしまった。ものすごい労働強化で、おばさんたちはぶっ倒れそうだ。ホールのお茶くみ番のおばさんも三人のうち一人がやめて、仕事量が一倍半になった。みんながふうふう言っているのに、社長も元締めも知らん顔をしている。「人をさがすまで、きついでがまんしてくれ」とも言わない。

その時、給食係に、頭を打たれてボクサーが続けられなくなった二十三歳の青年が採用された。その青年の給料が一万二千円と聞いて、安いのにみんなびっくりした。いままでよりも少い人員と低賃金で働かせようとする社長や元締めの意図が、すぐにみんなにピンと来た。その青年一人の問題でなく、みんなにふりかかってくる問題だと分ったのである。

調理場で働いている青年も、洗い場のおばさんも、みんながよるとさわると不満を話しあった。そしてごく自然に、みんなは近くの喫茶店に集まって話しあった。給食係責任者で主任心得の岩木君も、責任を感じざるを得なかった。調理士の青年たちは会社に要求しようとして主張し、おばさんたちは、要求では角が立つから「お願い」しようという。岩木君は今までの経験もあったから、青年たちをなだめて、「お願い」することにみんなをまとめた。そして社長と元締めに、みんなが話し合いたいと言っていると申し入れた。

仕事が終わってから、食堂のホールで社長と元締めと話し合った。社長は顔を見せるなり、

「みんなかたまってなんだ」とどなった。声は大きかったが、手はふるえている。みんなは口々に、人が足りないから入れて下さい。新しい青年の一万二千円はいくらなんでも低すぎるから上げてやって下さい。調理士の若いものは、有給休暇が欲しいとたのんだ。みんな静かな声で話しているのに、社長や元締めはガタガタふるえているのが変だった。社長は「誠意ある回答をするから、あすまで待ってくれ」と、最後に言ったので、その夜はそのまま解散した。

つぎの日。「昨日の人はみんな残ってくれ」と連絡してきたので、みんなはホールで待っていた。すると、岩木君だけが事務所に呼ばれた。社長は、岩木君の顔を見るとすぐに言った。

「お前はクビにする」

岩木君はポカンとしてしまった。社長は続けざまに、一人でしゃべりまくった。

「きのうのような、団体交渉のまねみたいなのをするのは、うちの経営方針に反するから、すぐやめてくれ。お前は、みんなの不平不満をさがし歩いているみたいだが、どうしてそんなことをする必要があるんだ。おれに要求したいことがあれば一人一人がくれば良いんだ。それをみんなで交渉することはない。昨夜はこんだん会だというから、いってみると、みんな金のある問題ばかりじゃないか。こんな事を許しておいたら、みんなつけあがるから、お前に責任をとって貰いたい」社長はまたこうも言った。

「この会社で、わしに反抗したのはお前が始めてだ。お前はわしの顔をつぶしたんだ。寮か

らもすぐ出て行ってくれ」

そのあと、岩木君がなんと言つても、社長は、「経営方針に反するから、やめてくれ」の一点張りだ。

昨夜、社長がみんなに約束した「誠意ある回答」というのが、クビだったのだ。二時間ばかり話したが、社長は感情的になるばかりでラチがあかなかつた。岩木君はみんなにもわけを話して、その夜は解散した。元締めは

「一カ月分の退職金も用意してある」

と渡したが、岩木君は給料分だけ受け取って帰った。岩木君は、こんどこそがんばって長く働くんだと誓つて、この食堂でもう一年も働いてきた。仕事もみんなの先頭になってやった。それは社長も元締めも認めていたことだ。それをすぐやめてくれ、寮もすぐ出てくれと言われども、ハイ、そうですかと、出ていくわけにはいかない。岩木君はあれこれと考え、一日たてば、社長の頭も冷えるだろうと思つて、やつと眠つた。

翌日、岩木君は、寮にいる調理場の青年たちが怒つて休むというのを、それではまたそそのかしたと言われると思つて、みんな引っぱつて定時に出勤した。すると元締めががんばつて「働くな」という。冷静に話しあおうと思つて、三十分ぐらい押問答したがどうにもならない。どうしようもないので引きあげたが、岩木君は、つくづく情けなくなつてしまつた。

ひどい低賃金と労働強化でさんざんにこき使って、ちよつとでも待遇を良くしてくれという  
と、会社の経営方針に反するとクビを切ってくる。労働者というのは、そんなに権利がないの  
だろうか。「石の上にも三年」「辛抱する木に金がる」というけれど、労働はなんのぜいたく  
もできない低賃金で、体をすりへらすようにして働いてきて、いつクビ切られるか分らない。  
社長のほうは、この一年間の間だけでも、家を新築し、ぐうたらな大学生の息子に自動車まで  
買ってあたえている。

岩木君は銀座の街を歩きながら、労働したこともないような人たちが、岩木君が一年かかっ  
て働いた賃金を全部合わせても買えないような服装をして、岩木君の一カ月分の賃金ぐらいの  
ぜいたく品を、岩木君がタバコを買う時ぐらいの気軽さで買っていくのを見た。

岩木君はだれかに相談したいと思ったが、こういう問題で相談相手になってくれる人を知ら  
なかった。岩木君は西銀座のレストランで働いている友だちを訪ねてだべった。いろいろだべ  
っているうちに、新橋で働いていたことがある友だちが思い出して言った。

「そういえば、愛宕警察署の前に労働組合の赤旗が立っていて、△労働問題無料相談所▽の  
看板がかかっていたぜ」

岩木君は困りきっていたので、ワラにでもすがる気持ちで訪ねてみた。それは産別会館で本当にその看板が出ていた。岩木君が受付けの人に事情を話すと、その人は親切に聞いてくれて、すぐに東京商業労働組合に電話してくれた。たった一人のことで、忙しい労働組合の人が来てくれるのだろうか、岩木君が半信半疑でいると、産別会館の受付けの人は、東京商業労働組合というのは、一人でも入れる労働組合だと教えてくれた。岩木君は労働組合といえは、小さくても何十人もいる職場で、職場のものがみんな入らなくてはできないものだと思っていたので、食堂で働いているものが一人でも入れる労働組合があったのかと、おどろいたし、ちよびりうれしくもあつた。

しばらく待っていると東京商業労働組合のTさんが、区労協のKさんにも連絡して来てくれた。三人で会社へ行った。社長は出てこないで、元締めだけと話し合った。元締めは「クビ切り撤回は認められない」の一点張りだった。区労協のKさんは、「全く不当なクビ切りだ。クビ切りが撤回されるまで、区労協はあらゆる手段をとる」と言ってくれた。元締めは、「社長とも相談して、三日あとに回答する。しかし寮からはすぐに出ていってくれ」と言った。が、交渉して、「話がつくまで寮から押し出さない」と約束させた。

調理士出身の元締めは、ため息をついておどろいていた。

「お前のように腕のある奴は、クビにすればすぐに、コン畜生、こんなところで働けるかと

出ていくだろうと思っていた。」

たしかに一年前までの岩木君は、そうやってケンカしては転々と職場を変えてきた。自分のほうは、「チエツ。面白くねエ」という感情だけで動いていたのだが、それは雇い主がいつも決まって使う手段に乗っていたのである。

「そしていまも全国の調理場で働いている仲間が、そうやってクビ切られている。いつまでも無権利で、不安定だ。若い時はともかく年をとったらどうなるのだろう。岩木君は、金もないし、することもないので、近くの喫茶店でたむろしながら考えていた。その日、その日をただ生きていくだけで、なんの希望も保障もない。それが働きとうしていく、正直一途のものの運命なのだろうか。元締めのように、社長には毛ひと筋もさからわず、いつも気に入られるように、ペコペコしながら、職場のものを余計に働かせることばかり考えている、あんな犬みたいな人間にはなりたくないと思うのだが、岩木君の耳には、区労協のKさんが帰り道で言った「このクビ切り撤回は難しいから、よほど覚悟してかからないと……」という言葉がこびりついていた。」

約束の日に、岩木君は一人で行った。社長と、社長の親類のものと、労務の相談役をしている経理士とが待っていた。岩木君はとにかく低姿勢で三、四時間もねばって話した。いろいろ

なことを言われた。社長は、「この前は どうして労働組合の者をつれてきた」とまだ感情的になつてゐる。岩木君は、「ここと決めた職場で長く働きたい一心で、仲介をたのんだのです」と説明した。経理士は冷静だったが、「関係のない労働組合に仲介を頼むなんてバカだ。社長や元締め顔がまるつぶれだ。落ち度は君にある」と言った。

まるで理屈のとうらない論法で、岩木君だけがものすごい悪事をしたように責める。まじめに働いてきた労働者の気持ちなどは、まるで考えない言い方だ。それでも岩木君はがまんしてケンカしなかった。岩木君を怒らせて、出て行かせるのが社長側の手だったのだ。岩木君がその手に乗らないで、とにかく働かせてほしいをくり返すので、社長たちも根負けしてきた。その間に区労協のKさんも、社長に電話をして圧力をかけてくれた。そしてついに経理士と別の日話しあうことになった。

つぎの日、区労協のKさんといっしょに経理士とあうと、経理士は「自分が仲介に立つから、区労協は手を引いてほしい。区労協が仲介では成立する話もこわれてしまう」と言った。

「責任もつて、岩木君が職場に戻れるならば、譲歩してもいい」とKさんは言った。経理士があとで岩木君に連絡してきた条件は、形式的でいいから、社長と元締めにあやまってくれということだった。岩木君は、なにも悪い事をしていないのに、あやまるなんて、ケタクソ悪くてがまんできなかった。しかし心配してくれた東京商業労働組のTさんや、区労協のKさんに



相談すると、

「君が経験して分った、働くもののみじめな運命を変えるには、だれかが職場で働く人の中核になって団結を強くするように努力しなければならない。個人的な感情で動いてもこんな社会のしくみは、ちっとも変わらないのだ。職場に戻って中核になって、みんなに団結してたかうことを訴えるのが何よりも大切じゃないだろうか」

と、真心こめて説得された。寮に戻って、調理場の若い仲間たちに相談すると、みんなも、職場に戻ってほしいと支持してくれた。岩木君が久しぶりに職場に戻ってみると、職場はうっかり不平もぐちも言えない、暗い空気が変わっていた。洗い場のおばさんたちは、一人づつ事務所に呼ばれて、このつぎは即時クビだとおどかさされて、「今後、集団で要求するようなことは絶対に致しません」という誓約書をとられていたのだ。

おばさんたちは、家に病人がいたり、子供をかかえた未亡人だったり、みんな生活の苦しい人たちだったのだ。岩木君自身も、主任心得手当をとられて、基本給の一万七千円だけにされてしまった。岩木君は東京商業労働組合に入って、職場に組合員をすこしづつふやしたが、岩木君を支持して組合に入ってくれる人は、いやがらせをされり、昇給をストップさせられたりして、ほとんどが職場を去ってしまう。社長は、いまままで自由だった寮にも、規則をつくって門限を決めたり、職場の仲間をスパイにして、岩木君たちを監視した。

それでも岩木君は、小人数の仲間としっかり団結して、じつくりと活動を続けた。同じように個人加盟の組合活動をしている東京出版印刷労組委員長杉浦正男さんの『労働組合のつくり方、活動のしかた』というテキストをみんなで勉強すると、岩木君たちのいままでの生き方、考え方が変わってしまった。

東京商業労働組合の他の組合員がたたかっている経験と交流したり、デモや集会に参加したり、みんなで長いこと話し合っているうちに、

「こん畜生、面白くねエからやめちやえ」

「とんずらしてしまえ。そのほうが、あとくされなくて良いじゃないか」

という考えが、しだいに消えていった。この職場が面白くなくて、ほかの職場へ行っても、どこも面白くねエのだ。それよりいま働いている職場で、仲良くなった人たちと力を合わせて、職場の空気を変えていくのだということが、みんなの経験もまじえて話し合っているうちに分ってきたのだ。

こうして東京商業労働組合の根っこは、岩木君の職場に着実にのびて行った。一年以上もかかった。労働組合はかくれていても要求がかり取れることが分ってきた。寮の門限も午後十時で、おくれるときは寮長に電話することになっていた。それも組合員が中心になって、寮生全

員がみんなでかわりばんこに電話をかけているうちに、寮長のほうが参ってしまった。いまでは寮長の顔も立てて、入り口の鍵は十時にかかるが、窓から自由に入入りするのは黙認するようになってる。

また人手不足になって、去年のように苦しくなってきた。組合員はみんなで智恵をしぼって戦術を考えた。そして昼時に千三百人もがどっと押しよせてくる社員食堂だから、もりつけをほんのちよつとづつ遅らせた。すると大会社の社員たちは、食事をするために二十分もならば長い行列になった。人手不足ということは社員たちの耳にも自然に入った。社長や元締めのスパイ役をしている給食の主任だけが、孤軍奮闘したが熱気と殺人的な忙しさでついに倒れてしまった。洗場でも労働強化の分は、すこしづつ職制にしわよせられるようにした。がまんできなくなつて、人をふやしてくれと社長に泣きついたのは、社長の腹心の職制たちだった。お客さんの会社員たちからも苦情が出た。そして新しい人が三人も採用された。

岩木君たちはうれしかった。この間、別にサポータージュしたわけではなく、忙しく働きながら、極度の無理をしなかっただけだから、社長も職制も、組合の戦術だとは全然分らない。組合のあることもはっきりとは分らないのだ。東京商業労組の組合員は、職場の中ではまだ少数だった。そしてかくれて活動しているのだが、みんなで智恵を出しあってみんなで力を合せて活動する。組合がなかった去年の人手不足の時とくらべて、なんとという大きな変化だろう。た

とえ小さくて、かくれていても労働組合はこんな大きな力があるのだから、もっと大きく、どの職場にもあるように広がったら、どんなに大きな要求でもかち取れるだろう。

まだまだ、始まったばかりで困難はたくさんある。しかし岩木君は、一年前、二年前の岩木君とは別人のようだ。すっかり自信をもって、地域の商業労働者の中核になって、生きがいのある充実した活動を続けている。

全国金属労組・板橋地域支部



三、ああ組合があつたらなァ

女装でビール獲得の

宴会闘争

野川清三（仮名）君は東京北部の工場地帯にある自動車部品工場の労働者で、ことし二十歳になる青年だ。野川君の故郷は秋田県で、雪が二メートルもつもる山村である。

中学を卒業してすぐに、いま働いているY工業に就職してきた。野川君は東京に来てから五年もたつのだが、銀座、浅草、新宿、渋谷などの繁華街は名前を聞くだけで、まだ行ったことがない。無理して行って見たくもないのだ。集団就職列車で上京してきた日、上野駅前からバスに乗せられて、あわただしく羽田空港、東京タワー、皇居などを引っ張り回された。バスの窓から眺めた着飾った人たちがお祭りのように歩いている、繁華街がどこだったのか覚えてもいない。

野川君の工場がある荒川の支流の新河岸川の一帯は、殺風景な工場ばかり並んでいてなんのうるおいもない。有楽町から西銀座への一帯の華やかさにくらべたら同じ東京都内とは信じられないくらいである。

野川君の家は三反百姓だったので、村で電気屋をしている長兄夫婦のほかは、まだ中学生の妹をのぞいて、みんな外へ働きに出ている。中学を卒業する時、同級生たちはみんな機械工にあこがれていた。野川君も学校に来た求人広告のチラシを見て、東京のY工業に応募した。試験があるのだらうと思っていると、職業安定所から会社に連絡しただけですぐに採用が決まった。求人広告の案内には、「中卒者日給三百円。勤務時間午前八時より午後五時まで。日曜日ごと休日。年二回全額会社負担で旅行。賞与年二回。昇給三月。臨時昇給は十月。寮設備完備。夜具実費」などと書いてあった。

集団就職列車の中で、心細くて不安な一夜をすごした。朝早く上野駅に着いた。フルスピードの東京見物をした後、池袋の職業安定所に寄って、会社については午後だった。工場の周辺の道路は石ころばかりだった。工場に入ると胸がむかついてくる油の臭いがある。すごかった。いっしょに入職したのは中卒者三十人、高卒者二十人の五十人だった。その時、働いていたのは六十人弱だったから、従業員はたちまち二倍近くにふくれ上がったのだ。社長は、チヨビひげを生やした小男で、新入者を食堂に集めてあいさつした。

社長は、「父母の恩は山よりも高く海よりも深い。その恩に報いるためには、たとえ石にかじりついてもがんばる根性が必要だ。そして故郷へ帰る時には成功して錦を着て帰るのだ。それまでは私が飯の親になる。親があつて子、子があつて親。親牛がふとつて、たっぷりした乳



を子牛に吞ませることもできる」などと一時間以上もべらべらとしゃべった。

さて、「設備完備」の寮は、工場の二階だった。始めの一年間ぐらゐは六畳に八人、八畳の部屋に十人も押し込まれていた。二人づつは押入れに寝るのだった。労働基準法では六畳に四人が最高で、それ以上は違反だということなど、だれも知らなかった。それに食事もまずくて量が足りなかった。朝などちよつとおそいと、味噌汁がなくなっていた。夜六時まで残業した時も同じだった。食費は朝三十円、昼と夜は五十円で一日百三十円で安いのだが、それも日給三百円で働かせるための会社のカラクリだった。税金や社会保険など差引かれると、最初のころは手取りが千円以下だった。五百円札一枚にあとバラ銭だけということもあった。

賞与も求人案内に書いてあった年二回にまちがいがなかったが、最初の七月は高卒も中卒もいっしょで、五百円札一枚だけだった。腹を立てて高卒の二十人はほとんどがやめてしまった。その次の暮れの賞与は、きっちり半年働いたのだから、こんどこそはと期待に胸をおどらせて受け取った。しかし封を開いてみると、なんと〇・二五月分の二千円だった。一ケタちがうのではないかと思った。袋をいくら逆さにして振ってみても千円札二枚のほかはお出でこなかった。いっしょに入職した五十人は、五年後の現在では五人しか残っていない。それでも毎年の入職者のうち一割残っているのはまだ多いほうなのであった。

仕事は機械工といつても、単純な作業が大部分だった。鋳物の自動車の部品に、百分ノ二ミ

リの誤差で旋盤やフライス盤にかけ、ボール盤で穴をあけ、ヤスリでバリを取り、パフをかける。製品をガソリンで洗って圧搾空気で乾かす。一カ月もたてば、古いものも新しいものも同じぐらいに働ける加工作業だった。

毎年四月になると、新卒者を大量に採用する。そして一、二年たつうちに大半のものが失望してやめていく。それでも会社は、安い給料に子供のお年玉程度の賞与しか出さないのだから、一人前に働かせて大もうけする。職制以外の労働者が古くなってくると、いやがらせをしてやめさせる。それがこの会社のカラクリだった。この会社だけでなく、多くの中小企業の実態なのである。

野川君ははじめの一年ぐらいは、工場からほとんど外へ出なかった。金がなかったからだ。それに東北のブーゾー弁が恥しくて、できるだけ口をきかないで働いていた。二年目に食堂に散らかっていた新聞を読んで、根っここの会に入った。入会金百円に一年分の会費六百円を払うと会員章を送ってきた。同じ「根っここの会」でも都心へは行きたくなくて、埼玉県の会に出かけた。りっぱな会館が建っていて土曜日には一泊できた。花見、海水浴、ハイキング、運動会、ぶどう狩りなど各季節の催しがあるほか、出身地方別に集まってトランプや花札をして遊んだ。いなかのことを、東北弁で思いきり話しあえるのは、解放されたようで楽しかった。し

かし一年もたないうちに物足りなくなってきた。「根っこの会」で聞かされるのは、「いっしょう懸命に働いて、りっぱな青年になって下さい」のくり返しだった。

自分もそうだったように、なにも知らない新卒者を山村、漁村から採用してきては、低賃金で働かせて、古くなると失望してやめるようにしむける工場で、いくらいっしょう懸命に働いても、将来の希望はもてない。腕に技術を身につけられるわけでもない。「根っこの会」で言っていることは、そこでもまんをして、まじめに働けというだけだった。

野川君が「根っこの会」にも矛盾を感じ始めていた時、近くの工場で働いていた同郷の友達にキャンプにさそわれた。千三百円の会費でバスを借り切って富士山ろくの西湖へ行った。野川君の工場から五人が参加した。フォークダンスやバレーボールは、「根っこの会」のハイキングと同じで、どこかの援助がある「根っこの会」よりは会費も高かった。しかし、なんとなくふん気がちがっていた。底抜けに自由でのびのびとしていた。野川君は久しぶりに思い切りさわいだ。心の底からたのしかった。

キャンプが終わってから一週間ぐらい後、野川君は、キャンプを計画したサークルの責任者と同郷の友達に呼ばれた。ビヤ・ガーデンでビールを呑みながら、キャンプのことや職場のことを話し合った。友達が話した友達の職場の賃金の安いことや、寮のめしのまずいこと、味気

ない生活のことは、野川君の職場や寮と、作っている製品がちがうだけで、そっくり同じだった。野川君は看護婦の妹が働いている病院や、兄が働いている郵便局では労働組合があつて、賃上げ闘争や盆、暮れの一時金闘争をしているのを思いだして、思わずタメ息をつくようになつた。

「ああ、組合があつたらナア」

すると、サークルの責任者のKさんがすかさず言つた。

「組合はあるんだよ。ぼくは入ってるんだけど、君も入らないか」

Kさんが、それから詳しく話してくれたのが、個人加盟の全国金属労働組合・板橋地域支部のことだった。職場で一人でも加入できるし、一人でも要求を実現させるために闘えること、組合員を拡大すればもつとたくさん要求がかり取れることを、いくつもの実例をあげて説明して、熱心に加入をすすめてくれた。野川君は自分の力でどこまでやれるか分らなかつたが、経営者に要求をぶつけて、たたかうことが面白そうだった。ちよつと考えてからとにかく加入しでやってみる決心をした。

野川君は、いく度か分会の会議に出席した。仲間たちの話を聞いているうちに、自分たちがどうして低賃金なのかという社会のクラクリや、苦しい状態におかれているのは、自分だけではないことがおぼろげながら分つてきた。それに地域支部の仲間たちが、どんなふうに関つてい

るのかも分つてきた。いろんな本やテキストも読ましてもらつた。日本の労働者のたたかひの歴史や、その歴史を受けついで青年労働者がいかに生きて、闘つていくべきなのかということも分つてきた。野川君は生きがいのある充実した前途を見出した。明るい希望もわいてきた。それは社会のカラクリをかくしたまま、いっしょう懸命に働いて、りっぱな青年になつて下さいと、「根っここの会」で聞かされたこととは大分ちがつていた。

野川君は活動を開始した。野川君は職場の中を見回した。職場には労働者が要求していることはたくさんあつた。それらの中で自分一人でも解決できそうな問題はなんだろう。どうしたら仲間をふやすことができるかと、毎日、毎日、真剣に考えた。

野川君はある日の分会会議で、自分で考えたいくつかの問題をだして相談した。寮のめしがまずくて量が少いこと。寮の部屋が汚くて冬は寒く夏は暑いこと。会社の慰安旅行の時、みんながビールを呑みたいのに、呑めないで不満をもっていることなどだつた。野川君の話を聞いた分会の仲間は、慰安旅行の時にビールをかり取ることができれば、仲間をふやすことができると意見が一致した。というのは、野川君の工場では十六から十九までの未成年者が大部分だつたので、旅館で、徳利に一本づつつく日本酒では口に合わず、追加される一升瓶の酒も結局は年配の職制に呑まれてしまうのだった。良い気持ちになるのは職制ばかりで、みんなはちつとも面白くないのだった。

慰安旅行で、もし、みんなが満足できるだけのビールをもち取れることができれば、組合員を拡大できることが十分期待できた。野川君はまず慰安旅行を思い切り楽しくするのに、いろいろと頭をひねった。分会の他の会社でやった旅行闘争の経験も参考になった。この闘争の計画をいろいろとたてる過程で、野川君は三人の仲間を組合員に迎えることができた。しっかりしていることと、口の堅いことで三人をえらんで、分会の仲間の力も借りて話すと、三人はすぐに加盟したのだった。ビール取りの計画を四人で話し合っているうちに、新しい組合員が親友をさそって、組合員はさらに二人ふえて六人になった。

待ちに待った慰安旅行の日がきた。バスにゆられて熱海に近い温泉地に着いたのが夕方六時。七時から宴会がはじまる予定だ。みんな最後の打ち合せもすんで、準備は終わった。七時すぎ、宴会がはじまった。社長、工場長、幹事のあいさつと例年の通り味気ない宴会だ。でてくるのは日本酒だけ。ビールの姿は影もない。日本酒は慰安旅行だということで、会社の出入りの業者が持ってきたのが主なのだ。あちこちで不満の声が起こりはじめた。

野川君たちは、自分たちのまわりに二十人ばかりの仲間をあつめて、呑んだり、歌ったり、エッチな話をして賑やかに騒ぎだした。アルコールも大分まわって、メーターが上ってきた。ころは良しと四人の仲間が女装して宴会場に現われた。わっという歓声があがって大騒ぎになった。女装した仲間は、投げキッスや、モンキーダンスをして、社長、工場長、課長、幹事に

さかんに愛きよをふりまいた。社長は大喜びだ。笑いこずれた顔がもう締まらなくなっている。女装した仲間のこっけいなしぐさに、見ている者は腹をかかえてころげ回り、笑いすぎて涙を流している者もいる。みんなが最高に楽しんでるとき、野川君たちは幹事にビールを要求した。みんなも口々に、ビール、ビールと大声で叫んだ。幹事も気分が最高に良かったし、ふんいきにすつかりのみこまれ、社長も大喜びなので、要求されただけのビールをどんどん出した。大きな旅館で、金さえ払えばビールは、冷蔵庫にいくらでも入っているのだった。社長は、「今回の旅行は最高だ。芸者も女中もいらぬ。わが社は自分たちの力で大いにゆかいにやろう」と、最高にこぎげんだった。そのうちに仲間が用意してきたマンドリンやハモニカの伴奏で、三十人ぐらいが大広間いっぱい輪をつくり、盆踊りをはじめた。そしてまたビールを要求して、全部で六ダンスもかち取った。昨年までの宴会とはまるで変わって、全員がころから楽しむ宴会になった。

ビール獲得闘争は大成功だった。始めは、社長の前でビールをくれと言えるかどうか、心配だったのだが、それが言えたというのはみんなに自信をつけた。それに六ダンスのビールは、組合員が団結して、みんなの切実な要求をとりあげて、みんなと一つになった戦果だった。社長は後になって、金を払う時にしぶい顔をしたのだが、アルコールの力で要求されたと考えて

いたのだった。

このゆかいな「宴会闘争」をやったとき、六人の組合員の年齢は、十九歳の野川君がいちばんの年上で、いちばん年下は十六歳、平均で十八歳という若さだった。どこかの職場で労働組合員だったという経験は、だれもない、少年のおもかげが残っているわかものばかりだった。

女装で踊って、みんなを笑いこぼさせながら、みんなが飲みたがっているビールを要求するというのは、富士山ろくの西湖にバスでキャンプに行ったとき、たのしく遊んだ経験がヒントになったのだった。そして、わかもの力と創意をのびのびと発揮させた、この「宴会闘争」では、個人加盟労組のたたかい方を熱心に追求してきた全国金属労組・板橋地域支部の指導が第一にすばらしかったのだと思う。また野川君たちが、いままでの労働組合の幹部中心の型にはまった、「スケジュール闘争」といわれている、やり方の経験がなかったことが、かえって、さいわいしていたのかも知れない。

「ことしの慰安旅行は、ビールが飲めておもしろかったなア」

「うん。おもしろかった。社長が、笑いすぎて腹をおさえたり、最後にはしげい顔で金をだしたり……」

「あのビールを出させたのは、ほんとのことを打ちあけると、おれたちが労働組合をつくっ



「考えたんだ」

「ほんとか？」

ビール獲得で、組合員とおなじように活躍した青年も、慰安旅行のあとで、個人加盟労組のことをくわしく話しすると、よるこんで加盟した。組合員は七人になった。

その後も、毎年会社主催でやっていた野球大会が、「不景気」を理由にして延期されている問題をとりあげた。七人の組合員が、なんどもそうだんをしてから、「会社がやらないのなら、みんなの力で、ことしも野球大会をやろうよ」と、各職場からの要求で、野球大会を実現させた。自主的に運営したので、例年の野球大会よりもおもしろかった。そして賞品だけは会社から出させた。社長も賞品を出さざるを得なくなってしまったのだ。

これで七人の組合員は、さらに自信を固めた。いままでバラバラだった約六十人の寮生も、七人の組合員の努力でまとまってきた。

職場での指導権も、いままで職制ににぎられていたのを、七人の組合員がにぎりはじめていた。しかし、まったく非公然で活動していたので、表面的には職場や寮で、つまらない仲間あらしやけんかがなくなっただけで、会社側は、七人の組合員が、労働組合として活動していることには、まったく気がつかないでいた。

四、いっせいサボタージュの後で

忘年会に社長を招待

百万円獲得

野川君の職場では、ビール獲得の宴会闘争の後、七人の組合員が自信をもっただけでなく、働いていても、寮で休んでいても、みんなの心がまとまってきた。職場のふんいきも明るくなってきた。組合員も一人、二人と着実にふえてきた。

仕事は忙しかった。みんなは毎日のように残業し、ときには徹夜することもめずらしくなっていた。ガソリンにまみれて、いくら働いても、後から後からと仕事がたまった。みんなは暮れのボーナスを楽しみにして働いた。仕事がいくらでもあつて、仕事に追われて働いているのだから、みんなが暮れのボーナスに期待するのはあたりまえのことだった。

毎月の給料では、喰っていくだけでせいっぱいだったから、みんなは暮れのボーナスだけをあてにしていた。出かせぎで体をこわした父に送金したい。久しぶりに故郷で正月をすごしたい。両親や弟や妹に何かみやげを買って帰りたい。つるしの既製服でいいから背広を買いたい。オーバーを買いたい。カッコーの良いジャンパーを買いたい。靴も古くなっている。夜具の毛布も欲しい。病氣した母の借金をすこしは助けてやりたい。みんなはめいめいのつましい夢を抱いて、仕事をしていた。

ボーナスの日が近づくとつれて、職場でも寮でも、今度のボーナスはどのくらいか、ということが話題の中心になってきた。どこの工場では二ヶ月分に決まったらしい。いや、あそこの会社では二・五ヶ月分だ。あの工場では一・八ヶ月分らしい。一・八ヶ月分といったって、基準になる基本給がおれたちの工場より二倍も多いのだから、おれたちにあてはめれば三・六ヶ月分と同じだ。うちの会社はどのくらいだろう？このくらい仕事をあおっているんだから二ヶ月分ぐらいいは出すと思うよ。いや、あのケチ社長じゃあぶないぞ。みんな、よるとさわるどボーナスのことで話し合っていた。野川君たちの全国金属・地域支部の組合員は、そんな話題の中に入って行って、一部にあるあきらめムードをなくすように努力した。そのうちに、だれかが言いだした。

「もし、ボーナスがおれの思っているより少なかったら、ケタクソ悪くて働けねエや。ボーナスのつぎの日から、おれは会社を休むぜ」

組合員の一人がすぐに同調した。すると、みんなは「おれもだ」「おれも休む」と言っ、とうとう、もしボーナスが少なかったら、つぎの日から、いっせいに会社を休むということに、大多数の労働者の話が決ってしまった。

会社は、こういう職場の高まりに驚いて、あわてだした。そしてある日、突然、全従業員を集めて朝礼を行い、社長がボーナスについて発表した。といっても、社長は、不景気だという

宣伝を長々としやべった後で、たった一言、「今度のボーナスはそういうわけで一・一七ヶ月分です」と言っただけだった。みんなは、その額があまりにも少なかったのでボー然としてしまった。職場に入ってから、みんなはそこで固まって話し合っていて仕事をはじめなかった。野川君も、二人、三人と集まって話している職場の仲間に加わって、九時すぎまで、始業から一時間もしゃべっていた。すると課長が事務所から出てきて、「みんな固まって話をするな。時間中は仕事をしろ」と圧力をかけてきた。

そこでみんなは、片方が仕事をすれば、片方がさぼって話し合う。片方が仕事を始めると、片方は仕事をやめて話し出すというふうに、半分づつ働きながら話し合いを続けた。そして昼休みには一ヶ所のストープにみんなが自然に集まった。職場集会のようになってしまった。そして司会者や議長がいたわけでもないのに、みんな言いたいことをしゃべっているうちに、ボーナスをもっと出さなければ残業をしないということに、三、四人を除いて全員の気持ちが固まってしまった。野川君たち組合員が、とくにリードしたというわけでもなく、みんなはお互いに残業拒否を確認し合ったのである。

三時ごろ、職制が残業をしろといいにやってきました。みんなは顔を見合せて黙っている。みんなが話し合って確認したことで、最初に口を切る人間が必要だった。

野川君はみんなの視線にうながされて、職制に言った。

「ボーナスが少ないから、残業できないと俺が言っていたと、課長や工場長に伝えてくれ」  
みんなも、「そうだ。そうだ。残業なんかできないと言ってくれ」と、口々に言つて、職制を追い返してしまつた。

夕方の五時ごろ、手を洗つて帰り支度をしていると、野川君は社長に呼びだされた。社長も頭にきていたらしく、野川君の顔を見るといきなり、ガミガミと言いだした。

「君は、みんなを扇動しているそうじゃないか。おれの会社が入らないのなら、さっさとやめたらどうだ。別にたのんで引き止めんよ。……それで、どうして残業ができないんだ。言いたいことがあるんなら、言つてみる」

野川君は負けずに言いかえした。

「ボーナスが安いから、がっかりしちゃつてやれないんです。よその工場では、どこでももっと出しているじゃないですか。世間の相場というものがあるから、聞かれても恥ずかしくて言えやしない。とにかく、ボーナスをもっと出してもらえなければ、残業は絶対にやりませ  
ん」

「この小僧。生意氣を言うな。ボーナスは一度言った以上は絶対に出せん」

社長は怒つてふるえだしていた。二、三年前まで、ズーズー弁を恥ずかしながら、ろくに口もきかないで、悪いあそびもせず、くそまじめに働いていた野川君と、堂々と社長に言い返す

野川君の変化に、社長はおどろいていた。

その時、そばにいた工場長が、社長にわび言をいった。

「野川君には良い点をやっているのに、社長にそんな態度をとるなんて残念だ。みんなが残業しないと騒いでいるのは、私の監督不行き届きで、私の責任です」

こんどの騒ぎは、ボーナスが少なすぎるのが原因なのを、工場長もよく分っているくせに、そんなことをいう五十男の卑屈な態度が哀れに見えた。

その後、職場によつては、「面白くねえから休んじやえ」という声も起きてきた。しかし職場に出てくる者の数が少くなると職制に対して弱くなるし、休めば給料を差引かれるから損だと、野川君たち組合員は「休んじやえ」という人を休まないように説得した。ある職場では、従業員が代表を正式に選出して、物価の上がつていることや、ほかの同じ自動車産業の下請け工場とくらべて、ボーナスが安すぎると社長にかけあいに行った。しかし、答えは「一度発表した以上は絶対に上げない」だった。

少数の職制をのぞいて、残業はしない、仕事はさぼるといふ状態は二日、三日、四日と続いた。みんなはますます大胆になって、朝一時間ほど仕事したあとは、一日中、仕事しないほどに徹底してきた。年末の納期をひかえて会社はだいぶまいつてきていた。社長以下、会社の首脳部が苦慮しているのが分った。しかし野川君たち組合員は、頭を表面に出さないうで、職場の

中にますます深く根をはっているので、会社は全従業員を相手にしなければならなかった。全従業員をなっとくさせる方法は、ボーナスを上げるほかはないので全く手の打ちようがないのであった。

ボーナス問題でもめぬいている時、忘年会をやるうということになった。事務所の人もいっしょやることにした。そしてボーナス問題は抜きにして、社長や部長も呼んでやるうと、電話をかけると、社長も部長もよろこんで参加させてもらうという返事だった。

みんな、社長がきたら、いっせいに盛大な拍手でむかえてやるうということにした。食堂で忘年会をはじめた。三十分ほどして、社長が入ってきたとき、みんなはわれるような拍手でむかえた。数日間のほとんどの従業員の残業拒否とサボタージュで、困りきって心おだやかでなかった社長は、全く思いがけない拍手にむかえられて、まさに喜色满面、顔いっぱい喜びをかくせない表情で席についた。

だれもボーナスのことは言わなかった。アルコールのまわったみんなは、「社長は日本一の良い男だ」とか、「社長だけがたより」とか言ってさかんにおだてた。みんなかわるがわるに社長に酒をついでやったり、茶目ツ気な仲間は社長の肩をたたいたりした。そしてみんな「Y工業社長、バンザイ」を二度も、三度もくり返して、大サーブスをしてやった。

忘年会が終わりに近づいたとき、社長が立ち上がってしゃべりだした。



「諸君がこんなに、私のことを思ってくれて、こんなに嬉しいことはない。これからの発展のために、会社には金がないので私のポケットマネーから百万円を特別ボーナスとして出そう。これはみんながガタガタ言ったから出すのではない。今夜のみんなの気持ちに有がたいから出すのだ。百万円は君たちで分けてくれ」

これには、部長も、野川君たちも、ポカンと口をあけて、あつけにとられていた。野川君たちは、社長がボーナスを上げないことに意地にならないように、忘年会に招待したのだが、その効果はたちどころで、まったく意外な特別ボーナスを獲得する成果になった。会社側の一・一七ヶ月分は金額にすると平均一万七千八百円。それにプラスして百万円を、二日前に入ったばかりの仲間も、課長、係長も全員平等に約一万円づつ配分することができた。課長や係長は一率の配分にぶうぶう言っていたが、みんなは大よろこびだった。

社長は「みんながガタガタ言ったから出すのではない」と言ったが、残業拒否やサボタージュのたたかいがいなければ、忘年会でおだてたぐらいで社長が百万円も出すわけがないのだ。社長は、一度発表したボーナス額は絶対に上げられないと断言したので、ねばり強い残業拒否とサボタージュに手をやいた後、ボーナス増額を自分のメンツに傷をつけないで発表できるきっかけを狙っていたのだった。

野川君たちは、このボーナス闘争で組合員を拡大し、その後もさまざまな職場要求を解決したり、困っている仲間をみんなの力で助けたりして、組合員を数十人に拡大した。そしてほかの職場といっしょだった地域分会から、独立した分会になった。学習活動も活発にしながら、さらにキメの細かい活動を、みんなの智恵と創意を集めて展開している。女装してビール獲得の宴会闘争をしたところとくらべると組合の力は見ちがえるほど強く大きくなった。それだけに会社側も組合の存在を察知して、さまざまな手を使いしたが、たたかいがどんなにきびしくとも、幹部中心の労働組合とちがって、いつのまにか資本家に丸がかえになってしまうようなこととはない。

野川君たちのこのたたかいを指導してきた全国金属労組・板橋地域支部は、このほかの職場でも、戦後二十年間の大企業や官公労の労働運動の経験では考えもつかない創意を發揮して、主に中小企業の未組織の仲間の中で活動を進めている。

板橋地域支部の「非公然での要求とその闘い方」というパンフレットを読むと、職場活動の第一は、みんなの不満、悩みについて、いつも深い関心を持ち、敏感につかむこととしていゝる。そのためにある組合員は、職場の一人、一人の年令、家族、勤続年数、住宅、賃金、会社との関係、ものの考え方を調べ、毎日職場での出来事を日記をつけていることや、「弁当を下げてきたくない」要求をとりあげて給食を実現させたり、「将棋盤がほしい」要求を、みんな

の力で実現させた例をあげている。

第二には、「正しく要求が決定されれば、たたかいは六〇パーセント勝ったも同じだ」という世界労働運動の教訓から、要求をきめるには、(1)その要求は、どれだけの人たちに共通であるか、また、その切実さはどうか。(2)「よしやろう」という人、協力してくれる人はどれだけか、会社の出方などの力関係を考えて、必ず成果をあげることが基本にしている。そして、「手洗い石けん」を支給させるたたかいかいでも、綿密な調査のなかで、もっとも適当な要求をえらんだ結果という実例をあげている。

第三には、「智恵をしぼり、仲間の力をあつめて必ずとれる戦術を」ということで、資本家が労働者の要求を認めるのは、その要求がみんなの声に押されて、要求を認めたほうが、認めないよりも資本家がより得な立場に追いこまれた時であって、そのためには、労働者の声と力を正しく集めて、必要な力関係をつくることだと言っている。野川君が最初にとりくんだ、ビール獲得の宴会闘争もこの実例になっている。

第四には、「一人のどんな不幸も組合の力で」として、つぎのような経験をあげている。

河田さんは六十名ほどの工場で、バフ研磨工をしていた。ある日、作業中、機械に右手をまきこまれて手首を骨折した。四カ月間休んで治療したが完全になおらない。右手がしびれて物

をもつことができないまま、職場に戻ってきた。労災の六割の金では生活できないし、将来の不安もあって出勤したのだ。

ところが社長によばれて、「あんたは、仕事がむりだから明日から来なくてもよい」と言われた。河田さんは会社創立以来、五年間もくもくとして働いてきた。六十歳で子供にもめぐまれず、目の悪い奥さんと二人きりの生活である。仕事でケガしたのに、使いものにならないからクビだというのは、あまりにもひどい。しかし、おとなしい河田さんはだまって社長室から出てきた。

会社からの帰りみち、プレス工のAさんにこのことを話した。Aさんは地域支部のことを知っていたので、その晩、二人で地域支部に相談に行つて、二人とも組合に参加してたかかう決心をした。

翌日、河田さんは出勤した。職場の人たちに、どうすれば良いかと訴えた。パフ工の五人は機械をから回りさせながら、「おれたちだって、いつケガをするか分らない。人ごとではない」「ひどい会社だ」と話しあった。

その日の昼休みは、会社が組合を作らせないために、職制を中心にボーナスについて協議させる日だった。河田さんは、その昼休みの集会で、ほんの二言、三言、ボソボソと訴えた。会社の古株で、おとなしくてまじめな河田さんを見殺しにできないと、おばさんたちも発言し

た。

職制が社長と話したがダメ。職場の代表をえらんで交渉してもダメ。つぎの日も河田さんは出勤した。バフ研磨職場では、この日も全部の機械がから回りしていた。昼休みにはついには全員で社長と交渉することになった。

集団交渉では、「年がこせない」「社長はまた新車を買った。三台目だ。そんな金があるなら回してほしい」という意見も出て、もり上がった。そしてついに社長は、ボーナス二カ月分を出し、河田さんのクビは撤回されて、社長経営の他の会社に転勤になった。

この河田さんの例のほか、交通事故にあって困っている仲間、立退き問題で苦しんでいる仲間にも、地域支部は真剣に取組んだ。そして地域支部では、「労働者の生活と権利について、団結すれば道が開けると確信したとき、仲間はかならず、われわれの組合に入ってくれるだろう」と言っている。

全国金属労組・板橋地域支部では、これらの活動の土台は、

一、自分こそ、この職場の仲間の生活と権利に責任をもたされているという自覚と、労働者への深い愛情。

二、「あいつはダメだ」と考えず、正しい順序を通れば、仲間は必ず立ち上がり、偉大な役割を果たすという信頼。

であるとしている。そして仲間の信頼をうるためには、(1)仕事はまじめにやり、遅刻、欠勤はなるべくしない。(2)他人のいやがることも、みんなのためには進んでやる。(3)若い者とはとけあい、年上は尊敬する。

ことが大切だとしている。このような地域支部に指導されて、ズーズー弁を恥ずかしがって、前途になんの希望も持てなかった野川君が、二十歳の若さで、りっぱな労働運動の活動家に生まれ変わったのだ。私が野川君と会ったアパートには、いまクビ切られて、つぎの就職先きをさがしながら勉強している青年がいた。聞くと、その青年も、地域支部の組合員で、つぎの仕事が見つかるまで、みんなに生活を支えられているのだという。十数年前、国鉄をクビ切られると同時に、国鉄労組からも排除された経験をもつ私は、思わずうなづいてしまった。

失業中、仲間に生活を支えられている、その青年の表情には、世話になっているという負い目のかげはなかった。無神経なのではない。深い労働者同士の連帯に結ばれた、新しいタイプの労働組合が誕生しているのであった。資本家にクビ切られた時が、緑の切れ目になる労働組合でない、とことんまで労働者と生活と権利、解放のためにたたかう労働組合が、いま深く広がりはじめていたのであった。

全国金属労働組合・品川地域支部



五、会社が

大きく発展した後は

古参の労働者にいやがらせ



これまでに紹介した、食堂で働いている岩木君や、商店や問屋で働いている人たちの東京商業労働組合や、野川君たちの全国金属労組や、野川君たちの全国金属労組・板橋地域支部のような労働組合は、個人加盟が原則で、社員や本工だけでなく、下請け工でも、臨時工でも、社外工でも、季節工でも、組夫でも、あるいは失業中の労働者でも、自分たちの生活と権利のために闘う決意をした人ならば、だれでも加盟することができる新しい型の労働組合である。

この新しい型の労働組合は、産業別に組織されていて、同一の産業の中では、企業のワクに分断されないで、一つの労働組合に団結している。それで企業組合にたいして、単一組合と呼ばれている。産業別に単一組合があるので産業別単一労働組合という。日本には二千八百万人の労働者がいるが、そのうち労働組合の組織労働者は一千万人で、残りの約三分の二の千八百万人の労働者は、まだ労働組合に組織されていない、未組織労働者になっている。(一九六六年調査)この未組織の千八百万人の労働者は、大部分は中小企業の労働者や、大企業の臨時工、社外工、季節工などで、低賃金と無権利状態の中で働かされている。この千八百万人の未組織

労働者を組織するために生まれてきたのが、個人加盟を原則にした産業別単一労働組合なのである。

個人加盟の単一労組に加盟して活動しているのは、岩木君や野川君たちのような、若い青年ばかりではない。私が東京南部の工場地帯である品川で会った小森さんや、吉村さんは四十五歳以上の年輩の労働者だった。

小森さんは、重電機メーカーであるM電機の従業員七〇人の下請け工場で働いていた。ことの誕生日がくると四十七歳で、小学校四年生と一年生の二人の子供がいる。いまの工場では勤続二十年になる最古参である。いまの小森さんが敗戦の翌年の秋に就職した時は、工場は四軒長屋の二軒で、細ぼそと仕事をしていた。労働者は新しく入った小森さんを入れても三人だけで、社長もいっしょに働いていた。機械は旧式のフライス盤一台、古いボール盤一台だけの町工場だった。機械の経験があるのは、小森さんと社長だけだった。その小さな町工場が、現在では従業員七〇人になり、機械も、ふつうシェーパーと呼ばれている形削り盤四台、旋盤四台、フライス盤二台、歯切り盤二台、油圧一〇〇〇キロ・プレス一台、パワー・プレス二台、卓上ボール盤六台の工場になり、ほかに千葉県と鶴見にも小さいけれど工場がある。長屋に住

んでいて、いっしょに働いていた社長は、神奈川県金沢にりっぱな家を建てて、めったに顔も見せなくなった。労働者である小森さんには、かつてはいっしょに働いていた社長が、この二十年間にどのくらいもうけ、どのくらいに財産をふやしてきたのか見当もつかない。工場の敷地七百坪のうち四百坪は買い取ったのだが、坪十五万円以上はしているから、その土地だけでも六千万円の不動産である。それに工場や事務所の建て物があり、機械があり、社長のりっぱな住宅がある。千葉や鶴見の工場もある。そのほかに銀行預金や株もあるのだろう。

いっしょに働いていたころ、急ぎの仕事で小森さんを無理して働かせる時、社長が口ぐせのように言っていたのは、「自分一人だけ良くなりたとは思っていないんだ。良くなれば、みんなに良くなって貰いたいと思っているんだ。おれを信用して、がんばってくれよ」という言葉だった。耳にはっきりと残っているその言葉を、小森さんは、そのころは普及してなかったけれど、テープレコーダーにとっておければ良かったと思う。

働き始めて五年たったころ、ある日定時で帰ると、翌朝、もんくを言われた。

「きのうは、なんで帰ったんだ。なんの用事があったんだ」

「定時間で帰るのに、いちいち言いに行かなければいけないのか」

「そうだ。これからは休む時も、前の日に理由を言って休め」

「おれはお前のドレイじゃないんだ。そんなこと、いちいち言えるもんか」

と、口論になったが、その時はそのままですんだ。小森さんは、「工場が良くなれば、おれも良くしてもらえるんだ」と考えて働いてきたのに、工場は大きくなって、ちっとも自分は良くならないので、面白くなっていった。従業員もいつのまにか二十人近くになり、社長は自分の席の後ろに従業員の名札をぶら下げて、休んだものは赤札、出勤は黒札にして、休むとガミガミ言う。最古参の小森さんにも高圧的だった。当時は、朝鮮戦争の特需景気で、どこの工場でも人をさがしていた。小森さんは同じ品川区内にある岡本鉄工所へ就職試験を受けに行った。するとすぐに採用された。その夜、社長が小森さんのアパートへ訪ねてきた。そして言った。

「君にはずっと働いてきて貰って、まだなんの礼もできないでいるが、将来は必ず良くしてやる。約束する。社宅をつくることも考えているし、最古参の君には一軒ぐらいくれてやっても良いんだ。せっかく今まで働いてきたんだから、がんばって働いてくれよ」

小森さんは社長の言葉を信用した。まさか口から出まかせのウソだとは思えなかった。小森さんはまた勤めはじめた。その時は青森県や秋田県から、中卒の養成工を一度に九人も採用して、従業員が二倍になったので、腕の良い、経験の深い小森さんに作業の中心になってもらわなければならぬし、養成工に仕事を覚えて貰うためにも、小森さんが必要だったのだが、社

長は小森さんを引き止めただけで、待遇を良くしたわけではなかった。

小森さんは社長の言葉を信用して、また続けて働いた。そして五年たった。小森さんは三十五になったある日、社長に言った。

「おれも、近いうちに所帯を持ちたいと思っっているんだ」

その時、社長が言った言葉を小森さんは一生忘れられない。喜んでくれると思った社長は、「まだ早い」と言ったのである。三十五で、「まだ早い」と言う人があるだろうか。社長は、小森さんの結婚の祝いをするのが惜しく、所帯が持てるような給料を出すのが嫌で、思わず、「まだ早い」と口走ったのだ。その後、社長は失言に気付いて言いなおした。

「相手の人はどんな人だ」

「呑み屋で働いている」

口べたな小森さんは、「呑み屋で働いていても、良い人だ」と言えなかったのだ。すると社長は、反対する口実を見つけて言った。

「そんな所で働いている女といっしょになるなら、やめてくれ」

社長は、小森さんのための思うからだと反対した。社長はしかし、小森さんが三十五になるまでの十年間も働かせて来ながら、結婚をすすめたことなど一度もない。小森さんは、社長のさもしい根性を、腹の底から見抜いてしまった。小森さんは結婚したが、もう社長の言うこと

にはいっさい信用しなくなった。使うだけ使えばあとはもう用はないという、社長の根性がはつきりわかったのだ。

会社はどんどん大きなり、従業員は五十人、六十人とふえてきた。社長は高級乗用車を乗り回して、工場にはめったに顔を見せなくなった。そして小森さんより、ずっと新しい事務所の連中や職制が、ことごと小森さんにいやみを言ったり、難くせをつけて、なんとかして小森さんをやめさせさせようとした。

小森さんは自分を守るためにも、自分と同じ運命にある仲間のためにも、労働組合を作りたいと考えるようになったが、うっかり口に出せないし、どうすれば良いのか分らなかった。小森さんは頼まれて、親会社であるM電機の労組幹部が区議に立候補したときに選挙運動をしたことがあったので、三年前のある日、M電機労組の幹部に「組合を作れないだろうか」と相談してみたが、さっぱり要領を得なかったし、なっとくできなかつた。

「労働組合は全体の賃上げや労働条件を決めるのに取りくむ団体のものであって、個人の一つ一つの問題は取り上げないものだ」

というのである。首切りの圧力を受けている自分の権利を守ってくれるのかどうか、分らないし、相手の態度は冷淡だった。そのうちに小森さんは、急に熱を出して一日休んだら、解雇通知が来た。熱が出たことは、奥さんが電話したのに、かけかたが悪いから、無断欠勤で解雇

だという。全くの言いがかりだった。びっくりして、熱のある小森さんが電話をかけると、専務が、「もう町工場じゃないんだぞ」とどなっている。

これが、「自分一人だけ良くなりたいたとは思っていない。みんなに良くなって貰いたいと思っている」と、社長が口ぐせのように言ってきた会社の、十七年間も、働いてきた労働者にたいする仕打ちなのだろうか。熱を出して休む前まで、徹夜、深夜と働いて、午後九時までの残業を定時間のようにして働いていたのだ。熱で頭がガンガンする中で、小森さんはくやし泣きした。こんな無法なことをまかり通らしておけない。しかし小森さんの無念な経験も、特に例外的なことではない社会なのである。日本の千八百万人の未組織労働者の中では、きのうも、きょうも珍らしくないこととしてくり返されているのだ。だから、十七年間なんの落度もなく働いてきた小森さんが、熱を出して一日休んだので解雇されたといっても、新聞ダネにもならないし、テレビでもラジオでも放送しない。それをあたり前のことにしている世の中は、なんと不公平にできているのだろうか。

その時、小森さんの工場では、一匹狼みいな小森さんがまったく気がつかないでいるうちに、九人の若い労働者が、個人加盟の全国金属労組・品川地域支部に加盟して、組合員をもつと拡大する準備として、学習活動を続けていたのだった。小森さんは、自分でも組合を求めていながら、だれにも相談できないで、若い人をつかまえては、組合をつくる根性がないのかと

けしかけていたのだったが……。

九人の組合員は、小森さんを組合に迎えて、小森さんの解雇を撤回させた。その後、組合は公然化した。が、会社側の策動で第二組合ができ、困難なたたかいが続いている。五十四人の組合員が十三人にへってしまった。非公然組合のたたかいの経験が、まだ全国的にも浅かったためもあった。しかし今も小森さんは、資本家の血も涙もない本性を身をもって経験した最古参の労働者として、みんなの支柱になってがんばっている。

品川でもう一人、私が会った吉村さんは、自動車部品の組立て工場で勤続三十年も働いている、小柄で、いかにも実直そうな、四十六歳になる労働者だった。吉村さんは昭和十一年に群馬県の高等小学校を卒業すると、すぐに現在の工場に住み込み小僧で入った。給料は一カ月二円の小づかい銭で、盆と正月には着物を作ってもらった。吉村さんは長いあいだの徒弟意識が強くしみこんでいて、戦後勤め先が会社組織になって、「旦那さん」が社長に、「おかみさん」と若旦那が専務になっても、しばらくは「社長さん」「専務さん」と呼べなかった。社長や専務の前では、固くなって思っていることも言えなかった。そして吉村さんは、労働組合は会社をつぶすものだと、頭から思いこまされていた。ところがこの数年、職場に労働組合ができてからの事実は、まるで反対だった。



会社は敗戦後まもなく、兵隊から復員した吉村さんをふくめて五人の従業員で再発足した。そしてどんどん大きくなった。そして朝鮮戦争当時の特需景気の中で、それまで群馬県人ばかりで固めていたのではまに合わなくなって、従業員を一般に公募し始めた。すると退職金、賃金規定、有給休暇などは別に定めると書いてあるだけで、絵に描いたモチと同じだった就業規則の有名無実も許されなくなってきた。職場の空気が少しずつ変わってきたが、吉村さんは保守的なほうだった。

十年前に大きな取り引き先が倒産した。会社はその後経営が苦しくなってきた、ついに三百万円の不渡りを出した。そして年二回五百円づつ、年に千円づつ定期昇給していたのがストップしてしまった。物価がどんどん上がっていたので、従業員はごく自然発生的に交渉委員をえらんで、賃上げを交渉した。すると会社側は、中心になっていたNさんなど二名の首を切ってきた。

Nさんは私慾を捨てて、いつもみんなのために行動する人で、みんなから信望があった。吉村さんもNさんが好きで、信頼していた。そのNさんを、会社は「あいつはアカらしいからクビだ」という。吉村さんは組合ができる会社がつぶれると考えていたのだ、Nさんの首切りには承知できなかった。

二名の首切りをどうするかで、全員の集会が持たれた。首切りに反対するためには、労働組

合をつくるより方法がないと討論が進んで行った。吉村さんは、組合をつくることには猛反対した。しかし、組合をつくるよりほかに二名の首切りを撤回させる方法がないことが分った時吉村さんは、清水の舞台から飛びおりに決心した。そして「組合を作るなら、全員、首をかくごでやろう」と、いままで猛反対していた吉村さんが、生まれてはじめて演説した。吉村さんを動かしたのは、安い賃金への怒りもあったが、曲ったことが許せない職人らしい正義感のほうが強かった。

そして組合を結成してみると、みんなが団結してたたかえば、有給休暇も、賃上げもち取れることが分った。二名の首切りも、会社側は結局は正式には通告できなかつた。その交渉の席上で、吉村さんは、青くなっている昔の若旦那の専務から、「お前、そんな強いこと言つて良いのか。うちの会社がいやならやめろ」と言われたが、それをはねかえした。労働組合があれば、社長とも専務とも、対等の同じ人間として話すことができるという感激は、若い仲間には分らない喜びだった。

その後もさまざまなたたかひの経過があつた。一日に五分間づつ十回もストライキをやって出荷拒否の時限ストライキをたたかつたこともある。吉村さんは若い仲間たちに引っぱって貰うほうだったが、決められたことはやりとげた。吉村さんは弱気になることもあるが、労働組合があればこそ、労働者が経営者と対等の人間になつて交渉できるという喜びだけは、捨てた

くないと考えている。

そんな時、日産自動車が生産工場に系列工場になればと圧力をかけてきた。条件は、全国金属労組から脱退しろというのであった。そうすれば仕事はいままで通り出すし、資金も出すというのである。

しかし、全国金属労組・品川地域支部は単一組合だったから、企業内労組のように買収はできなかつた。それに会社側も、系列工場になれば結局、会社全体を乗っ取られてしまうことだということが分っていた。社長も専務も、大会社の圧力に屈して、何十年も経営してきた会社を手放したくなかつたのだ。

日産自動車の圧力をはね返すと、仕事は止められた。仕事量は三分の一にへった。会社は倒産寸前になり、退職金をもらってやめていく人も出てきた。組合は会社をつぶさない方針を出してたたかつた。定時の五時すぎは無報酬で働き始めた。「五時すぎは、おれたちの工場」とはげまし合つて働いた。会社の倒産はまぬがれた。

専務は、「まったくみなさんのおかげで、倒産しないで年を越せました」と新年会の席上でみんなに頭を下げて喜んだ。その後も、やる気のない職制の怠慢で危機があつたが、組合員の団結した力と正しい方針で、危機を乗り越えた。

正しい方針というのは、中小企業の経営者は労働者の敵ではない。労働者の敵はアメリカ帝

国主義と、コンビになった日本の独占資本である。中小企業の経営者がアメリカや独占資本の側になって、労働者に敵対してくるときはたたかうが、そうでない時には味方にしていくという方針である。

それで、たとえ賃上げが取れない時でも、経営者の考えを変えることができれば勝利だという方針でたかかってきたのだが、組合ができてから平均三千五百もの賃上げを勝ちとっている。そしていまでは経営的にも、大会社に依存しないで独自の道を切り開いている。

日産自動車の圧力をはね返した時、日産の系列下に入って、吉村さんたちがしていた仕事を奪って行った下請け工場は、その後、日産・プリンスが合併して、下請け工場の五割が整理された時に倒産してしまった。

吉村さんが、労働組合は会社をつぶすものだと考えたのは、まるで反対だったのだ。正しい立場の労働組合は中小企業をまもり、中小企業を喰い物にして、労働者を賃金ドレイにしているのは大独占資本なのである。

「もし、あの時、日産の系列下に入っていたら、うちも倒産していたよ。労働者は倒産しても残れるが、経営者は残れないからな」

専務がしみじみと言う時、吉村さんはニッコリと笑うのだ。

「中小企業の経営者が信頼できるのは、自分のところの労働者だけですよ」

東京私学單一勞組・青葉幼稚園分会



六、砂場に砂もなかつた幼稚園が

いまでは

運動会の賞品も

山盛り

## 1. 十人のうち八人の先生を首切り

戦後幼児教育の大切なことが叫ばれてきたが、そのためというよりは、深刻な住宅難と交通地獄で、子どもがのびのびと遊べる場所のなくなったことや、共働きで、母親が働く家庭が増えてきたことで、幼稚園や保育園に入る子どもが多くなった。半数以上の子どもたちが幼稚園か保育園に入るとほかの子どもたちも入らないではいられなくなった。

しかし、公立の保育園は少なく、金もうけを目的にした私立幼稚園が多い。私立幼稚園は東京都内だけでも八百以上あって、六千人以上の先生が働いている。この私立幼稚園には、ほとんど労働組合はない。そのために六千人の先生たちは、信じられないような低賃金と人格を認められない無権利な状態の中で働いている。昭和三七年三月、私立聖徳学園（短大）保育科をいっしょに卒業した藤田順子さんと津田英子さんが、翌年四月に就職した東京都葛飾区の青葉幼稚園も、金もうけ第一の園長が経営する私立幼稚園であった。

園長の片桐勝昌氏は、当時、東京都私立幼稚園PTA連合会副会長、日本私立幼稚園協会常任理事、葛飾区私立幼稚園協会会長、全日本計理士会相談役、象山学園理事長など、たくさん肩書きを持っていた。豊島区長崎の自宅の近くでは、妻の名で長崎幼稚園を経営し、熱海には長男の名でホテルを経営していた。私立幼稚園の経営者の世界では顔役の一人なのであった。この片桐園長の自慢は、戦時中にヒトラーと会見したことだった。ヒトラーといっしょにならんだ写真を選挙ポスターに刷って、東京都議に当選したこともある。そして昭和二十二年六月、戦争犯罪人として政治活動と教職から追放された人間だった。教育者として、まったくふさわしくない思想経歴の持ち主が、いつの間にか、またのさばっているのだった。

青葉幼稚園に就職した藤田さんと津田さんは、片桐園長がそんな思想経歴をもつ男だとは知らなかった。その年、青葉幼稚園では、近くにあった青砥（あおと）幼稚園が廃園になったので、その引継ぎ園児をふくめて、百六十名だった園児が三百三十名に急増した。クラスも四クラスから八クラスになり、職員も主任以下四名だったのが九名にふえた。ところが片桐園長は、倍加した新入園児から入園料を取るだけ取って、急増した園児の分の施設や教材などを整備しようとしなかった。

問題はそこから始まった。四月一日、職員が入園式の準備にとりかかると、掃除道具も足りなかった。飾り付けの材料も不足して、職員が自費で買ってきて補うしまつであつた。九日



の入園式当日も、園側の無計画さのために、園児が泣きだして混乱した。以前に六年間も保育園で働いていたことがある藤田さんは、たまりかねて、園の保育方針を聞いたり、職員の見解をのべる職員懇談会を開いて下さいと、園長にたのんだ。が、藤田さんは、園長に「そんな必要は認めない。おれの言うとうりにしていれば良い」と、一言で拒否されてしまった。

さて、保育が始まってみると、教材はリズム楽器をはじめ、なにもかもが不足だった。庭の砂場には砂も入っていなかった。三百人以上の園児がいるのに、救急衛生箱には「赤チン」が入っているだけで、体温計もないのであった。必要な備品を買って欲しいとたのむと、園長代理をしている西村主任は、「予算がありません」の一点張りだった。ある日の職員会で、津田さんが、前に働いていた幼稚園での経験を話して、画用紙、折り紙などを買う教材費は、月二千円を各クラス担任に前渡しして欲しいと提案すると、みんなが賛成したのに、主任は頭から反対した。みんなが働きやすく、良い保育をしたいという動機からいろいろと提案したいと考えるのを、いっさい受けつけない態度だった。藤田さんや津田さん、いっしょに入った大釜さんなどがおどろいたのは、青葉幼稚園ではカリキュラム（教育計画）が作られず、その日、その日の思いつきで保育していることだった。園長や主任が強調するのは、こどもたちの才能をのびのび伸ばすことでなく、あれをしてはいけない。これをしてはいけない。という、軍国主義教育につながるしつけ万能教育だった。

青砥幼稚園から来た伊東先生は、スクールバスの運転手も兼任していた。主任はこの伊東先生に途中からの入園児をみんな押しつけようとした。伊東先生は、そのことを、教材不足のことをふくめて園長に訴えた。すると園長は、「そんなことを言う奴はアカだ。お前がみんな扇動しているのだろう」と、逆に口ぎたなくののしった。伊東先生は怒って転任してきてから二十日もたつてないうちにやめてしまった。

伊東先生の後、村松やすゑさんが入った。村松さんは幼児教育を社会に奉仕する仕事としてえらんだ純粹な人だった。教師と父母が中心になって運営し、保育料も三百円の公立幼稚園で働いていた村松さんは、保育料を二千元もとりながら教材費をPTAの「母の会」費三百円でまかなおうとしている青葉幼稚園の金もうけ主義にびっくりしてしまった。村松さんは、保育料の高い私立では、教材費をたっぷり使うものと考えていたのだった。

そんな青葉幼稚園でも良いことがひとつあった。それは、意地の悪いのは主任だけで、若い人ばかりの同僚は、他の職場のように古いものがいばつたり、かげ口をきいたり、園長や主任につげ口をいう人もなく、仲良く働いていることだった。労働組合はなくとも、みんなは固まっていた。要求があれば、みんなで話し合つて、みんなで要求するようになっていた。

五月十五日にPTA総会が開かれた。園側は、PTAの収支予算案を一方的に読みあげて、質疑が出ないうちに、さっさと承認されたことにしてしまった。総会后、不満に思った父母た

ちは、各クラス担任の先生に質問したが、職員も予算案の内容を知らされていなかったのので、満足に回答できなかった。困った先生たちは、全職員の懇談会で質問した。すると園長は、「母親たちの質問をいちいち聞いているわけにいかないから、わざと質問できないように、会を進行させたのだ」と放言して、しゃあしやあとしているのだった。西村主任もそれがあたり前という顔をしている。八人の若い先生たちは、あぜんとして顔を見合せたまま、言う言葉がなかった。

あきれ返ったですまないのは、先生たちの賃金だった。当時、私立幼稚園協会がきめた新卒者の基定賃金一万三千円が、青葉幼稚園では最高の賃金だった。そして共済組合には加盟せず健康保険もなかった。高校卒業後、なん年も独学したり、高い入学金や月謝を払って短期大学保育科を卒業して、幼稚園教諭普通免許状をとった先生たちの賃金がたったの一万三千円で、健康保険もない。信じられないような低賃金だが、これはほんとうの事で、青葉幼稚園だけの例外ではないのである。以前から働いていた崎村敏子さんなどは幼稚園助教諭の免状を持っているのに、助手として採用された時は月給七千円。一人でクラスを担当するようになってやっと一万円だった。この一万円も西村主任は、「とくに園長さんをお願いして、昇給を認めて貰ったものだから、他の職員には内容を見せないように」と、恩を着せて、いっしょに働く仲間に秘密にしておくようにと念を押しただという。

一万円といえ、*「黒い霧」*につつまれた自民党の幹部が、帝国ホテルで食事するときの食分である。特に昇給を認めたと恩を着せるような額だろうか。こういう低賃金で人を使おうとする経営者にかぎって、給料の額を働く仲間に公表しないようにと行って、他の人より良いのだと思わせようとする。珍しくない手なのである。ばかりしくなってしまった崎村さんが、月給袋を机の上に出し放しにしてみんなに見せたのも、崎村さんの立場になればだれでもやりたくなる、あたりまえの行為ではないだろうか。

とにかく私立幼稚園の低賃金は有名だ。職業安定所へ行って、就職を幼稚園と希望すると、係の人が気の毒そうな顔をして、「安いですよ。親がかりで、小使い銭ぐらいのつもりでないとがまんできませんよ。それで良いんですか」と、念を押して聞くぐらいである。

それでは、幼稚園の先生は楽な仕事かという、ちよつと考えても分るようにならぬ仕事である。たとえば、どこ家庭でも、小さい子どもが二、三人になると、母親は子どもの世話に追われる。そこへ幼児の友だちか、親類の子が二、三人あそびにでもくると、その騒がしさにたいいていの母親は悲鳴をあげる。ところが幼稚園の先生は、一人で何十人もの幼児をあそばせる。あそばせるだけでなく、教育するのだから実に大変な仕事だ。何十人の子どもの中には、泣き虫の子、いたずらっ子、甘えん坊、病身の子、欲求不満の子など、さまざまなお子さんがいる。どの子どもも大切な子どもだから、不注意や私的な感情をまじえるのは許されない。そして、

わが子のことを絶えず考えている親たちの希望も聞いておかなくてはならない。がまん強さと根気強さ、それに子どもたちへのふかい愛情が必要だ。仕事はそれだけでない。四時間近くもかかるバスの送り迎えがある。放課後には授業の準備だけでなく、お金の計算から、ふきそうじ、便所そうじの仕事まである。とにかく私立幼稚園の先生の仕事は、保育園も同じだが、実に大変な仕事である。

その先生たちの賃金が、一カ月一万円とか、一万三千元とは、考えられないような低賃金である。どうしてそんなに安いのかというと、幼児教育への先生たちの善意が経営者たちの金もうけに逆用されていることや、先生たちの労働組合がないことが原因として考えられる。

青葉幼稚園の先生たちは、西村主任をのぞくとみんな二十代で、なんでも打ちあけあって相談したので、気心が一つになった。そして労働組合が作れないものかと考えたが、どうすれば良いのか、だれに相談すれば良いのかも分らなかつた。園長や主任は、みんなの心が一つになつているのが気に入らないで、さかんにみんなの仲をさこうとした。六月五日には、みんな「時の記念日」の準備で、事務所に残つて働いていると、翌日、崎村さんは園長に呼びつけられた。そして、

「昨夜はおそくまで何をしていたか。お前は態度が悪い。古くからいるのに、みんなを扇動している。今すぐ荷物をまとめて出て行け」

と言って、崎村さんの担任教室の入口に掲げてあった名札を、ノコギリで切り取った。ヒトラーと握手したのを自慢にしている園長は、教職にある人を、犬か猫でも追い出すようにクビ切ろうとしたのである。みんなは驚いて、崎村さんと、助手で主任の側についている池内さんを除いて、西村主任の部屋にいた園長と交渉して、崎村さんのクビ切りを撤回させた。

六月二十五日の給料日の日。河野ヒロ子さんが、給料の不足分のことと園長に会うと、園長は、「大釜、津田、藤田、崎村の四人は職員を扇動している。七月のボーナスには、四人には差をつけてやる。そうすれば必ず抗議してくるだろう。その時は四人ともクビ切ってやる」と河野さんにいきまいていた。

そして七月十九日。給料とボーナスに、PTAからの中元が支給された。青葉幼稚園のPTAは「母の会」という名前だった。母の会からのお中元は、五月の総会で、全部の先生に二千円ずつと決まっていた。ところが実際に受けとってみると、そのお中元に、五百円から三千円までの差別がついていた。

こういう差別をつけるのも、ケチな経営者が働く仲間を対立させるためにやる、いつも決まって使う手段だった。それを警戒した先生たちが、お互いに額を話し合ったので、すぐに分ってしまったのだ。ボーナスで個人差をつけたうえで、さらに二千円のお中元にまで差をつけて支給するなんて、実にひどいやり方である。五百円の人は三千円の人の六分の一しか働いてな

いというのだろうか。先生たちがこの差別になつてくできなかつたのは当然である。先生たちは古くからいる河野さんと四月からの津田さんを代表にして、母の会副会長の家へ、事情を聞きに行った。それでこの差別は園長と主任の考えでつけられたものだということが分つた。するとその日のうちに、大釜さん、津田さん、崎村さんの三人が、いきなり解雇を通告された。

その理由を聞くと園長は、「園児保育上に問題があるわけでない。しかし、ふだんの態度がわるい。たとえば給料をもらったら、まず神だなにあげて、おがんで感謝してから封を切るべきだ。母の会からのお中元の金額を、あれこれ、母の会に問いただすなどはけしからん」などとおよそ理由にならないことをわめき散らすのだった。

つづいて七月二十八日には、藤田さんが首切られた。藤田さんが、三人の先生が解雇されたことを、「母の会」に訴えたのがわるいというのである。

八月二日には、京都に旅行中の片桐園長から、緒方玲子さん、河野ヒロ子さん、村松やすゑさん、吉野弘子さんの四人の先生に速達が来た。内容は、この四人の先生が、「前に首切られた四人の先生の復職を希望して動いているのはけしからん、八月七日までに謝罪しなければ、自ら退職したものと認める」というのだった。そして七日には後の四人も解雇されてしまった。クラス担任の八人の先生が全部解雇されてしまったのである。残っているのは主任と帰郷中の助手の先生だけになった。

この間も園長は、若い先生を一人ずつ呼びだして、「青葉で解雇されたら、そのことを履歴書にかかないと、経歴詐称になるぞ。おれにたてついたら、東京中の幼稚園に就職できないようにしてやる」「おれは右翼で、マッカーサー元帥に追放されたことのある人間だ。極東組も知っているんだ」などと、およそ教育者とは考えられない、やくざのような言葉で脅迫したのである。

こんな首切りを許しておいて良いものだろうか。八人の先生たちは、どうすれば良いのか分らなかったが、ただ、こんな首切りは許せないという気持ちでいっぱいだった。



## 2. 個人加盟労組があったから勝利できた

こうして青葉幼稚園では、夏休みにかかった半月ほどのうちに、園長代理の主任と助手の人をのぞくと、クラス担任の八人がみんな解雇されるという大変なことになった。平均年令二十三歳の八人の先生たちは、まず父母たちに訴えた。みんなあきれたり、怒ったりして、父母たちも立ち上がった。

八人の先生たちは、父母たちの意見を聞いて、こんなめっちゃくちゃな首切りが、いまの日本で許されるはずはないだろうと、まず法務省へ行ってみた。すると、あちこちの課へたらい回しされて、さんざん時間をつぶしたあげく、「首切られたのなら、しようがないじゃないか」という冷い返事を聞かされた。つぎには都庁の私学関係のところへ行ってみた。すると、そんな問題は関係ないと玄関払いをされてしまった。それではと、労働基準監督署へ行ってみた。ここでは、「そういう事情ならば、解雇予定手当を一カ月分だけ取ってあげよう」と言われ

た。法務省や都庁よりもましな感じだったが、解雇をしかたないものとして認めることが前提だった。それではなんのために相談に来たのか、まるで意味がない。八人の先生たちは、電車賃と時間をむだにして、足を棒のようにして歩き回って、なんの成果も得られなかった。いまの日本の社会では、働くものの生活や権利、不当な首切りから自分たちを守ってくれるお役所は、一つもないのだということ自身にしみて知ったのである。最後にワラにでもすがるように思いで行った自由法曹団の第一法律事務所では、「労働組合を作れば、たたかいやすいけれど、組合がないのでは、むずかしいですね」という答えだった。

八人の先生たちが、つくづくと感じたのは、働くものは、たとえどんなに困難でも、ちゃんとした労働組合を作っておかなければいけないということだった。働くものは、自分たちの生活と権利は、自分たちが中心になって守らなければ、だれも守ってはくれないということだった。

この間にも、心配した園児の父母たちは、百九十五名もが署名に参加して、青葉幼稚園の健全な運営と解雇問題の円満解決を希望してなんども会合をひらいていた。後の四人の先生が解雇された八月七日には、百名以上の父母が、園側と会談するために幼稚園につめかけた。が、

園長は、七名の代表しか認めないで、約百名の父母たちを炎天下の庭に締め出した。

父母代表の質問と園長の答えは、つぎのようなものだった。

(1) 園長は園の方針というが、それはどんなものか。 || 答え「園の方針は園長個人の主義に属するもので、それを話すには一日かかる」といって、園長は満足に答えようとしなない。

(2) 父母からみても、教材や衛生設備は不十分だと思うが、どうか。 || 答え「不備ということはない」

(3) クラスの人員が多すぎるが、定員は守られているか。 || 答え「高校でさえ五十五名もいる。私の園では五十六名が最高である」——(これは高校生と幼児をごっちゃにした乱暴ないい方で、幼稚園の定員基準は四十人以下となっている)。

(4) 母の会の会則は守られているか。 || さすがの園長も、守られているとは答えられなかった。事實は、会長もだれがいつ就任したのか、先生も父母も知らぬまに決められていた。

(5) 八人の先生の解雇の理由は。 || 答え「自分の職場の悪口をいって歩くような人間は使えない」(先生たちは解雇されてから、父母に訴えたのだ)

最後に、問いつめられた園長は、「私立幼稚園なのだから、園長個人の考えどうり経営するのは当然だ。それが不満なら、こどもを退園させれば良い」と、ひらき直った。

会談はものわかれになった。炎天下の庭で成行きを案じていた父母たちは、この報告を聞いて、怒らない人はいなかった。父母大会は八月十九日にもひらかれて、(1)母の会の健全な運営(2)先生たちが保育に専念できるように人格の尊重を強く希望する。など五項目を決議して園長に送り、葛飾区長にも紛争処理の要望書を提出、地域の社会問題になっていった。地元の新聞にも、『赤旗・日曜版』にも大きく報道された。

八人の先生たちは、最初は、「こんな幼稚園を良くするのに骨折ることはない。やめちまおう」という考えが強かった。みんな資格を持っていたし、若かったから、転職しようとするばすぐにできたのだった。しかし、子どもたちのことを考えると、先生がみんないなくなってしまうのは可哀そうだった。それに、こんな無法な首切りに泣き寝入りするのもしやくだった。父母たちに支援されていたが、これからどうやって、たたかっていけば良いのか、まるで夢中で、見当もつかないでいた。

そんな状態でいる時、東京私学教職員組合連合(東京私教連)の人が訪ねてきてくれた。すこしだけ組合運動の経験がある藤田さんをのぞいて、東京私教連と聞いてもぴんとこなかった。藤田さんも「東京私教連」とはどんな組合かわからなかった。それに組合役員になることが出世コースの一つと考えられている労働組合の組合員だった人は、労働組合に不信感を持っていた。また「アカ」に関係するのではないかと心ばいな人もいた。

それでもみんなで相談して、みんなで個人加盟した。八月十二日であった。

解雇されている人たちばかりだから、組合費はほとんど払えない。その人たちを組合に加入させて、解雇撤回のたたかいをするのはオルグの交通費や生活費、労力と時間を考えると大変な支出になる。それが分っていて、青葉幼稚園の先生たちを組合に迎えるということは、個人加盟労組だからできることで、ふつうの企業組合やその連合組合ではやらないことだった。その時藤田さんたちは、解雇されてたたかっているのだから、労働組合が助けてくれるのはあたり前と単純に考えていたのだが、産業別単一労組ができる前には考えることもできないことだったのである。そのことを「しみじみと有難いことだ、個人加盟労組と東京私教連の援助がなければ、私たちはたたかえなかった」と考えられるようになったのは、ずっと後のことだった。

私学単一労組(当時はまだ結成準備会だった)青葉分会を結成した先生たちは、共同生活で生活体制を守りながら、こんどは明確な目標をもってたたかい始めた。共同生活では自分のわがままは通らず、つらかった炊事当番などは今でも思い出になっている。自分のわがままが、寝起きの時間にも、たべ物にも通らない。ほんとうにつらかったが、この共同生活で、みんなはほんとうに人を信用できるようになった。団結してたたかうというこの内容が全身で分ってきた。またあちこちの労働組合や集会に行つて訴えると、『赤旗・日曜版』などを読んで知つて

いる人がいて、どこでもはげまされた。見も知らぬたくさんの人から、心をこめてげきれいされた。

また私学単一労組の指導は、組合費を払って、ボーナスや昇給をしてもらう、幹部まかせの労働組合とちがって、一人一人の生い立ちや性格のちがいがらくる一人一人の感情まで、大切にしてくれるのであった。それは先生たちを大猫のように追いだした園長の、人格を認めようとしての態度とは、月とスッポン、天と地のちがいだった。先生のうち、一人だけの既婚者だった大釜雅子さんが赤ちゃんをうんだ時などは、私学単一労組の最初の赤ちゃんだ。「単一の子だ」と、赤ちゃんの衣料からおしめまで、使いきれないほど仲間たちから贈られて、解雇中だったのにすこしも困らなかった。また青葉幼稚園のたかいを勝利させるための「一万名署名」では、東京私教連や、結成準備会の段階だった個人加盟労組の全組合員がとりこんで、勝利の原動力になったのであった。青葉幼稚園分会のみんながどれほど感激したか分らない。自分でも考えられなかった、たたかう力が、泉の水のように無限に湧いてくるのだった。

そして、私学単一労組の指導で提出した東京地方裁判所民事十一部の「防害排除仮処分申請」で、早くも八月二十三日には四名の解雇を撤回させ、残る四名も六カ月以内に判決を出すという成果を勝ちとった。四名は職場に入り、大釜、崎村、津田、藤田の四人が外でたたかった。その後、ステッカーを貼って支援してくれた支援労組の人が警察に逮捕されるなどのこと

もあつたが、十月十日には、さすがに頑迷な片桐園長も、私学単一労組の団体交渉に応じざるを得なくなつた。

翌年二月二十二日には、葛飾公会堂で「青葉はげます会」が、予定の百名を二十名もこえて盛大に開かれた。そして三月十日から裁判の証人尋問が始まつた。六月二十五日に、村松やすゑさんが、「組合活動に熱心で、園の利益にならない」などの理由で、再度解雇されたが、その年の暮れ、十二月十二日に、ついに解雇無効、闘争中の給料を支払えという完全勝利の判決をかちとつた。

その後、園側は、全員が職場に復帰しては経営が成立しないから、閉鎖するなどといひだしたので、閉鎖をくい止めるために、順に職場に復帰する協定を結んだ。四二年一月現在では、八名のうち二名が家庭の事情で退職したほか、四名が職場に復帰し、村松さんと草地さんの二人が外に残つてたたかっている。そして、闘争中に青葉幼稚園に就職した非組合員の人も、ねばり強い話し合いやたすけ合いを続けて、職場の諸要求や民主化のためにたたかっている。また都内の私立幼稚園の中に、私学単一労組の組合員をひろげる中心になつて活動している。

97  
青葉幼稚園の経営者、片桐園長は、その後「首を切つた時、わしが一番心配したことは、東京中の幼稚園に組合ができてしまうのではないかということだつた。わしはこの闘争を引きお

こした責任として、幼稚園協会関係のすべての役職を辞退した」と語っている。

この片桐園長の言葉や、最初の解雇の時、「東京中の幼稚園に就職できないようにしてやる」と言っていたことなどを、深く考えてみる必要がある。

片桐園長の背後には、純粹に幼児教育に打ちこんでいる少数の良心的な人たちをのぞいた幼稚園経営を金もうけの手段と考える金もうけ第一主義で、幼稚園教諭の地位や待遇の向上などまるで念頭にない経営者全体の後押しがあったのだ。

無資格の十代の人を、嫁入り前の小使い銭ぐらいでこき使ったり、小人数の職場の中で互いにかげ口やつげ口をさせて、働く先生たちを対立させておくのが、幼稚園教諭を団結させないで、いつまでも低賃金と無権利な状態にしておく方法だと考えている経営者が多いのである。小さな職場の中で、「あの人がかう言っていた」「この人がこんなかげ口を言っていた」と、対人関係のことばかりに神経を使わせて、園長や職制はそれをたくみに操っていく。そして古くなってきた人は、いろいろなやがらせをして、怒ってやめていくようにしむける。経営者はその後で、若くて安い給料で使える人を採用するのである。

幼児教育の美名のかげで、適当に、あるいは露骨に金もうけをしている私立幼稚園の経営者の目に、青葉幼稚園の若い先生たちの団結や、良い保育のための要求は、自分たちの金もうけ



第一主義をおびやかすものと見たのだ。そして、それが東京中の、あるいは全国の幼稚園にひろがって、賃金の向上や権利の主張になっては大変だと、幼稚園の経営者たちが片桐園長を後押ししたことは想像に困難なことでない。

これを裏返して考えてみると、幼稚園教諭や幼稚園で働く人たちの労働条件を良くするには、小人数の職場の中で仲間あらいをしていことはなんの役にも立たない。それよりも一人でも多くの仲間が、私学単一労組に加盟して、みんなで努力することがどうしても必要なのではないだろうか。

その後の青葉幼稚園では、例えば昨年の秋の運動会では、私学単一労組の分会員が、未組織の人とも話し合って、運動会の賞品はどの子にも同じものをあげたいと要求した。その結果、賞品はどの子にも平等に二五〇円ぐらい（スケッチブック、エンピツ、オリガミ、おかし）が渡されて、園児たちは「おっこっちゃうよ。おっこっちゃうよ」と大よろこびだったという。前年までにくらべて、たくさん賞品に、お母さんたちもびっくりして、「こんなに、たくさんいただくなら風呂敷を持ってくればよかった」という声が、あちこちで聞こえた。前年の運動会の時、母の会の役員が一、二等をつけていたのだが、つけまちがえると賞品をもらえなかった子どもが泣きだしたりしたことを思うと、どの子も同じものがもらえ、賞品もたくさんになったことは、ほんとうに良かったと父母も先生もよろこんだ。

砂場に砂がなかったり、救急衛生箱に赤チンも入っていないところと比較すると、なんと変わってきたのだろう。これも、分会員が裁判に勝利して、つぎつぎと職場に復帰して、その発言力をましてきた結果なのである。

また青葉幼稚園分会の先生は、つぎの簡単な数字を示して教えてくれた。

現在の青葉幼稚園では保育料三千円で、二百七名の園児がいる。職員は主任以下九名。母の会費百五十円。これで一カ月の収支をざっと計算してみると、

(収入)

三千円×二百七名＝六十二万一千円。

百五十円×二百七名＝三万五千円。

(人件費)

教諭四人×一万七千円＝六万八千円。

助教諭二人×一万五千円＝三万円。

運転士二人×四万五千円。

主任一人＝(推定三万円)

合計十七万三千円。

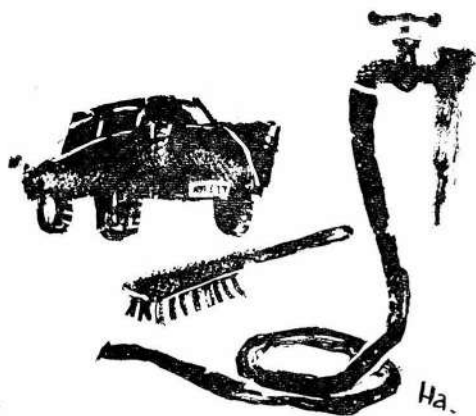
教材費や運動会などの費用は、主に月三万五千円の母の会費でまかなわれること、学校法人の税金は安いことを考えると、約六十二万円の保育料から、十七万三千円の人件費を差引いた残りの約四十五万円は、いったい何に使われるのだろうか。

スクールバスの消却費や事務用品、ガソリン代などを考えても、なお大きな金額が残るのである。この簡単な数字からも、幼稚園で働く先生たちの賃金を、現在の二倍ぐらいにすることも不可能ではないように思える。しかし、この賃上げを実現するためには、一つの幼稚園だけでなく、もっとたくさんさんの幼稚園で働く人が、私学単一労組に加盟して、いっしょに力を合わせてたたかう必要があるのではないだろうか。

追記Ⅱわたしは六三年当時、『赤旗・日曜版』の記者をしていて、首切られた直後の青葉幼稚園の先生たちに会ったことがある。その時は、「共産党の新聞に書かれるのは困ります」と言われて、なっとくして取材に協力してもらうのに三日もかかった。こんどこの取材で三年ぶりに会ってみると、ほとんどの人が結婚していて、四人がお母さんになっていた。みんな自信にあふれた組合活動家になっていて、「アカ攻撃」を恐れていた人の面影はなかった。わたしはたたかいは人間をわずか三年余の間に、こんなにもすばらしく変えるのかと、おどろき、そし

て感動した。人間はその生き方によって、いくらでも成長し変わることができるのだ。いま、力がないからとなげいたり、自信を失う必要はすこしもないのだと、わたしは今更のように考えたのであった。

東京自動車交通労働組合・目黒支部



七、不当な“下車勤処分”の撤回へ

新妻も

夫を支持して

がんばった

## 1. 始めは社長の第一の気に入りだった

自民党政府の自動車優先、人命無視の交通政策のために、日本は世界一の交通事故の国になつてしまつた。自民党政府は必要な交通対策もたてないで、自動車の台数を無秩序に急増させ、無計画に都市を膨張させながら、ほとんどの道路を歩道もない状態にしてきたので、交通事故は年々ふえる一方である。一九六六年の交通事故による死者は、ついに一万三千八百九十五人にもなつた。これは全世界の交通事故による死者の一四パーセントである。七、八年前に「神風タクシー」がさわがれたところにくらべても二倍近くになる。

交通地獄という言葉だけでなく、交通戦争という言葉さえ使われている。その「交通戦争」がもつとも激しいのは、南北二十数キロ、東西五十数キロの狭い地域に千百万人も人口が密集している中を、百二十万台以上の各種の自動車が行列をつくって走り回っている東京だろう。この「交通戦争」の大都市を職場にして働いているのが、自動車の運転手である。東京にはハイヤータクシーの運転手だけでも、六万人もの労働者が、一瞬の差が交通事故の発生になる中で働いている。

東京・目黒の大輝交通で働いている服部昌克さん（三十歳）は、東京に六万人もいるハイヤー、タクシー労働者の一人である。服部さんのお父さんは、戦前はトラックの運転手で、いまも個人タクシーの運転手をしているので親子二代の運転手である。親子二代で同じ仕事という、順調そうで、幸福そうな感じがするが、労働者の親子二代というのは順調なものではない。

服部さんのお父さんは、小僧のときから、なんの遊びごともせず、営々と働き続けてやっとトラック一台を購入した。もう人に使われるのではなく、独立できると希望にもえたのもつかの間で、大平洋戦争で兵隊にとられてしまった。お父さんはせっかく買ったトラックを売って、家族のために生命保険にかかって出征した。南方に三年近くつれて行かれていますうちに、戦車と装甲車の間に挟まれて足が動かなくなってしまった。お父さんは生きて帰って来たものの、戦後五、六年は一人前に働けなかった。

男の子は昌克さん一人だったが、姉一人、妹二人がいて、一家六人は、母一人の働きで生活したから、服部さんの育ち盛りのころは大変な貧乏であった。服部さんが小学校三年のときに敗戦になり、集団疎開から帰ってくると、自分自身がひもじくてたまらないのに蒲田駅前のヤミ市で、さつま芋の金ツバを売ったりした。お父さんが十年以上もせせと働いて買ったトラックを売って、かかった生命保険は、戦後のインフレで鼻紙ぐらいの価値しかなくなってい



た。そのうちに一家は借家を追い立てられてしまった。どんなバラック家でも良いから、自分の家が欲しいというのが、服部さん一家の悲願になった。姉さんも中学を卒業するとすぐに働きただし、足の悪いお父さんも、米屋さんにつとめたりして、一家はたべられるものもたべないで、みんなやせて三角の顔になりながら働いた。生命保険でこりたので、みんな働いたお金は、タタミの下に新聞紙を敷いて、その上に百円札をならべてためた。ほしいものも買わず、たべたいものもたべず、着たいものも着ず、タタミの下の百円札をながめては、みんなでせつせと働いた。いまでは笑って話せるのだが、敗戦後の混乱期に、父が負傷して復員し、借家を追い立てられる状況の中では、笑い話ではなかったのである。そしてやっとバラック建築で自分たちの家をたてたのだった。

そんなふうにして育ったので、服部さんは、朝鮮戦争の年に中学を卒業すると、働いて金をためて、バラックの家を本建築にしたいという考えと、人なみのものをたべたり、着たりしたい気持ちでいっぱいだった。しかし、中卒後就職したスクーターの下請け工場では初任給はたったの三千三百円だった。服部さんはすこしでも給料の良い働き口をさがして、自動車修理工場やプラスチック工場などを転々とした。自動車の運転免許をとって、個人会社の運転手になったが、それでもまだ賃金は二万一千円だった。

服部さんは、もっと収入の多い仕事はないかとそのことばかり考えていた。ある日、タクシ一の運転手は、一カ月のうち十三日間だけ働いて、三、四万円の収入があるという話を聞いた。服部さんはタクシーを運転できる免許証をとって、さっそく、大田区のY交通というタクシー会社に就職した。最初は一日五百円の雑役ばかりやらされた。服部さんは早く乗勤して、思いきり、かせいでみたくてしよすがなかった。ある日、運転手が急に休んで車が空いたときに、乗ってみるかと言われて、服部さんは大よろこびで乗勤した。

せつかくのチャンスに気ばかり焦っても、能率よく客をさがす要領が分らないので、空車で走り回っている時が多く、夕方の五時ごろになると疲れて眠くなり、七時ごろには、もうがまんできなくなつて裏通りに車を止めて眠りこんでしまった。夜十時近くになって、あわてて目を覚ましたが、一日の稼ぎ高である水揚げはすこししかない。服部さんは絶望的になつてしまつた。そして目白駅前まで流してくると、服部さんは目を見はつた。駅前に、タクシーを待っている人が、長い列をつくっている。服部さんはお金がならんで待つてゐるような氣になつて、目白駅から短距離の八〇円料金ばかりの客を、夢中になつてピストン輸送した。夕食をたべてないので、おなかが痛いほど空腹だったが、服部さんは一人でも客をとられまいと、いく度もいく度も椎名町辺と目白駅の間を往復した。客はあとから後からとふえて、いくらでも列をつくっている。服部さんは、一日三百六十五キロ走行の制限いっぱい働いた。服部さんは水揚げ

を計算する時間もなく、始めて乗勤して、今日はおれが一番の水揚げだろうと、意気揚々として、深夜の二時すぎに会社に戻った。

ところが服部さんの水揚げは、計算してみると八千円で、ほかの人たちは平均して一万一千円から一万二千円ぐらいなのであった。服部さんは、タクシー労働者の仕事で、生易しいものでないことを知らされた。服部さんは、くやしかったが、「要領の悪い奴だ」と言われて、また雑役にされてしまった。

それから半月ほどして、服部さんは正式に乗勤できるようになった。服部さんはまた下車勤にされるのがつらくて、ひるも夜も、食堂でごはんをたべる時間も惜しんで働いた。勤務は午前八時出庫、深夜の二時帰庫ということになっていたが、実際には朝六時ごろ出庫して、陸運局の監査に引っかかるらないように日報には六時半ごろ出庫しておく。鉛筆で書くのだから、後でどのようになでも書き直せるのだった。そして昼食、夕食に各一時間づつ休むことになっていたが、服部さんは昼食は弁当、夜食はパンに牛乳ぐらいで、車内ですませてしまうのだ。そして深夜の二時に帰庫してから一時間ぐらいかかって、車の洗掃、それから入浴すると、抱束二十五、六時間になってしまうのだ。それでも服部さんは半年ほどは事故も起こさずに働いた。

服部さんが、おれは運転がうまいのだ、事故を起こす人はうでが悪いのだと、うぬぼれ始め

ていたとき、青山で衝突事故を起こしてしまった。両方の車が七〇キロぐらいのスピードを出していて衝突したのだが、服部さんは軽いけがぐらいですんだ。相手の車は大破で大けがだった。服部さんは損害賠償で毎月五千円ぐらい差引かれるようになった。その損害賠償が終わらないうちに、こんどは渋谷で正面衝突してしまった。両方の車が大破して、服部さんは氣を失う大けがだった。けががなおって働き始めたが、会社に差引かれる弁償金が一万円になった。食事する時間も惜しんで、四万円も働いても、手もとに残るのは三万円以下だった。まるで弁償金を払うために働いているようなものだった。服部さんはばかしくなかって逃げだした。そして新聞広告でさがして、新しく営業を免許されたばかりの大輝交通に就職した。

そのころの大輝交通は、車も十台だけで、運転手は十七人、修理その他で七人の会社だった。当時は新しく営業を免許された、いわゆる「新免」と呼ばれているタクシー会社が一時にふえて、運転手の数が少なかった。ワンマン社長は、エンジンの手入れはしなくてもよい、朝はヤクルトを飲んでくれ、入浴するときは手拭いや石けんは会社のを使ってくれと、みんなのきげんをとった。

服部さんは、くそまじめに働く一方のかせぎ頭で、毎日、水揚げが一万円以下になったことがなく、いつも水揚げは最高だった。ワンマン社長は、服部さんが一番の氣に入りだった。二言目には、「服部君はわが社の一番だ。みんな服部君に見ならってくれ」とみんなに言ってい

た。

当時、新免のタクシー会社は、運転手を採用するために四、五万円の支度を出すのがふつうだった。ところがワンマン社長は、みんなの気げんをとりながら、結局は支度金を出さず、暮れのボーナスも出さなかった。そして前の会社からの失業保険を取れるようにごまかして、お茶をにごそうとした。それに不満な人たちが、組合をつくる話をしはじめていたが、「服部は社長の気の入りだ」と、服部さんは仲間はずれにされていた。

会社は、服部さんたちを、甘い蜜を集めてくる働きバチのようにして、どんどんもうけた。どんどん大きくなったいった。四年後には、十台だった車が四十台になり、従業員も五倍近くの百人以上になった。みんな服部さんたち労働者が働いたおかげだったが、会社側は、いつのまにか、ヤクルトも出さず、入浴するときの手拭いや石ケンも出さなくなった。エンジンの手れもさせるようになった。退職金も決まっていなしいし、夏冬の一時金も三万円そこそこだった。

会社がもうかって、大きくなれば働く者への待遇も良くなってくるだろうと、まじめに働く一方だった服部さんも、疑問をもつようになってきたのは当然のことだろう。ある日、服部さんは、仲間の運転手に見せられた全国自動車交通労働組合・東京地連の資料に目を吸いつけら

れてしまった。その資料にはタクシー労働者の賃金が表になっていた。その表を見ると、一月に同じ十万円から十五万円の水揚げをしても、労働組合の強い職場と弱い職場、服部さんたちのように労働組合のないところでは、びっくりするぐらいの差があったのである。

例えば大和交通と服部さんの大輝交通の水揚げ別の賃金をくらべてみると、十四万円以上の水揚げでは、そんなに差がないのに、十万円では一万七千円も賃金がちがっていた。

表にしてみよう。

水揚げ	一〇万(円)	一一万	一二万	一三万	一四万
大輝交通	二五、八〇〇(円)	三一、八〇〇	三七、八〇〇	四六、八〇〇	五二、八〇〇
大和交通	四二、九六六(円)	四七、一八三	四八、二二八	五一、一九四	五四、一七〇

服部さんは、大和交通やその他、労働組合の強いタクシー会社の運転手は、無理な運転をしないで、昼食、夕食の休み時間もちゃんと休んでいるのを思いました。ゆっくり休み時間をとれば、運転手の職業病である胃腸病その他にかかることも少ない。それが分っていて、つい無

理をするのは、同じ十万円の水揚でも二万五千八百円と四万二千九百六十六円と、一万七千円以上の差があるこの賃金体系に原因があったのだ。服部さんは、以前に事故を起こしたY交通では、この歩合給の差がもっとひどかったことも思いだした。

労働者が労働組合をつくって、たたかっているタクシー会社では、歩合給だけでなく、最低賃金や有給休暇、ボーナスなどでも、ずっと良い条件をかちとっていることもわかった。運転手が体をこわしたり、事故を起こしたりする原因の大半は、この歩合給中心の賃金体系や労働のひどさと関係のあることが、水揚げ一番で働いてきた運転手の服部さんには、説明されなくともわかるのだ。

## 2. あんたは組合にだまされているのよ

大輝交通には、ほかのタクシー会社と同じように、班長を中心にした労資協調の「輝友会」という従業員の親睦団体ができていた。最初、労働組合をつくろうとした人は、個人加盟の単一労働組合のしかたを知らなかったため、この「輝友会」を企業組合に変えていこうと考えた。そして熱心に活動して、二人の活動家が「輝友会」の役員に選ばれた。そして「輝友会」を労働組合に発展させて、全自交（全国自動車交通労働組合）に組織加盟にしようとした。しかし全自交のオルグ（組織活動家）は、それでは御用組合になりやすく、たたかえない。全自交ではそのような形で組織加盟させる方針はとってないと説得して、個人加盟の方向を打ち出した。それで約四十人の従業員のうち、七割の二十七名が個人加盟の東京自動車交通労働組（東自交）に参加した。すると中心になっていた二人の活動家が、交通違反のデッチ上げや、難くせをつけられて解雇されてしまった。そして運転手四人に一人の班長をつくり、労資協調の「輝友会」を使って、もうれつに組合を切りくずしてきた。下車勤にしたり、古い車に乗せたりしていやがらせするばかりでなく、暴力団を使って丸太ン棒でおどしたりした。そのため組



合員のほとんどの人は転職してしまい、一部の人は会社側になってしまった。

解雇された二人のうち一人は創価学会員だったが、まもなく首切りをのんでしまい、残った一人の本山さんは、解雇無効を東京労働委員会に訴えて、二百七十九日もたたかかって現職復帰を勝ち取った。本山さんが職場に戻ってきたときは、組合員は服部さんをふくめて三人しか残っていなかった。

服部さんは、労働組合があったほうが良いとは考えたが、最初は熱心な組合員ではなかった。また社長の気に入りと思われていたので、組合加入のさそいも一番最後だった。会社側のスパイになるとこまると、警戒されたためだった。その服部さんが、がんばり抜いた三人の中の一人に残ったのだから、人間は表面的なことでは分らないものだ。だれよりもまじめに働きとうしてきた服部さんは、それだけ、もの事を真剣に考え、労働者のおかれている立場の矛盾をだれよりも強く感じ、また一番のがんばりやだったのである。

服部さんはまた、たたかうためにうんと勉強した。あけ番の日に労働講座や講演会があるとすこしぐらい遠くても必ず聞きに行った。客待ちのときには何かの本を読んでいないと気がすまないくらいに、労働者のためになる本を読んだ。未知の世界がどんどん開けてくるようだった。社会科学や革命文学、あるいは革命の物語りは、親子二代の自動車運転手の服部さんの頭

の中に、乾いた砂が水を吸うようにしみこんだ。十五万円ぐらいあった水揚げがへって、十万円以下になってしまふほど本を読んだ。労働組合の仲間に、水準の十三万円ぐらいは水揚げしないと、信用が落ちるし、会社側に中傷の口実をあたえると批判された。それでみんなの平均ぐらいは働くようにしたが、一日分働くと後は静かなところに車を止めて勉強した。労働者はどうして働いても働いても貧乏で無権利なのか、その社会のしくみや、それを変えるためにたかかねばならないことが、深い霧が晴れてきて、ものごとがはっきりと見えてくるようになってきた。その真理をつかめるか、どうかということは、目先のすこしぐらいのかせぎに変えられないほど尊かったのだ。水揚げ最高が自慢でかせぎまくっていたころの服部さんとは、まるで別人のようだった。

ところで、こんな服部さんの変わり方が気に入らなくて、反対したのは、会社側だけでなかった。服部さんは労働組合が結成される前後に、当時十九歳の恒子さんと一年前から知りあつて、結婚したばかりだった。服部さんのお母さんは苦労してきた人だったが、ある新興宗教の信者になっていて、服部さんの組合運動に反対した。お母さんは、若い嫁の恒子さんにも、服部さんの組合運動に反対するように言った。恒子さん自身もその気持ちだったから、服部さんは会社でも家でも反対されることになった。

服部さんが、茨城県大洗海水浴場で、恒子さんの写真をとったことから知り合って、一年ほど文通したり、会ったりしてから結婚したのだが、それまでの服部さんは、働く一方で組合には消極的だった。服部さんは二十五、六歳で四万円以上の収入があったから、埼玉県で働いていた恒子さんに会うたびにこういったものだった。

「ぼくは四万五千円近くもかせぐんだ。きっとあなたを幸福にしてみせるから、大船に乗った気持ちできて下さい」

農業をしている恒子さんのお父さんも、二人の結婚にこういって賛成した。

「これからは百姓より運転手だ。免許証さえ持っていれば食いはぐれないからな。それに服部さんはまじめで働きもんだから、お前は幸福だよ」

しかし、結婚してまもなくのころから、服部さんが組合運動に首を突っこんでいるのが目立ちはじめ、収入がへるのもかまわずに、本ばかり読み始めたのだから、恒子さんが怒ったのもむりはなかった。服部さんは、恒子さんになんとか理解してもらおうと努力したが、考えていることがうまく話せない。ひと言、ふた言、話しだすと、恒子さんはお母さんに言われたとうりに、

「あなたは組合にだまされているのよ。いくらあなたが反対したって、アメリカの原子力潜水艦は入ってくるし、物価は下がらないじゃないの。そんな運動をして、収入がへったり、お

金を使ったりしてつまらないじゃないの。いくら良いことでも、あんた一人がさわいでも何もできっこないわよ」

と言い返すので服部さんにはとりつくしまもない。それでも一度は恒子さんを、むりやりに説得して、大田区の労働講座に引っぱって行った。自分ではうまく話せない服部さんが、恒子さんに労働講座の講師の話で理解してもらおうと考えたのだ。ところが講師の話は、むずかしい言葉ばかり出てきて、恒子さんにはさっぱり分らないし、おもしろくなくて途中で帰ってしまった。

一方、服部さんのほうは、毎日、毎日、発見があり、生きがいのある労働運動がおもしろくてたまらない。あちこちの集会や、会議や、争議団の応援に行つて毎日のように帰宅がおそくなる。恒子さんは怒つて、食事のしたくもしておかない。服部さんはしかたがないので、台所をゴソゴソさがして、口に入るものならなんでもほうりこんで、寝ようとする。するとまた大変だ。恒子さんがふとんをはいでしまうのだ。恒子さんは、服部さんのお母さんに言われているので強気なのだ。服部さんは眠くてたまらない。それでは押入れの中に入って、ふすまをあけられないようにして寝ようとする、恒子さんは、負けじとばかり、いつまでもふすまをどんどんたたいて、服部さんを眠らせないようにする。

しかしまもなく服部さんは、気性の強い恒子さんに支えられ、恒子さんの協力に感謝しながら

ら、たたかうようになるのである。組合結成直後に解雇された本山さんが、都労委に提訴して、二百七十九日ぶりに解雇無効をかちとって、一九六三年三月に職場に復帰してくると、会社側は、前にもまして露骨な攻撃をかけてきた。そのころは会社は本雇用の運転手四十人のほかに、権利ゼロの臨時運転手五十人をこき使うようになっていた。そんな中で服部さんたちは、非公然の組合員を拡大しながら反撃していった。そして翌年暮れには、五十人以上の労働者を団結させて、ねばり強いビラ張り活動、職場集会を重ねて行って、ついに暮れの一時金四万二千円をたたかいた。中核になってたたく労働組合がなければ考えられない成果だった。本山さんは東自交目黒支部長、服部さんは同支部大輝分会会長に選ばれていた。東自交というのは、都内のハイヤー、タクシー、観光バス、自動車教習所で働く労働者の個人加盟の単一労組の略称である。

そして翌年春、東自交大輝分会が春闘の準備をしているとき、会社側が先手を打ってきた。会社が赤字だからという、ウソの理由で、いままで一年で廃車にしてきたタクシーを三年間使おう、プロパンが値上がりしたから四千円賃下げすると発表した。どちらも水揚げの歩合で働かされているタクシー労働者にはとてもがまんできないことだ。服部さんたちはすぐにビラをつくって、みんなに訴えた。すると会社は、服部さんを下車勤にする弾圧をかけてきた。下車勤というのは、運転手を乗務させないことで、どぶ掃除、ごみ焼き、修理の手伝いをさせて、賃

金が手取りで二万一千円、収入が半分になってしまふのである。さらに一日休むと二千円づつ差引かれるのだ。ピラをくばって、賃下げと労働強化に反対しただけで、こんな乱暴なことが、資本家の自由の名のもとに許されてよいのだろうか。そして会社は、タクシーを三年使っても苦情をいわないこと、ピラは今後社内でもかかないこと、ピラに書いてあったことはすべてまちがい、謝罪する始末書に署名すれば、下車勤を撤回するというのである。

### 3. 労働者の大船は団結だった

会社側が服部さんを下車勤にしたのは、ビラのことは口実で、東自交・大輝分会の組合をつぶすことと、中心になっている服部さんが生活できないようにして退職させることがねらいだった。

税込みで四万七、八千円あった収入が、手取り二万一千円になって、びっくりしたのは公重（きみえ）ちゃんという赤ちゃんを産んだばかりの恒子さんだった。恒子さんは、服部さんに「大船に乗った気持ちでいてくれ」と言われて結婚したのだが、二万一千円で親子三人が暮らして行けるものではない。大船どころか、泥船に乗せられたようだった。

服部さんは、朝早く会社へ行って、仲間の運転手が交代する前に、自動車を洗って二百円もらうアルバイトをはじめた。しかし、一人ではいく台も洗えない。恒子さんもスラックスに雨靴をはき、赤ちゃんをおぶってアルバイトの手伝いを始めた。赤ちゃんを車の中に寝かせて置いて、二月の寒い盛りに、ゴムホースで自動車に水をかけ、タイヤには石ケンをつけてブラシ

でござしとこする。最後にはぞうきんで、車体をきれいに拭う。一台に三十分ぐらいかかる。恒子さんは一台でも多く洗車しようと、寒中に汗だくになって働きながら、服部さんたちの仕事をすこしでも理解するとともに、会社のしうちに腹が立ってきた。

恒子さんが洗車を始めた最初の日、社長は恒子さんに小腰をかがめて、ニコニコしながら、「ごころうさんですね」と声をかけた。そんなに悪い人でもなさそうなのに、どうなっているのだろうと恒子さんは思った。

次の日も、恒子さんが、自動車を洗っていると、社長の使いが、仕事が終わったら、事務室へどうぞよって下さいと言ってきた。

恒子さんが、事務室へ行ってみると、さアさアどうぞこちらへと、ていねいに迎えられて、コーヒーをすすめられた。固くなっている恒子さんに、社長がニコニコ笑いなが話しかけてきた。

「奥さんもいろいろ大変ですね。お嬢ちゃんは何カ月ですか。元気ですか。かわいいですね」

恒子さんは、ついでまされそうになった。社長はもしかしたら良い人で、服部さんがたてついでばかりいるからいけないのではないだろうか。わたしがたのめば、下車勤をやめてくれるかも知れないと思えた。



「あの、うちの人の下車勤をやめていただけじゃないでしょうか」

それを聞くと、社長はいっそう笑い顔になって答えた。

「いやー。わたしもね、下車勤をやめてもらいたいのですが、なにしろ服部君が強情をはって、車に乗らないのですよ」

まるで服部さんが、好きこのんで下車勤をやっているような口ぶりだった。

「奥さんからも、始末書にちょっと署名して、下車勤をやめるように、言ってくれませんか」社長はねこなぜ声で言った。恒子さんは深く考えたわけでもなく、思ったことを言った。

「そんなものを書かないでも、白紙にして車に乗せてくれませんか」すると社長の表情が、がらりと変わった。

「そういう気にいるなら、うちの車にさわらないでくれ。さ、もう、いいから帰ってくれ」恒子さんは、ねこなぜ声で、赤ちゃんのごあいそを言っていた社長の顔が、突然、冷血鬼の表情に変わったので、背筋がゾッと冷たくなった。

あとで聞くと、その席にはテープレコーダーがしかけてあったという。恒子さんが哀願したり、服部さんへのうらみ言でも言えば、それを何かに利用するつもりだったのだ。

人経営者って、たくさんもうけて、さんざんに人をおだててこき使っておきながら、なんてずるいことを平気でするんだらう。こんな人間を相手にしているのでは、組合の人たちも大変

だわV

恒子さんは、服部さんにくら言われても分らなかつたことが、職場に来てみて、たった二日間分ってしまった。

三日目、恒子さんが洗車をしていると、最初の日には小腰をかがめて、「ごくろうさんですね」と言っていた社長が、血相を変えてとんできて、いきなりどなりだした。

「出て行けッ。退去を命令するッ」

命令するとは、おかしな言葉だが、社長は職制をさし図して、恒子さんの手をとり、足をとって外へほうりだした。赤ちゃんを車から出して背負うひまもあたえなかつた。そして、門には「従業員以外立入り禁止」とマジックインクで書いたビラが大いそぎで貼り出された。そして職制や会社の御用団体になった輝友会役員がピケ（監視線）を張って服部さん夫婦を中へ入れない。

「わたくしたちは、なにも悪いことはしていない。こんなことをされて、泣き寝入りできない。どうしても勝つまでがんばり抜こうV」

恒子さんの胸に、腹の底からの怒りがこみあげてきた。そうして服部さん夫婦の心は固く結ばれて一つになった。恒子さんにたたかう相手はだれなのかを知らせ、服部さんたちのやっている組合運動を支持するように変えたのは、ひにくなことに大輝交通の社長なのであった。

交渉はもの分れのまま、服部さんの下車勤は二月、三月、四月、五月と続いた。腕のいい運転手である服部さんが、どぶ掃除、ごみ焼き、修理の手伝いばかりやらされた。一つひとつの仕事に難くせをつけられ、いやがらせをされ、暴力さえもふるわれた。組合の分会会議でも、始末書を書いた方がいい、いや書くべきでない」と議論が続いた。

会社側は、「東自交が始末書を書いて下車勤をやめないと、企従業員夏の一時金から六千円づつ差引いて、それを東自交が都労委に提訴した賃金保障（バックペイ）や弁護士費用にしなければならぬ。みなさんの力で東自交の下車勤をやめさせてくれ」と、輝友会役員に吹きこんで、輝友会会員と東自交を対立させようとした。そして輝友会会員を東自交排除のピケに動員したりした。

服部さんたちは、ねばり強く、下車勤の不当性と権利の重要性、輝友会の労資協調のごまかしを、仲間の労働者たちに訴え続けた。また会社のやり方のひどさを、地域の労働者たちに訴えて行った。しかし服部さんがそのために欠勤しなければならぬので、一日二千元、七月は七千二百円、八月はたったの二千四百円しか受けとれなかった。貯金はすっかりなくなり、夕食のおかず代もないときがあった。恒子さんは、テレビの部品づくりや、袋はりの内職をしたり、保険の勧誘員になって働いたが、とても足りるものではない。

そんなとき、地域の労働者たちが、支援金を集めて持ってきてくれては、恒子さんをはげま

した。たたかう労働者はけっして一人ぼっちにはならないと、恒子さんはしみじみと思ったという。服部さんが結婚する前に言っていた大船は、強欲な経営者のためにだめになってしまったが、どんなあらしにも負けない、ほんとうの大船はたたかう労働者の団結にあることを恒子さんは知った。服部さんのアパートの周辺には、出入りする労働者をスパイしようとして職制がウロウロしていたが、恒子さんはもう負けなかった。

会社の中でも、会社の外でも、服部さんたちを支持する人たちがふえていった。会社は内心あわてながら、交通違反の罰金二割五分会社負担、病欠保証一日三百円を一方的に打切ったり秋期旅行を中止した。そして東自交・大輝分会にたいして就労拒否のピケを、職制を使って強行したが、以前のように労働者からは支持されなくなった。

そして十月十三日、実に二百四十四日ぶりで、服部さんは都労委で、ついに「下車勤撤回」を勝ちとった、ワンマン社長は「下車勤もピケも撤回します」と、みずから掲示せざるを得なくなった。長く苦しめたたかいたが、服部さんは、ふたたび晴ればれとした表情でハンドルをにぎり、東京の街の中に車を走らせ始めた。

この二百四十四間のたたかいで、服部さんは見ちがえるように強くなったが、それよりも変わったのは、恒子さんのほうだった。その後も大輝交通では、会社側が暴力団をやとい入れ

て、きびしいたかいが続いているが、恒子さんは、働く人間が尊重される社会をつくるために、夫と同じ考えで、たすけ合って活動できるのが、いちばんの幸福と考えるようになってる。

いま東京都内のハイヤー、タクシー、観光バス、自動車教習所で働く労働者は七万人といわれている。そのうち労働組合に組織されているのは四分ノ一で、五万人以上の労働者が無組織である。その中でもふえているのは「門前雇用」と呼ばれている日雇いの運転手だ。八年前に、事故防止・神風タクシー追放のたたかいで法制化された、最高制限走行三六五キロを、今日の交通マヒを無視して押しつけるどころか、都内で最大の某交通などでは、一日四百キロ以上も走らせて水揚げを強要し、一社だけで一九六五年には七名、六六年には九名の人命を奪う交通事故を起こしている。

経営者は、経営者団体の団結を強めて、このような労働強化、賃下げ、歩合給の悪化、水揚げの強要を暴力団を使いながら、ハイヤー、タクシーの労働者に押しつけている。これに対抗して、労働の権利と生活を守るためには、七万人の労働者が団結して、労働組合をつくり、服部さん夫婦のように一人、一人がなることが必要なのではないだろうか。ハイヤー、タクシーの経営者がボロもうけしていることは、自民党に巨額の政治献金をしている事実や、個々の経営者の生活、暴力団をやとうのに金を惜しまないことを見ても分ることである。そのもうけの

一部分を、労働者がとろうというたたかいが困難なのは、経営者たちの団結にくらべて、労働者の組織化や団結がおくれているからだろう。

七万人の労働者が団結してたたかえば、その生活と労働条件がもつともつとすばらしいものになることは、だれが考えても分ることではないだろうか。

ハイヤー、タクシー、観光バス、自動車教習所で働く仲間を、一人でも多く一人でも入れる個人加盟の東京自動車交通労働組合に入ってもらおう。

日本映画テレビ産業労働組合



八、オバQのテレビ漫画のかげにも

個人加盟労組の

闘う仲間たちがいる



Q Q Q オバケのQ

ぼくはオバケのQ太郎

頭のとっぺんに毛が三本、毛が三本

だけでもぼくは飛べるんだ

八キロ、十キロ、五十キロ

ひとやすみ、ひとやすみ

空から降りたら犬がいた

ワン ワン アラコワイ キャー

ぼくは犬にはよわいんだ、よわいんだ

軽快なテーマソングとともに、TBSで日曜日の夜七時半から始まるテレビ・マンガの「おぼけのQ太郎」は、アメリカおぼけのドロンプにいじわるばかりされながら、底抜けに気がよ

くて、小さな子どもから大人までに人気がある。「チビッコのどじまん」で、まだ口もよく回らないような幼児が、元氣よく、ほんものの歌手よりも実感をこめて、「ワン、ワン、アラコワイ、キヤー、ぼくは犬にはよわいんだ、よわいんだ」とうたって一等賞になったり、メーデーのプラカードにQ太郎の絵がたくさん登場して、物価の値上がりを怒ったり、賃上げを要求したりしていた。

この人気があるテレビ・マンガを製作している人たちは、さぞ賃金もよく、たのしく働いているのだらうと、だれでも想像するが、実際はどうなのだらうか？

「おぼけのQ太郎」を製作しているのは、東京ムービーという現在従業員七十人ほどの、この五月でやっと三年になる新しいアニメーション（動画）専門の会社である。この会社の株の八五パーセントは、親会社の国際放映株式会社を持っている。国際放映といっても一般にはなじみがないが、「チャ子ちゃん」「泣いてたまるか」「君の名は」などのテレビ映画を製作している。テレビ映画の製作では日本一の会社で、東宝、TBS、フジテレビ、電通などが大株主である。この国際放映と東京ムービーの関係は、社長が同じ阿部鹿蔵氏、重役も両方の会社を兼任しているという関係である。

武蔵野美術大学卒の畠山芳子さんが、東京ムービーの創立直後に入社したとき、従業員は百

三十人近くいた。それから三年もたたないのに、そのなかで現在残っているのは、わずか五人というからだれでもびっくりするだろう。畠山さんは、やめたいという人に、「いまの日本では、どこへ勤めても同じようなものよ。それより、せっかく働きだしてなれた職場だから、働きよい職場に変えるように、お互いがんばりましょうよ」と、いく度とめたか分らない。しかし、その度に、「こんな暗い職場にこれ以上がまんできないわ」「こんなに賃金が安くてはとても生活できないし、希望も持てない」と言われて、引きとめることができなかった。

仕事がなくて、いつ倒産するか分らない会社というわけでもなく、先細りになっていく職業ではない。その反対に、「おぼけのQ太郎」は三〇パーセントの視聴率が落ちない人気で、アニメーション（動画）という仕事はテレビの普及と発達で、ますます盛んになるというのに、どうして、わずか三年の間に百三十人近い人のうち、百二十人以上の人がやめて行ってしまったのだろうか。ここで考えてみる必要があることは、経営者が、あまりにも多い退職者を引き止めるのに、待遇を良くしたという事実がないことである。いいかえると、強欲な経営者は、計画的に、百三十人中百二十人以上の人を自発的にやめていくようにしむけてきたのである。やめて行った人たちは、経営者の手にままと乗せられてしまったのだ。

なぜかといえ、その後、週に十五分もの二本、一カ月に八本のマンガ「おぼけのQ太郎」の半数が、より低賃金で、より労働強化でより身分の不安定な、下請けの約七十人の人たちによ

って、一本いくらの契約で製作されている。このことはアメリカおぼけのドロンプに忍術をかけられたように、東京ムービーの従業員の半数が首切られて、下請けに変えられてしまったのと同じ結果になっている。働く人をより低賃金で、いつでも首を切れるようにしておいて、どんな欲なもうけを追求する経営者、資本家にとって、こんなにうまいことはない。反対に働く人にとっては、全体の立場になって考えてみると、自分たちを社員から下請けの労働者に、労働条件を悪化させてしまったのと同じである。

一九六四年五月に創立された東京ムービーには、その後一年半ほどは、ちゃんとした就業規則も、昇給規定もなかった。阿部鹿蔵社長以下の経営者たちが、労働基準法の第九章に「就業規則」があり、第八十九条には「常時十人以上の労働者を使用する使用者は、左の事項について就業規則を作成し、行政官庁に届け出なければならぬ」と決められ、左の事項には、就業時間、休憩時間、休日、賃金の計算及び支給方法、昇給、退職手当、災害補償及び業務外の傷病扶助等があることを知らないわけではない。親会社の国際放映には映画総連加盟の労働組合もあるのだから、いやというほど知っていて、東京ムービーの従業員がだまっていれば、いつまでもそのまましておくつもりだったのである。

それで創立の年には夏、冬とも、賞与はなかった。定期昇給もなかった。最初は大学卒でも

一万六千円の低賃金で、少数の人が個々に交渉して賃上げさせているありさまで、多くの人が、失望してやめていくのも、むりはなかった。

この東京ムービーの職場に、一人でも加盟できる日本映画テレビ産業労働組合（略称・映産労）の組合員ができたのは、翌年の秋ごろだった。就業規則をちゃんと決めてほしいという声は、夏ごろから、従業員の中から出始めていた。というのも、夏の一時金が〇・二五カ月分から〇・五カ月というスズメの涙ほどで、それも人によってまちまちな支給だったことも原因していた。映産労の組合員は、まったく非公然のうちで、就業規則の問題にとりくんで行った。そして従業員全体でいく度もいく度も討論を重ねて、みんなの一致した就業規則の希望案に、全員が署名した。

全員が署名した就業規則の希望案が書面で作られたが、それをだれかが経営者のところへ持っていくと、首謀者のようににらまれても困る。さて、どうしたら良いかと、猫の首に鈴をつけるネズミの会議のようになつた。昼休みにみんなが集まっているところに呼べば良いということになり、就業規則の希望案と全員の署名は、経営者がすわる机の上に、すぐ目につくように置いておくにした。

首謀者と思われる心配のない人が、経営者の一人を、電話で、「みなさんが呼んでいますけれど」と呼びだした。その経営者は、みんなの集まっている部屋のドアをあけた瞬間、さっと青

くなくなった。ふるえながら、卓上の書面を手を取った。みんなも始めての対決でふるえていたが、経営者は書面を持った手がブルブルふるえていた。みんなは平均年令二十三歳ぐらいで、女子が半数、経営者は四十歳以上だ。働く人たちはいつも首切られるおそれがあるのだから、こんなとき、緊張するのはあたり前として、四十歳以上の経営者がどうして青い顔をしてふるえるのだろう。ただ就業規則を世間なみにしてほしいということだけなのに……。あとで、ストライキをやられるのかと思って、それが恐ろしかったともらしていたというが、経営者は、働く人たちの権利をごまかし、その働いた分の利益を大巾に搾取している罪悪感が、ふだんは感じてもないのだが、こういう時になると思いあたるのだろう。

非公然でまだ少数だったが映産労の組合員はかげの力になって、東京ムービーで「おぼけのQ太郎」を製作している人たちは、ちゃんとした就業規則をかちとった。初任給も大学卒二万三千元、高校卒一万八千元にアップされた。生理休暇もとれるようになり、病休も三日までは月給から差引かれないことになった。それまではつきりしてなかった有給休暇も、会社案の六日から十日になった。結婚式や忌日の休みもとれるようになり、皆勤手当でも二千元出されることとなった。大きな成果だった。みんなが団結したこと、少数でも映産労の組合員が、みんなを団結させるように活動した成果だった。

ついで冬の一時金の季節がやってきた。「おれたちも、たまには世間なみのボーナスをもらつてみようじゃないか」と、職場で声が起こり始めると、会社は年末一時金一ヶ月分余を支給した。職場の人たちはその早さに目を白黒させた。前年のゼロ、夏の〇・二五〇〇・五カ月分とくらべると、大巾な増額だった。これは就業規則の要求でもり上がった人たちが、さらに一時金要求で結束しないうちにと、会社側が先手を打って支給したのだった。労働組合の活動があるのとないのでは、大変なちがひがあることが、良く分るのではないだろうか。

翌六六年春。表面的には労働組合のない職場だったがだれかが折り鶴の下に「三〇〇〇円賃上げしてくれ」という短冊をぶら下げた。すると、職場の人たちは、わたしも、おれもと、折り鶴をつくり、その下に短冊をつけて要求を書きだした。やっこさんに短冊を下げる人もいた。「スリッパが欲しい」「がたがたの床をなおしてくれ」と書く人もいた。そして七十人の職場で、三百もの要求を買いた短冊をつけた折り鶴ややっこさんがぶら下った。経営者がドアをあけると、すぐ目につくように下げる人もいた。非公然の映産労の組合員は、この要求実現のためにたたかった。

こうして、東京ムービー始まって以来の賃上げ闘争が、だれが中心とか、だれが指導者ということもなく、すすめられた。賃上げはみんなの要求で、みんなのたたかいだった。そのねばり強いたたかい、日に日に、折り鶴ややっこさんがふえていくたたかいに、会社側もたまらな

くなくて、二千八百六十円の賃上げを発表した。だれが代表ということではないので、会社は、みんなに二千八百六十円の賃上げを発表するより方法がない。みんなはおどりがつてよるこんで、大きな役目を果たした折り鶴やっこさんを片付けた。

そして夏には一・五カ月分の一時金、暮れには、一・七カ月分の一時金が支給された。二年前のゼロ、一年前の〇・二五〇・五カ月分などくらべると、大分世間なみに近づいてきた。

それも暮れには、映産労、東映動画労組、民放労連の署名入りの、「年末一時金三カ月分プラス二万円をちとろう」というビラが、外の組合員の手でまかれたことが力になっていた。同じ「おぼけのQ太郎」を製作していて、ゼロから一・七カ月分支給とは大変なちがいが、映産労などの労働組合の力がなければ、もとのスズメの涙金でごまかされていたのである。

ところで同じアニメーション(動画)映画をつくっていても、労働組合が公然とがんばっている東映動画労組では、年末一時金二・七カ月分をちとっている。賃金も東映動画のほうが多い。それでも東映動画の経営者はばく大なもうけを上げているのである。東京ムービーの資本金は東映動画以上のもうけをあげていることはまちがいない。ところが東京ムービーの経営者は三十万円の赤字決算だと言っている。経営帳簿のカラクリに明るくない労働者は、この赤字宣伝にだまされがちだ。しかし会社の帳簿というものは、赤字でも黒字にできるし、大もうけしてもちよっぴり赤字にすることぐらいは、簡単なことなのである。社長の能力が問題にな



って、資本家に首切られたり、社長以下の重役陣の給料が大巾に切り下げられたのが目に見えなければ信用できるものではない。

日本映画テレビ産業労働組合の島田書記長の話によると、東京ムービーの親会社である国際放映は、テレビ映画の売り上げは三九年度の九億円から、四十年度は六億五千万円に下がっている。ところが「おぼけのQ太郎」などのマンガ映画の売り上げは、三九年度はゼロ（東京ムービーの発足前の勘定）で、四十年度は一億一千六百万円になっている。そして四十年度に純利益一億数千万円を別途積み立てているという。つまりテレビ映画の売り上げが二億五千万円も減っている年に、一億数千万円の純利益を上げているのである。東京ムービーの「おぼけのQ太郎」の利益が同じ阿部鹿蔵社長である国際放映に、吸い取られているのでなければ、どこからそんな一億数千万円もの純利益が上がるだろうか。国際放映は資本金三千万円の会社である。一期で資本金の五倍ものポロもうけとは、なんとすごいものではないか。

この驚くべき利益を生み出したのは、普通の映画とちがって、スターの出演料、設備費やロケの交通費などがかからず、かかるのは絵をかく人たちの人件費が主といわれるアニメーション（動画）の東京ムービーで、平均二万円という低賃金で働いている人たちである。またそれ以上に下請けで「おぼけのQ太郎」を製作している人たちの低賃金なのである。労資協調の考え方が宣伝されているけれど、それはまったくのごまかしである。資本家の欲望は無限で、労

働者が団結してたたかわない限り、私たち働く人間を果てしもなく搾取してくるのである。

「金をつかむものは人を見ず」という古いことわざがあるが、資本家は、働く人間を同じ人間とは考えていない。資本家は、もうかつたら給料をあげるなどと、気休めに言うことがあるが、それを実行したことなど一回もない。大量の人殺しである戦争を、金もうけの手段にする資本家は、働く人間を金もうけの道具ぐらいにしか考えていないのだ。

この東京ムービーで、昨年十一月、二人の婦人が突然首切られた。二人は、非公然で活動していた映産労分会の組合員で、暗い職場だった東京ムービーで、職場を明るくし、世間なみに生活できる賃金をもらえる職場にしようと活動していた畠山さんと、柄沢さんである。

十月に、職場でブドー狩りにいきたいという声が出た。二十五歳でも、東京ムービーでは一番古く、年長者でもある畠山さんは、みんなに相談された。貸し切りバスで行けば、一人九百五十円で行けることが分った。それには五十人、希望者がいないと行けない。希望者を集めているうちに時期がすぎて、途中からミカン狩りということになった。畠山さんは、会社に入っている下請けの人たちもさそった。下請けの人たちもよろこんで参加を約束して、足りない十人がすぐにそろった。みんなが行くのなら会社も補助しようということになっていた。ところが、下請けの人たちをさそったのは、会社に損害をかけたという理由で、畠山さんは一カ月の自宅待機を命じられた。こんなおかしな話があるだろうか。

また、それと前後して、東映動画労組が中心になって、毎年開かれている動画労働者のつどい、「アニメ祭り」に参加しないかという呼びかけがあった。その「アニメ祭り」は各職場から実行委員会をえらびだして、各職場から出演することになっていた。前年には二、三人が参加しただけの東映ムービーでも、エレキバンドとコーラスの二組み、約三十人が参加しようと、はり切って練習を始めていた。柄沢さんはコーラスに入っていた。

ところが会社は「アニメ祭り」が近づくと、練習していた人たちを呼びだして、「アニメ祭り」には行かないほうがよいと、圧力をかけた。そして十一月六日に「アニメ祭り」があるのを知っていて、十一月五日に行くことになっていた「ミカン狩り」を、十一月六日に変更すると突然発表してきた。職場の人たちが怒ったのはあたりまえで、「ミカン狩り」は参加希望者がわずかになって、中止になってしまった。

そして翌七日、畠山さんは、三人の部長に呼びだされて、「下請けの人をミカン狩りにさせたのは越権行為である。一カ月の休職で自宅待機しろ」と言って、畠山さんの机の引きだしものを捨てるという、なかば暴力的な態度だった。柄沢さんも呼びだされて、「あすからTBSの局内にある職場（撮影）に配転だ」といわれた。柄沢さんは、動画を書くアニメーターで、撮影の知識はない。それに撮影の職場は三人の男性がいて、まに合っている。

二人は、まったくなつとくできないので、こんな処分は受けられないと主張した。職場のみ

んなも、理由をただしたが、会社側は、「みんなに理由をいう必要はない」と説明しなかった。

その後、映産労、映演共闘の仲間とともに団交したが、会社側は途中で二人の解雇を発表し、二人を職場から追い出した。そして労働組合の代表には「解雇の理由はいえない」「処分は撤回しない」をくり返している。

そしていま、東映ムービーの二人の解雇を撤回させるたたかいは、単一労組、映産労のたたかいになっている。

会社側は、「あの二人はアカなんだ。特別なんだ」と言いふらして、二人と職場の人を切り離そうとやっきになっている。「アカ」というレッテルさえはれば、どんな無法な首切りでも許される、労働者をおどかして切り離せるという考え方は、アメリカが南ベトナムに侵略して、ヒトラーも顔をそむける、焼きつくし、殺しつくすという犯罪を重ね、北ベトナムへの計画的な住民地区への爆撃でも焼きつくし、殺しつくす犯罪を拡大しているのと、まったく同じやりかたである。日本人の良心と労働者のめざめは、こんな無法なことを日本ででも、ベトナムでも許すことはできない。

ミカン狩りに、同じ「おぼけのQ太郎」をつくっている下請けの人たちをさそって、なぜいけないのだろうか。

同じ漫画映画をつくっているアニメーターの仲間たちと、歌や音楽の集まりをもって、どうしてわるいのだろうか。

どちらも働く人間としては、あたりまえの要求である。ところが働く労働者を会社別、職場別、社員と下請けとばらばらに切り離して、弱いところほど低賃金を押しつけて、果てしなくもうけようとするのが資本家のやり口だ。だから彼らは、働くものの交流が広がると、自分たちの搾取のカラクリが知られるので、コソ泥が白日を恐れるように、労働者の交流や団結を恐れるのである。

いま畠山さんは、「おはよう！」という日刊新聞をつくって、杉並区阿佐谷の住宅地にある会社の門の前で、雨の日も、雪の日も職場の仲間たちにくばりながら、不当解雇のてっ回をめざしてたたかっている。

映画・テレビ産業といえば、文化的な仕事だろうと考えられている。確かに文化的な面もあるが、働く労働者の立場に立つと、この産業でも文化的な生活ができ、人間性が尊重されているわけではない。東京ムービーが例外的にひどいのではない。動画以外の職場でも同じようなものなのである。

この一月末に開かれた日本映画テレビ産業労働組合第四回定期大会の討議資料「私たちの活動と現状」のなかでも、Nさんが「テレビ映画撮影の一日」という手記を発表している。その前半を引用してみよう。

「小田急柿生駅午前七時集合。駅の前にはマイクロバスが待機しています。遅れた方はタクシーで現場へ、代金は自費です。現場まで百二十円。なぜこんなに早く集合するの。俺なんか朝食もたべられず、五時に家を出るんだよ。午後二時半になると山間に太陽が沈むので撮れなくなるからだよ。だけど、陽が落ちて、撮影終了と思ったらとんでもない。照明部は急いで用意してある発電機から、延々とコードをひっぱり。監督は用意スタート。ライトが点灯。ハイ本番。夜間ロケのようだね。太陽が出てた時と同じシーンだが変わらないのかな。大丈夫だ。カメラマンも照明技師も何もいわないもの。……それより、朝が早いのに腹が空かないのかな。三時だよ。俳優さんを何時かまでに終わらせないといけないんだって。出演している俳優さんはみんなかけもちだから、早く終わらせる俳優さんから順に撮影するんだそうだ。……食事時間は二十分で、現場移動します。と助監督の声。こんな弁当で足りるか。数がなくて一つにしてください。六時半、やっと終わり。誰も何もいわない。夕食をとりにきてください。なんだ、昼の残り弁当ではないか。足りない人はまだありますから。ふざけるな。明日も

今日と同じく七時集合です。誰も返事をしない。柿生から新宿までいくら。片道九〇円。交通費は会社は出さないの？ エキストラの人は半分でるんだって。……でもこの会社はいい方だよ。ピンク映画は半年前のギャラを半分出してくれないんだよ。ああ、どこもきびしいなあ。……本日の撮影カット数は百カット近いらしい。テレビ映画をやると長生きしないと、テレビ映画は新聞の写真や週刊誌のようなものだとかいながら、一時間番組を一週間で撮り終えるのである」

現場での会話をつつつ書いているが、映画撮影の仕事を知らない人には、ここに書かれていることのすさまじさが分りにくいかも知れない。しかし、かつては良い映画をつくるために一日に数カットの苦心をし、一時間半の映画を、二カ月以上、ものによっては半年以上もかって撮影したことを考えると、一日で百カット近く、一時間ものを一週間で撮影するということのすさまじさが想像してもらえらるだろう。

私たちはこうしてつくられたテレビ映画を見ているのだが、この職場でも、映産労の仲間たちが、一日に一人の組合員をふやそう。労働者の権利と生活を守ろう。映画や放送の軍国主義化に反対しよう。共闘を強めて、各産業の個人加盟労組の仲間と経験交流をしよう、きょう

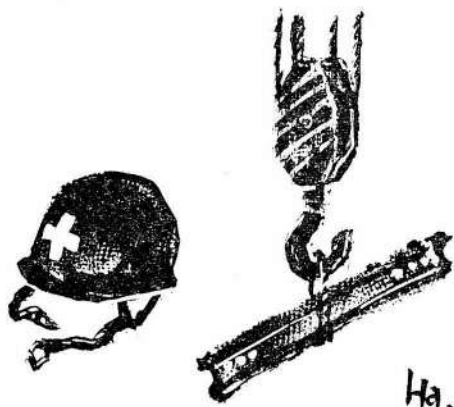
も、あすも活発に活動していることを考えるのは、心強いことだ。

ほかの産業でもおなじだが、映画・テレビの職場では、大企業の本社員のなん倍もの人が、たくさん職種に分れて短期間の契約、臨時で働いている。資本家から見れば、低賃金と無権利をごまかしたり、契約中止のおどしでこき使うのに、こんなにつごうのよいことはない。働く人の側から見れば、ごまかされても分らないし、力をあわせてたたかうこともできない。どうしても日本映画テレビ産業労働組合を大きくしていく必要がある。

また映画やテレビは、その内容で、日本の運命に大きな影響力をもっている。この産業で働く人の責任は大きい。しかし、そのために良い内容の仕事をするのが第一という考えも生まれ、それはそれで良いのだが、組合運動に消極的になると良くない。わたしは日本映画産業労働組合が大きくなって、民放労連や映演総連などと協力して、映画やテレビを軍国主義の宣伝の道具にしないような、大きな力に発展するように期待してやまない。



全國建設及建設資材勞動組合



九、一日の純利益千四百万円のかげに

無権利で働く

野丁場の建設労働者

日本の労働者二千八百万人の一割に近い、およそ二百五十万人の建設労働者が働いている職場を、「野丁場」と呼ぶのを、わたしはごく最近まで知らなかった。労働者の仕事と生活に、深い関心を持って来たつもりだったわたしは、二百五十万人もの労働者が働いている職場の呼び名を知らないできたことが、恥ずかしかった。

個人の住宅、アパート、商店などの小規模な建築、主に木造建築の工事をしている職場を「町場」と呼ぶのにたいして、一つの現場に何百人、何千人という労働者が集まって、大きな機械を動かしているビル建築、ダム、地下鉄、鉄道、高速道路、工場、住宅団地、港湾などの工事現場を総称して「野丁場」と労働者は呼んでいるのであった。ひと口に建設といっても、「町場」と「野丁場」とでは大きな差があるのであった。

わたしに「野丁場」という言葉を始めて教えてくれて、「町場」と「野丁場」のちがいを話してくれたのは、昨年の秋、『労働・農民運動』という雑誌に、ハベトナム侵略反対一〇・二二

一統一ストライキVのルポルターージュを書くために、あちこちと取材している時に会った鈴木敏之君と、その時、初対面だった左官のS君だった。鈴木君は、高層ビルの工事現場で火花を散らして働いている溶接労働者だということは、鈴木君が日ソ学院でロシア語の勉強をしていた数年前に会って知っていた。機会があれば詳しく取材してみたいと考えていた労働者の一人なのだったが、こんど名刺をもらってみると、全国建設及建設資材労働組合副委員長、同東京支部長として活躍していることがわかって、わたしを驚かせた。

略称「全国建設」と呼ばれているその労働組合は、野丁場で働く労働者およそ二百五十万人が一人で行ける全国単一の産業別組合として、五年前から準備され、二年前の大会で全国指導部と全国機関紙「全国建設」をもった労働組合なのであった。

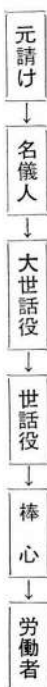
鈴木君に紹介してもらったS君の仕事が、左官と聞いた時、わたしは最初、こどものころ隣りに住んでいた左官屋さんをすぐに思いだした。しかし、S君の仕事は、大きなビルの内壁や外装をする左官であった。平安朝のころ、皇居の壁を修理するのに、身分のない労働者を皇居へ出入りさせるために、仮りに木工寮の属（さかん）にしたので、左官という職名が生まれた。と何かの本で読んだことがある。その古い歴史のある左官と、近代的なビルの内壁や外装をする労働者の職名が同じとは、どうもぴんとこなかったが、それよりも分りにくかったのは、野

丁場の雇用関係であった。

「町場」と「野丁場」のちがいは、建築規模の大小だけではない。「町場」の仕事では発注者は主に個人である。個人の発注者が大工の棟りょうや親方と契約し、大工、左官、とび職、屋根職、畳職などは、大工の親方に仕事をもらって、賃金や材料費をもらう。「野丁場」の工事の発注者は、資本家や国家、地方自治体、公共団体などで、元請けの建設業者と契約する。その元請けと実際に働いている労働者の間には、三段階ないし四段階の下請けがある。労働者が賃金をもらうのは、最末端の下請けの親方からなのである。

途中、何段階にもピンはねされたあげく、労働者と親方のあいだは口約束だけである。野丁場の労働者の大多数は、元請けが仮設材料の残りでつくった飯場に居住しているのだが、労働者が低賃金や労働強化で逃げ出さないように、賃金の支払いを工事の終わるまでは全額支払わなかったり、最初の口約束とちがったり、ひどいときは賃金不払いということも珍しくない。そんなときでも元請けの建設業者は、全然関係がないと涼しい顔でいるしくみになっているのである。

その下請けの機構を単純化して図で示すとつぎのようになる。



棒心は小頭とも呼ばれ、作業の中心になるだけだが、世話役は個々の職種別工事の責任をとるとともに、工事の進行にもなって労働者を集めてくる責任をもつ。世話役が他の世話役の下に入って再下請けをすることもある。大世話役は数現場を総括して、各現場に下級の世話役を配属する力もっている。名義人はその建築工事全体の形式上の責任者で、直接働いている労働者との関係はなくなってしまう。末端の世話役は職種別になるので、この下請け機構は、分散的になって、さらに複雑になっている。

また野丁場で働く労働者の職種は、ちょっと聞いたぐらいでは覚え切れないほどある。大工でも、造作大工とコンクリートの型わく専門の型わく大工に分れているほか、土工、重作業人夫、軽作業人夫、とび工、石工、左官、電気工、配管工、塗装工、トラック運転手、板金工、溶接工、機械運転工、鉄筋工、鉄骨工、坑夫、タイヤ張工、れんが積工、はつり工、建具工、屋根ふき工、潜かん工、ボーリング工などがあり、新建築材料の進出でさらにテックス工、ボード工、機械化で各機械の運転工がつつぎに生まれている。

このたくさんさんの職種ごとと言っても良いほどに、何々組という親方がいる。大きな工事現場になると、一つの職種に何人もの親方の組が入っている。例えば同じ左官が、同じ工事場でいっしょに働いていても、壁の区切りごとに親方の組がちがっていて競争をさせられる。そして仕事の進みぐわいで、別の工事場へどんどん移っていく。仕事の量や急ぎかたのちがいで移

っていく。きよう、顔を合せて同じ仕事をしていても、翌日になると、互いにどこにいったのか分からなくなってしまうのである。

このように、一つの職場で、同じ顔ぶれの労働者が働いているのではないから、野丁場で働いている労働者ほど労働組合に組織するのが困難な労働者はないだろう。一企業一組合の企業別労働組合ではまったく不可能だ。日本の労働者の約一割、二百五十万人の労働者が働いているのに、いままで労働組合の組織化がすこしも進まなかった原因はここにある。

建設産業の独占資本家たちは、危険な肉體労働をしている野丁場の労働者が、労働組合をつくれないようにして、労働基準法も何も眼中にない、昼夜ぶつ通しの無茶くちな究貫工事を押しついたり、冬は寒風が吹きこむ部屋で、夏はハエやカの大軍におそわれる飯場の、垢でピカピカ光るセンベイぶとんに労働者を押しこんでこき使っている。社会保険もないところが多く、退職金や賞与のないのはあたり前になっている。また労働災害や死亡事故も全産業の中でずば抜けて多いのだ。労働省の調査にあらわれた数字を見ても、一九六六年一月九月の九カ月間で、死傷件数八万一千七百九件。死亡件数千七百七件となっている。これは全産業の三割以上で、毎日六・三人の労働者が殺れているのだ。労働者数が全産業の一割弱で、死亡事故は三割以上ということは、建設産業における安全対策がどんなにひどいかということを示している。しかもこれは公表された数字で、ヤミにかくされた死亡事故も多いことは、野丁場で何年

も働いている労働者はみんな経験で知っていることなのだ。

わたしがいまこの原稿を書いている数日前にも、わたしの住んでいる団地の近くで、工事中の中央高速道路の高さ二十メートルほどの姥久保陸橋橋の上で夜間作業中の労働者が、落ちて即死してしまった。

建設産業の独占資本家たちは、このようにして野丁場の労働者を、下請けの下請け、また孫請けの親方を通じて酷使し、文字通り、労働者の血と汗をすすめるようにして、膨大な利潤をあげているのである。大手五社と呼ばれている鹿島建設、大成建設、清水建設、竹中工務店、大林組の建設会社は、三年も前にすでに「建設会社の受注高世界ランキング」で世界第一位から第五位までを独占する規模になっている。

受注高で世界第一位となった鹿島建設の会長鹿島守之助は、個人所得でも全国三位で、一人で一年間に公表しただけでも四億三千万円の高額所得者である。また鹿島建設の六五年十二月から六六年五月までの純利益は、公表した分だけで二十一億三千八百九十一万円である。一月にするると三億五千六百四十八万円。一日にするると千四百万円。一時間では五十八万四千五百八十四円。一分間ごとに九千七百三十三円づつ純利益をあげていることになる。鹿島建設は公表した純利益だけで、時計の秒針がコチツと一秒動くことに百六十二円づつ、一日二十四時間、一年三百六十五日間、一瞬の休みもなく労働者の血と汗をしぼり続けて、鹿島守之助会長一人



だけでも年収四億三千万円（公表分）という億万長者にしているのである。

このかげには、鹿島建設のダム工事現場で、昨年二月、十一名の労働者が安全管理の手ぬき、が原因の犠牲で、山くずれに生きうめになって死亡する事故も起きている。その現場では、雑役のおぼさんの日給が八百円から七百円に下げられたり、交代で働く労働者は一つのフトンを、三人で使わされて順番にしか寝られない扱いを受けている。また時間外はどんなに働かされても、時間外手当ては四十五時間で打ち切りという「合理化」が、労働者に押しつけられている。

前記の大手五社のほか、間組、熊谷組、戸田組、西松建設、藤田組、銭高組、三井建設、佐藤工業、前田建設工業、鴻池組、奥村組などの建設会社も、野丁場の労働者の血と汗をしぼり取る競争では、鹿島建設と負けず劣らずである。その競争はますます激しくなっているのである。

いま、東京の霞カ関に、一九六八年春完成の予定で、地上三十六階、高さ百五十メートルになる「霞カ関超高層ビル」が建設中だ。総工費百五十億円。使用する鉄材はざっと一万五千トン。この工事も鹿島建設が元請けである。現在、鉄骨は三十階近くまでできて、労働者たちは東京タワーの展望台ぐらいの高さのところ、肌をさす寒国の中で巾二〇センチぐらいの足場を自在に動き回って働いている。日本の超高層ビルのトップを切った。「この霞カ関超高層ビ

ル」も、三井独占資本（三井不動産）が百五十億円の一万円札を山と積んでも、鹿島建設が「高性能タワー・クレーン」を誇っても、ここで働く建設労働者がいなければ、ただの一階もできないのだ。

この誇りをもつ労働者は、いつまでも、無権利な状態にがまんしていることはない。ドレイ労働をさせられていた、昔の監獄部屋の労働者とはちがうのである。近代的建設産業で働く労働者として自覚した仲間は、安保闘争や三池闘争などの労働者のたたかいが高まった後、一九六二年三月、建設一般労働組合を結成した。その後、三年間、産業別個人加盟労組の基礎づくりをする活動を積み重ねたあと、一九六五年二月、一人ではいれる全国単一の産業別労働組合として、名称を全国建設及建設資材労働組合にあらためた。そして全国指導部と組織の武器である機関紙「全国建設」をもったのである。こうして野丁場で働く労働者と、建設資材企業で働く労働者が一人ではいれる単一労組は確立した。

現在では、各都道府県ごとに支部をもち、地域と経営に分会を組織して、主に建設資材関係の職場では、各地で公然化した分会も誕生している。この労組の発展を助けたのは、全建設省労組、全港建労組、全日自由労組などである。建設産業の一人でも入れる単一労組は確立したが、何段階にも下請けがあり、移動の激しい野丁場の労働者を組織することは、やつと道がつただけで、まだまだ容易なことではない。都内のある野丁場の分会は組合員が約十名ほどな

のに、現場は七、八カ所に分れていて、お互いに連絡しあうのも大変なことだという。数百人も労働者が働いている現場に三人の組合員がまとまることはめったにない。一人か二人で、荒野にまかれた一粒の麦のように活動している。

同労組の小松書記長はこう言っていた。

「各地で、私たちの組合に協力して下さる人がいて、ほんとにうれしいのですが、町場と野丁場が混同されているのです。野丁場の実態が知られていないのですね。野丁場で働く労働者の要求や感情が、もっと理解してもらえると、ずっと活動しやすくなると思うのです。それには私たちが努力するのが第一なんです……」

それで左官の君から聞いた、S君が全国建設の組合活動をするようになるまでの経過を紹介しよう。

S君は、中学を卒業した直後から、もう十二年も左官の仕事をしている腕の良い熟練工で、日給で二千円。月収五万円ぐらい。どちらかという口重い、手首と指のふとい、飾り気のないぼくとつな青年だった。

S君の生まれたのは岩手県の漁村。両親は始め船乗りになれと言っていたが、からだが弱く

てだめだった。それなら、職人になれば一生食いはぐれがないと、町場の左官屋の弟子になった。親方はS君をつれて北海道へ出かせぎに行つた。最初の一年目は暮れと盆に五百円づつくれただけだった。床屋や風呂屋へつれて行ってくれ、靴下などは親方のお古をくれた。映画も一年に一度つれて行ってもらつた。五百円はハミガキや手ぬぐいなど日用品を買つたらなくなつてしまつた。親方の家と仕事場を往復するだけだった。二年目は月に五百円、三年目は月に八百円、四年目は月に千五百円くれた。四年目ぐらいの時は金も使うようになって、一年目よりも小使いに困つた。四年間の約束がすんだ時、着物をつくる反物を二反くれた。金は一円もくれなかつた。S君は家を出る時に、父が借金して五千円持たしてくれたのを最後まで使わずに年季がすんで家に帰る時、交通費とみやげ物に三千円使つて、二千円は父に返した。

戦前の話のようだが、これは戦後も十年近くたつてからのことなのである。職人になつたS君は、また北海道へ働きに行つた。こんどは二十歳で月二万一千円になつた。しかし町場の小さな仕事ばかりで、嫌になつたS君は一年ほどで東京に出てきた。野丁場のビル建築などの大きな仕事が出来たのだ。神田の職安で仕事をさがし、親方の家で寝とまりしながら、千代田区役所ビルの仕事をした。月給をもらつてから、三日間ばかり休むと、親方に「やめろ」とどなりつけられた。S君は頭にきてとびだしてしまつた。

S君は腹を決めて、東京中の野丁場を歩いてみた。条件はわるくても、良い仕事をおぼえた

いという考えだった。竹中組の野丁場で監督にそのことを話すと、左官ならM左官が一番だ。良い仕事をおぼえたいという根性は気に入った、とM左官に紹介状を書いてくれた。M左官でS君は積極的に仕事をするので親方に気に入られた。このころになると、S君はなんのたのしみもないので、毎晩飲んでは、ろくに寝ないで仕事をした。それでS君はからだをこわしてしまった。

スポーツ新聞に、「健康診断をやります」と広告が出ていた診療所に行つて、診断してもらつと、胆のうが悪いから早く手術したほうが良いと言われた。胆のうの手術はむずかしいということも言われた。S君は日やるとい健保をかけていたので、手術するなら、大きな病院で歩き回つた。ところがどこの病院でも、別に金を出さなければダメですとか、ベットがあいてないとか言われた。S君は、日やるとい健保で無料で入院できると聞いていたのだが、大きな病院では別に金を出さないと入院できないことを知つて、ショックだった。困り切つたS君は、最後の病院の下足番のおじさんに、日やるとい健保だけで入院できて信用できる病院はないだろうかと、聞いてみた。すると下足番のおじさんは、千駄ヶ谷駅の近くにある代々木病院が良いと教えてくれた。

代々木病院に行つてみると、受付けの人も看護婦も、診断してくれた医者も、野丁場の労働

者であるS君を低く見るような風はすこしもなく、みんな感じが良かった。その上に「すぐにも入院できますよ」と言われた。

S君は、よろこんで入院した。ところがあくる日、気がついてみると、病室に七人の患者がいるうち、五人までが『赤旗』新聞を読んでいた。「共産党は国賊なのだ」「共産党は人殺しより悪いのだ」と、小さいときから信じこまされてきたS君は、とんでもないところへ入院したとびっくりしてしまった。

手術するまで二週間、千駄谷駅へスポーツ新聞を買いに行つて、すみからすみまで読んでいた。そのうちに外出を禁止されてしまった。S君は、病気をなおしに来て、殺されたら大変だと、心配でたまらなくなった。手術しなくても良いから退院したいと看護婦にいうと、「とんでもない」と言われた。S君は逃げだすことも真剣に考えた。寝衣の下にズボンをはいていたこともあった。そのうちに退屈でたまらなくなって、こわごわ、『赤旗・日曜版』を手に取つて見た。案外、良いことが書いてあった。

S君はこの病院が信用できるのかどうか疑つた。となりの人にそれとなく聞くと、「労働者が、いちばん信用できる病院だよ」と言った。S君は口には出さなかったが、「殺されても、もともとだ」と覚悟を決めて手術を受けた。

手術の結果は順調だった。手術後、退屈して『赤旗』を読んでみると、疑問が百出した。い

ままで聞いてきたことと何もかもが逆だった。共産党とはなんでも反対ばかりするものと思っていたのに、労働者の要求を熱心に支持したり、平和を守ること、憲法を守ること、働く人間を大切にすることを訴えていた。S君が疑問を出すと、同室の患者はみんな、かんでふくめるように説明してくれた。労働者や農民は、どうして働いても働いても貧乏なのか。どうして鹿島守之助は一人で四億三千万円もの年収があるのか。戦争で殺されるのはだれで、戦争で大もうけするのはだれなのか。働くいっぽうの労働者や農民を苦しめている、ほんとの敵はだれなのか。——手術後の三十日間は、毎日毎晩、消灯後まで話しあった。聞く話は、みんな始めて聞くことばかりだったが、S君の経験してきたこととびったりと合っていた。S君は、悪い胆のうを手術しただけでなく、労働者の学校に入ったようだった。

代々木病院で働いている人も、みんな親切で、献身的だった。若い看護婦さんは、分りやすい本を貸してくれた。その本にも、感心することが書いてあった。手術前は、この病院から逃げだすことまで考えていたのだが、退院するころのS君は、共産党はりっぱすぎると考えるほどになっていた。S君は、そんなりっぱな共産党の党员になる資格はないと、自分で思いこんで、民主青年同盟に入る決心をした。S君は、「おれは建設の現場で仲間をつくるよ」と誓って退院した。

しかし、野丁場で働く労働者の労働組合はできていなかった。それで町場の建設労働者の全

建総連に加盟している組合で、しばらく活動してみたが、町場と野丁場とは要求がちがうのでしっくりしなかった。が、その活動の中で、同じ野丁場で働く仲間と知り合った。そして野丁場で働く労働者の労働組合をつくらうと、「全国建設」労組の結成に参加した。S君は、代々木病院の看護婦さんたちの団結心や、がんばりぶりを思いだしては、建設労働者が負けてたまるかと思って活動したが、最初のころは、やっと話し合える仲間をつくっても、じきに移っていなくなってしまうので、手がつかない感じだった。それでも自分たちの労働組合ができた。組合の会議に行けば仲間たちがいる。もう一人ぼっちではない。と考えるのはうれしかった。そして一人でもはいれる単一労組の非公然活動のやり方が、失敗と成功の経験をつみ重ねて、やっとのみこめてきたのは、まだこの一、二年だという。

S君は口べたで、考えていることの半分も言えないでいた。それを同席した鈴木君が、いく度も補足してくれたのだった。

「野丁場の飯場へ行くと、真冬でもストーブがない。テレビもない。ふとんにみんなで足を突っこんでコタツ？にしている。世話役が労働力を集めるのにいっしょうけんめいなので、六十歳くらいのおじさんが頭数に入れられて、もちろん、仕事などできないのでぶらぶらしている。手錠をはずして逃げて来たような人も働いている。しかし世間の人が想像するような、バクチや競輪、競馬に夢中のものや、酒をバカ飲みするものはいないのです。野丁場で働きざか



りという三十までですが、腕の良い若い職人は、月に十万円、なかには二十万円もかせいだものもいる。部屋代が一万円以上のアパートを借りて、ステレオまでそろえている仲間もある。職業を聞かれると、何々建設会社で働いていると答えているんです。おれは左官だ。おれはとびだ。おれは溶接工で野丁場で働いていると、胸を張って言えないんですね。なんとなくひけめを感じてかくしているんです。話しあってみると、みんな家が貧しくて、てっとり早く金をとるために野丁場で働いているんです。しかし、野丁場では二十五、六歳が最高で、三十をすぎると下り坂でだんだんに働けなくなるのです。三十ごろから働き盛りになり、結婚してこどもも育てていく、ほかの産業とは反対です。若さにまかせて徹夜、残業、また徹夜とぶっ通しに働いて、月に十万円以上かせぐことがあっても、からだをこわしておしまになるのです。退職金はないし、このままでは野丁場の労働者は、将来の希望というものを持ってない」

またS君は、最後にこう言っていた。

「野丁場で働いている労働者は、小さい時から、肉体労働一方で来ているから、読み書きの力が中学時代よりも落ちる一方です。字が思うように書けない、本が読めないという仲間が少くないのです。それも、人前で話すのがおっくうになっている原因です」

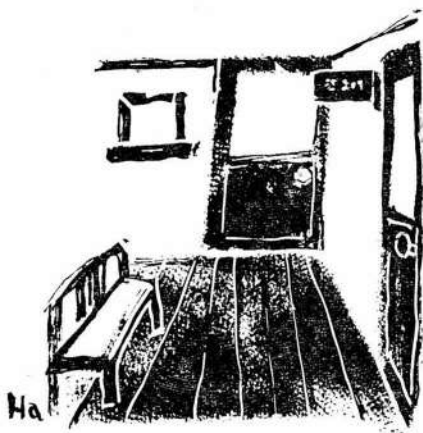
わたしはS君の話聞いていて、船員労働者に似ているところがあるなと思った。海上や、

高層ビルの細い足場の上で、いつも命がけで肉体労働をしている労働者は、あらっばい人間のように思われがちだが、実際は純粹でどちらかというといふ内気な人が多いのだ。その心の中にとびこんで、三重、四重もの悪条件を克服して、一人でもはいれる単一労組に組織していくことは、実に大変なことだ。しかし企業別労働組合のやり方では不可能だった。野丁場の労働者の組織化が、一人でもはいれる単一労組全国建設労組の結成によって始めて可能になったのである。

機関紙『全国建設』を読みると、S君たちの仲間が全国で、勇敢にねばり強くてたかかって、野丁場の労働者を組織し、建設資材の労働者を組織して、要求をかちとり、不当解雇をてっ回させている成果や勝利が毎号のようにのっている。S君のように貴重な火種の労働者は、東京、京都、兵庫、福岡、静岡、名古屋、北海道と全国各地にいる。そしてたかいたかいたの経験をつんだ火種はもう消えることはない。やがて一つの巨大な炎となって燃え上がることを、だれが疑えるだろうか。

「千里の道も一歩から」という言葉があるが、止まっているのと前進を開始したことのちがいは、最後には千里の差になるのだ。

東京医療単一労働組合・A病院分会



十、いつも

同じ顔ぶれの

金太郎アメから

非公然組合員を

七倍化したカギは

# 1. 一人でもたたかう副看護婦さん

日本の憲法は、わたしたちが健康で文化的な生活をする権利があることを明記して、政府は国民の健康と生活を守るために努力する義務のあることを、つぎのように厳粛、明確に宣言している。

日本国憲法第二十五条　すべての国民は、健康で文化的な最低限度の生活をいとなむ権利を有する。

国は、すべての生活部面について、社会福祉、社会保障、および公衆衛生の向上および増進に努めなければならない。

ところが、歴代の自民党政府の悪政のもとで、わたしたち働く人間の健康が破壊され、まともな医療がうけられない状態は、ますますひどくなっている。一九六六年には、交通事故で一万三千人が殺され、労働災害は七十万人をこえ、七千人もの労働者がかけがえのない生命を奪

われた。国民のうち五人に一人はなんらかの栄養欠乏症にかかっている。大気汚染、河川汚濁、地盤沈下などの公害もますますひろがっている。

労働災害や職業病もふえるばかりである。ガス中毒、腰痛症、難聴症、白ろう病、むちうち病、けんしょう炎などが多くなり、神経痛、ノローゼ、胃病などが、どこの職場でもひろがって、労働者の健康をそこない、家族の生活の不安をつのらせている。農村でも、農薬中毒などの新しい病気がふえている。

こうして病人の数はふえている。この十年間に、病院や診療所にかかった患者の数は二倍以上になっっている。八年前とくらべると、精神病は約二倍、高血圧は約三倍、ガンは一・六倍と異常に増加している。とくに脳出血、ガン、心臓病など、働きざかりの人の成人病が、全死亡者の半数になっていることは、背筋が寒くなってくるような現実である。ところがこの数字は、病院や診療所にかかった患者の数で、この数年、医療費が高くなったために、売薬ですませている人は、この何倍もいるのである。

また医者や看護婦は人手不足で、ゆきとどいた医療がなかなかできないという一面もある。それは患者数が二倍以上に増加したのに、医師の数は一・二倍、看護婦は一・八倍にしかなくなっていないのだ。そして実態はこの数字面よりもひどい。なぜなら、医療が金もうけの手段になっているので、金持ち用のベッド、施設、医師、看護体制が充実される反面で、健康保険だけの

患者などには、医師や看護婦の人手がへらされているのだ。もうからないという理由で、荒川区でただ一つだった結核病院の柴田病院が閉鎖され、さらに杉並区の太田病院が同じ理由で閉鎖されようとしている。両病院とも、患者の行き先を保障しないのだから、まったくひどいものだ。

また看護婦が一・八倍になったといっても、その中には、従来の正、準の看護婦のほかに、副看護婦が新しく入っている。正看護婦、準看護婦のほかに、副看護婦とはまぎらわしいが、副看護婦が準看護婦とちがうのは、国家試験がないくらいで大差はない。ではどうして、そんなまぎらわしいのをつくったかという、同じ仕事をして、副看護婦をより低い賃金で使うためである。また有資格の頭数だけそろえて、働く人を差別し、対立させて使おうというねらいもあるのだ。

こうして、わたしたち働くものの健康が破壊され、病気がふえているときに、医療は、逆に、いよいよ金もうけ第一主義を露骨にしているのである。こういう状況の中にある医療の職場では、経営者の金もうけ第一主義から低賃金で、生命をまもるための労働はきつく、日赤、大学病院、国公立病院などをのぞくと、ほとんどが労働組合に組織されていない。いま、そのような職場の中で、個人加盟の東京単一労働組合に参加して、生命と生活を守る活動をはじめている人たちが、しだいにふえてきている。

医療単一の仲間たちは、どんなふうにくらし、働くなかで、活動しているのだろうか。

医療の職場で働いたことがある作家の工藤静子さんが、医療文芸という雑誌に、医療単一の仲間の活動を生き生きと描いたルポルタージュ『手をつなぐ仲間たち』を発表しているので、その三分の一ほどを引用させていただこう。

## 副看護婦制度

工藤静子

「十四日の大島旅行、あんたいける」

「出発、何時？」

「七時よ」

「駄目、九時まで当直なもの」

「そう、いつも、どこへもいけないわね」

東京医療単一労組S分会長の藤田さんは、分会員の南さんの返事に、残念そうなため息をついた。冷房のきいた喫茶店からでてきたばかり、四谷三丁目の交差点である。ひっきりなしの



車の流れも、舗道にべったりやきつきそうな暑さだ。南さんは、すぐ帰って、三時から勤務につかなければならない。

「九時まで当直……」、なにげなくきけば、どうということはない。が……

南恵子。財団法人K診療所にとめる副看護婦二年生、二十歳、給料一万四千元。

彼女の勤務表は、

午前七時～十一時 勤務

午後二～時四時 副看護婦学院

午後五時～九時 勤務

午後九～時翌朝 住込み当直（毎日）

休日は月に一、二度。こんな勤務では、大島旅行どころか、分会会議出席さえ、むずかしい。

分会長の藤田さんは、南さんと同じ病院ではなく、仕事は検査技師。病弱な一看護婦に対する不当首切りに反対して、自分にも解雇通告をだされ、たった一人坐りこみ、院長の横暴さに抗議、首切りを撤回させた。医療単一の組合のなかでも、きびしい闘いの経験をもっている人だ。今日、南さんを紹介して話しくわわってくれたが、外見は、中背のやせがた、短い髪、袖のないブラウスにストラックス、いまから海にでも、といった軽快な恰好だった。でも、手帳

をとりだしたとき、竹編みのはちきれそうなバックから、日用小物のほかに、いっぱい詰め込まれた本やノートがあふれそうになった。

今年の三月、南さんは、副看護学院の友人に交流会に誘われた。それが、ダンスの好きな藤田さんが始めたダンスサークル。やがて南さんは、一人でも入れる単一労労組の組合員になった。

「副看護学院を卒業したら？」

「東京都内の医師会にだけ通用する卒業免状をくれます。週三日の二年制」

「東京都内の医師会だけ、それ、最初から知っていたの？」

「なんにも。ただ事務長にいつて言われて、いったんです。准看護婦になれるかとおもって、はじめよろこんじゃつたら……」

そばから、藤田さんが自分のことのように、口惜しそうに言いそえた。

「分会で、南さんのことを討議して、准看護学院に入学しなおしたらって、さがしたけれど、ちょうど三月でしょう。どこも試験が終っちゃってて、間にあわなかったんですよ」

小柄で、色が白く、気持よく肥っている南さんは。ぷっくり手を、無意識に、胸のへんで、こぶしにかためていた。

「いま二年でしょ。わりあてられた個人病院を地図でさがして『実習』にっています。交

通費は自弁。でも実習は名だけみたい。病室掃除とか、洗濯とか、ほとんど雑用」

「××医師会附属副看護学院学則」には、

第○条 本学院は病院、診療所勤務見習看護婦及び新たに見習看護婦を志望する者に対して、一般医学看護学を中心とし、その他一般教養を教え、医師のよき協力者を養成するを目的とする。

第○条 本学院の卒業者は東京医師会の定める副看護婦の資格試験を受けることができる。と記されている。つまり「副看護婦の資格試験」をうけて、東京都医師会に所属する医師の良き協力者になるだけである。日本全国どこでも通用し、一人の女性が医療看護技術を身につけて独立する資格は与えない。この、ひどい制度を考えついた医師たちは、自分の娘をこういう学校に入れないことだけは、確かだ。しかし、問題にしなければならぬのは、政府の貧しい医療政策の結果生じた全国的看護婦不足を、こういう手段で解決しようとする医師会と、それに賛成した医療行政者の責任である、と思う。

南さんの診療所は救急指定病院。外科、内科の医師各一名（夜間アルバイト医師一名）、事務長をふくむ事務三名、看護婦三名（婦長と南さんをふくめて）炊事婦一名、ベット数十四。町工場の検診等、多忙である。

173  
わたしがたずねたとき、南さんは午後五時までの休み時間で、自室にいた。玄関にでてきた

彼女の案内で二階への階段をあがったら、ドアをあけ放った真向い病室から入院患者が笑いかけた。彼女の部屋は、廊下をはさんで東側の真ん中。入ろうとしてちらつと見えた右どなりの病室には、顔色の悪い患者が二人、横たわっていた。室内は三畳間、机のうえには看護学、文学、青年の修養などの本が整頓され、花模様のカーテンを、風があふっていた。

わたしは、この部屋の位置に仰天した。ここは病棟看護婦控室になら、ふさわしいのに私室、兼控室、兼夜間住込み当直部屋。この診療所は、まことに便利な人を見つけ、好都合な部屋をあたえたものである。長細い三畳間は、たしかに、南さんの二十四時間拘束勤務を保障する部屋であった。だが、入院患者にとって、彼女がなくてはならない人であることも、一見してわかった。南さんの当直は看護婦、交換手以外、婦人の深夜勤務をみとめない労働基準法、医療法違反である。経営者は、彼女を看護婦代理に使いながら、他方では、炊事婦の日曜休暇にかわるアルバイトがこないとき、入院患者の炊事まで担当させている。南さんは言った。

「患者はもちろんだけど、わたしも食べなきゃならないから、炊事します。——単一労組に入って、いろんなことがわかったけれど、どこから手をつけたらいいか……」

話をききながら、つい興奮しがちになるわたしを、冷静にしてくれたのは、彼女の、その一言だった。すこし途方にくれたような、低い声で言って、南さんは、一瞬とおい目付をした。経営者の違反と人間無視が極端にひどいから、あれも、これも当然改善すべきだという気持ちに

かりたてられるが、そんな現状だからこそ、打開がどんなに困難なものか……。

「副看学院の友だちは、バカらしいって、前橋の工場に移っちゃったの。寮もあるし、勤務時間だってきちんとしてるから、こないか、なんていつてくるけど……それは……」

南さんは九人きょうだいのまんなか、下に中学と小学の弟妹がいる。ここをやめて、北海道のエリモ岬に近い漁村の村に帰ろうとも、もちろん考えていない。

「来年、准看学院受けようとおもっています。副看学院二年がムダになって残念だけど。これ、友だちがくれました。すぐ眠くなっちゃって、大変……」

彼女は、中学の教科書を見せて笑った。

十五人、入学した副看学院の友だちは、いま十一人。ほとんど個人医院に住込みで働いている。学校の帰りに語りあう時間をとるのさえ、なかなかむずかしい。でも、医療単一労組の仲間となったことで、南さんは、ムダになった二年間を取りもどす活動を、いま始めている。

不幸があつて看護婦の一人が休んだとき、彼女は代りに日曜日の当直など引受けた。が、給料日にその手当ては加算されていなかった。なぜなのか、事務長に質問した。

「君が見習いだからだよ」

「見習いだって、身代り勤務しました」

「学校にやっつてるじゃないか」

「学校にいつても、八時間以上労働しています」

「八時間、八時間というのは、アカだよ」

「就職したときと約束もちがいます。炊事までやってるのに給料だって安すぎます。ここは先生たちの給料だってやすいんです」

しばらくして事務長は、「ちよっとこいよ」と、彼女を連れだした。スシ屋だった。

「……口惜しかったけど、ズラリ並べられたら、すぐおいしそうで食べちゃった」

話しながら、思っただして南さんは笑いだし、藤田さんもわたしも、吹きだしてしまった。

おすしは食べたけれど、意見はひっこめなかった。「チビ、なかなかやるじゃないか」と医師の一人が言った。彼女はここでは一番若い。「先生も言ってください」と、彼女はたのんだ。

事務長は、「いままで二百人も人を使ったが、お前みたいに使いにくいのは始めてだ」と、腹を立てた。

こうして、炊事のおばさんにライポン、お掃除、洗濯用具の買いかえ、受付係の三十分以上の超過勤務に手当て、六月のボーナス一カ月分を、それぞれかちとった。いま、看護婦一名をふやすことを要求する一方、S分会は、南さんの勤務時間を詳細に調査して、今後の方針を相談することになっている。

「分会長の責任重大なんだけど、とても、とても。三分おきに自信をなくして動揺していた

のが、このごろは三十分おきになったなんて、笑われています。勉強しなければ……」  
と分会長の藤田さんは真剣な目をした。

—以下略—

長い引用になったけれど、同性の工藤さんの目で見た南さんの個室兼直室のようすや、圧倒的に多い、個人経営の診療所や小さな病院で働く人たちの労働条件、そこで地中深く根を伸ばし始めている単一労組の活動があざやかに描かれているので引用させていただいた。この南さんの働いている診療所には大金持ちは入院しないだろう。おそらく患者のほとんどは、労働者やその家族だろう。このような診療所に入院する患者は、南さんたちの懸命の努力があっても、ゆきとどいた治療と看護は望めない。

また個人医院に住込みの見習い看護婦は、お手伝いさんも兼ねて働かされている。このため一日二十四時間のうち、自分の自由になる時間はほとんどない。そして賃金はべらぼうに安く副看学院に行かせてくれる経営者がいても、積極的に准看学院に通学させて全国に通用する国家試験を受けさせてくれる経営者は、自民党支持ではなく、よほど進歩的な経営者、医師でなければいまいだろう。なぜならば、いつまでも副看護婦に止めて置いた方が、低い賃金で使えるからである。しかし、だからといって、主人、奥さん、主人の家族にかこまれて、一人か二

人での見習い看護婦が一人ではどうすることもできないし、一人ひとり、バラバラでいては、たとえ百年待っても、良くはならない。医師が医師会をつくっているように、医療で働くものは団結しなければならぬ。一人ひとりに手をさしのべ、一人ひとりを元気づけ、働く人すべてに人間なみの希望と生活を、最初に紹介した憲法第二十五条の「すべての国民は、健康的な最低限度の生活をいとむ権利を有する」を、医療労働者だけでなく、患者にも実現されるように活動しているのが、東京医療単一労働組合である。

人間の生命と健康を守るために働いている医療労働者は、自分たちの生活や健康も守らなければ、その尊い仕事を責任をもって果たせないのである。そのために、一人でも多くの仲間が参加するように、医療単一労働組合は呼びかけている。



## 2 ケチでも悩みでも自由に話そう

……………一年で七倍化したA病院分会の経験

一人ひとりが自覚して、単一労組に加盟しても、公然と活動できない条件で、はたして組合員を数十人にも拡大できるのだろうか。小人数なら、非公然も守れるけれど、組合員が二ケタになってくると、経営者やその手先きに察知されてしまうのではないか。そして分会が反撃力をもたないうちに、攻撃されてしまうのではないか？……それよりも、小人数でもじっと非公然を守っていたほうが良いという考えも生まれる。それでいて、ある日突然にはねあがった失敗をしてみよう。これが非公然分会の拡大がすすまない、一つの原因だろう。そしてどこを切っても同じ顔が出てくる金太郎アメのように、集まる顔ぶれがいつも同じで、いつのまにか、経営外の活動に熱心になって、大切な職場の中の活動を二の次にしてしまうのである。

しかし、千八百万人の未組織の労働者は、たとえどんなに困難なことでも、一人でもはいれる労働組合を、拡大強化していく以外に、自分たちの生活と権利を守っていく方法はないので

ある。そして非公然の組合員を飛躍的に拡大していくことも、不可能ではない。実際にも、數十人の非公然組合員を結集して、活発に活動している分会が、都内でもたくさん生まれてきている。医療単一労組のA病院分会もそのような分会の一つである。

A病院分会は、組合員が四人の状態が二年も続いたあと、あとの一年で三十人近くに、約七倍に飛躍的に非公然の組合員を拡大することに成功している。それは「みんなで話し合い、みんなの方針をきめて、みんなで活動して、みんなで成果をあげて、みんなで総括して次の方針をたてる」原則を忠実にまもって、みんなの創意と力を結集した結果なのであるが、そのすばらしい経験を、あまり具体的に書けないのは残念だが、紹介しよう。

A病院は中くらいの規模だが、有名な病院の一つだ。一日入院すると一万円以上かかるベツドもある。貧乏人に縁のない、金持ち向きの病院である。組合員四人（うち看護婦一人）で、単一労組のA分会が誕生したのは一九六三年秋だった。その前にも、一九六〇年の安保闘争のもりあがりの中で、企業内労組をつくろうとした準備会が、八人の有志によって結成され、ひところは活発に動いたことがある。八人は、病院の裏方である。洗濯場や事務室の従業員で、忘年会を従業員が中心になって民主的に、ここから笑えるようにやったり、コーラスをつくったりして活動したが、中心になっていた人が首切られ、企業内の従業員全体で労働組合をつ

くる希望はもてなくて、つぶされてしまった。当時は一人ひとりが加盟して、活動していく単一労組のやり方が知られていなかったもので、一人の活動家の首切りというムチと、一時的に職場要求をある程度認めるというアメの、「ムチとアメ」政策で、せっかくもり上がりかけていた民主的な空気はつぶされてしまったのだ。

その後、職制のしめつけがきびしくなり、職場の中は暗くなった。八人のうち、転職しないで残った四人が、東京医療単一労組を知って、個人加盟して分会をつくったのだが、暗い職場のふんいきを破ることはできず、二年間ぐらいは、いつも同じ四人の顔ぶれで、いくら切っても同じ顔が出てくる金太郎アメのようだった。それは、少数の活動家が一人よがりになんでも請け負って、職場の仲間たちの一人ひとりの考えていることや悩みに、深い注意を払わない、戦後の企業内労働組合のやり方の影響が残っていたためだった。形にとらわれないで、みんなが創意をだし、みんなで話し合って方針をだし、みんなで活動する単一労組の新しい活動のしかたが、なかなか身につかなかったためであった。耳で聞き、活字で読んで、理解することは簡単でも、それが身につつき、人柄のようになるまでには、長い月日がかかったのである。

A分会の人たちのえらかったことは、二年間も同じ顔ぶれの「金太郎アメ」でも、分会会議を定期にずっと続けてきたことだった。そして一人ひとりが勉強しながら、よその単一労組の

活動の経験をまなび、新しい活動のしかたを、しっかりと身につけたことだ。そしてその後の六カ月ぐらいの期間に、組合員を急速に、四・五倍に拡大し、現在では三十人近くになっている。どうして急にこんなに拡大できるようになったのだろうか。A分会の三年間の歴史の中で、最初の二年間は、一人も拡大できず、最近の一年間でいきよに七倍近くに拡大しているのである。

こんなに組合員が拡大できたわけを、経営者や資本家に知らせるわけにいかないので、具体的に書けないのがほんとに残念だが、わたしが分会のA分会会議に参加させてもらって感じたことは、若々しい明るさはもちろんのこと、参加者全員が、考え深い人、行動的な人、陽気な人、内気な人、組織力のある人まだない人、それぞれが各自の性格や現在の能力をむきだしにして、うまいことしゃべろうとか、こんなこと言ったら笑われるという考えはみじんもなく、自由にのびのびと発言していることだった。それは一般組合員の声は、ほとんど出ない御用組合の会議や、一、二の指導的な人が会議の九割近くもしゃべりまくって終わりになる、古い型の会議とはまったく対照的だった。

たとえば、わたしが聞いていた会議では、つぎのようなことが報告されていた。ある職場班

では、主任看護婦が労働強化と気質のせいもあって、仕事のことで必要なことのほかは口をきかない。すると働いているみんなも仕事に追われるままに、口をきかなくなってしまふ。そこでその職場班の組合員は、一日一回は、暗い気質の主任看護婦に、「おはようございます」とか、「きょうは、ちょっとあったかいですね」と、積極的に話しかける努力をしているといふ。

「でも、忘れたころになって、やっと返事されるとカッとしまうわ」

「その気持ち、わかるわ」

すると、考え深そうな組合員の一人が、質問する。

「ほかの人に、主任にゴマすってるみたいに思われたい？」

「誤解されるほど、話しかけられないわ。なにしろ、また、無視されちゃうのかと思うと、ひと言、声をかけるのも、勇気がいるくらいなのよ」

どうして、そんな努力をして、職制の末端である主任看護婦に話しかけているかという点、職場を明るくして、ふだんから、みんなで話しあえる空気をつくるためなのである。単一労組の組合活動は、職場のみんながふだんから話しあえるように、無口な主任看護婦の性格を明るくすることまでが課題になっていて、組合員はこぼしながら、その課題にとりくんでいるのだ。その方針も、みんなで話しあって決めたのである。

ほかの職場班では、若くて気さくな主任看護婦を、みんなでもり立てるようにして、超過労働分は、きちんと報告書にかきこんで、残業賃金を請求することをおこなわれていたし、単一労組の手で、外からまかれるピラ呼応して、どこの病院ではどれだけの年末一時金を要求している。どこの病院では二カ月分プラスAの一時金をかくとくした。わたしたちは基本給が低いことから、三カ月分は欲しいわよ。と、口から口へ伝えて、一時金要求をもちあげることもしあわれていた。

そのほか、さまざまなことが話題になったが、わたしは、単一労組の活動が、組合員自身を変えるだけでなく、まわりの仲間たち、主任の性格まで変えることに取りくんでいることに、あとから考えれば考えるほど、おどろきが深くなっている。シーズンがくると要求をだし、適当なところで組合幹部が取引きをして、賃上げや一時金闘争が終わる組合運動では、とても考えることができないことである。

最近の一年間で七倍近くに組合員を拡大したA分会では、その経験をつぎのようにまとめている。

①分会会議を定期化し、たたかいの方針だけでなく、個人の問題もどんだしあって話しあいながら、規律ある活動を確立した。

A分会では、分会でちゃんと方針を出さないと、次の週は安心して活動できないくらいだった。たまたかいの方針を討議するだけでなく、人間だれにでもあるグチの処理から、恋愛問題、人生問題などさかんにやった。横道の話が多すぎるので、たまたま会議に参加した外部の人がびっくりするくらいだった。能率よく討議する必要があるのだが、トリガラのように骨ばかりの会議では、味気なくなつて、会議に出るのがおっくうになつてしまふというのである。

わたしの感想では、A分会の分会会議は、信頼できる仲間たちと、心にかかる問題をあらいらざらい話しあえる、一週間の中で、一番楽しい時間になつてゐるのだった。だが、うんざりするほど説教くさく、押しつけくさく、ながながとぶつ会議とは、雲と泥の差があるところに、第一の秘密があるようだ。

②サークル活動を重点にして、非組合員の声を熱心に聞いた。

A病院には、民主的なサークルのほかに、経営者側がつくつた英会話などのサークルがいくつかある。A分会の組合員は、経営者側のつくつたサークルにもどんどん入つて、非組合員の声に耳をかたむけて活動した。A分会の合言葉は、経営者側の認める、公然と活動できるサークルを無数につくろう。経営者側が監視しきれないくらいにつくろう、であった。急速に組合員が拡大できた第二の秘密は、非組合員の声を、公然と活動できるサークルでたくさん聞いたからだった。

## ③学習活動を重要視した。

A分会は、地域の関係で、ほかの産業の労組事務所でやっている学習会に参加しているが、若い婦人労働者が多いので、肩のこらない討論の中で、労働者の立場からすべてをみる考え方を身につけている。

④職場の活動を重点にして、地域の活動やさまざまな民主運動で分散しないように努力した。

これはほかの民主的な大衆活動と、職場をキソにした単一労組の活動を同列に見ないということである。職場こそ労働者のトリデで職場を離れたら労働者は無力になってしまうという考えで、ほかの民主的な大衆活動をやる時も、職場の中の活動を強めるのに役立つことを第一にしたということである。

三年半前に四人で発足した医療単一労組分会は、三十人近くになって、いくつかの班組織をつくった。班では職場に密着した方針を出して、さらにきめの細かな活動を進められるようになった。しかし、一つ一つの班が、以前の分会の水準にはまだいかない。それがつぎの目標だ。人数が急速にふえてきたので、指導体制の強化など、いろいろと新しい課題も生まれてきている。



非公然の医療単一労組A分会が、ある規模をもった名の通った病院の中で、不拔の力をたくわえるまでには、これから、きびしい試験もあるだろう。しかし、一家族のようにむつまじい、助けあって勉強もし、新しく有能な組合員もむかえているA分会は、必ず、きびしい試験を突破して、さらに前進を続けるだろうとわたしは信じていることができる。

A分会の中心になってきたTさんは、なんでも相談できる姉さんのようになっていた。そのTさんが、わたしに最後にこう言っていた。

「単一労組は、ほんとうにたたかう組織になっていないと、拡大もしないし、入っても沈滞してしまふし、分会組織も強くないんですね。たとえ方法に多少のあやまりがあつても、たたかうことが一番大切ですね。とかく、わたしたちは、結果を見て、そんなことしなければ良かったと、ついグチが出てしまふんですが、それは第二義的なことなんです。行動したことで、たたかったことを第一義的に見て、そのことを重く評価して、あやまりは、今後くりかえさない教訓にしていくように、話しあつていくことが必要ですね。えらそうなことを言いましたが、わたしたちは、まだほんとうは、そんなにたたかつていないんですよ」

Tさんはち、ちよつと照れたように笑った。

わたしは、これがA分会の一番の教訓だろうと思つた。非公然だからといって、へそくりでも作るように組合員を拡大するのは、たちまち壁にぶつかつて沈滞してしまふのだろう。し

かし、だからといって、その反対に非公然がまもり切れなくなって、職場の人たちから浮き上がった一人よがりのたたかひをするのでは、これまた、たちまち浮き上がって孤立させられてしまうのだろう。あくまでも非公然活動を守りぬいて、職場内にある経営者が認めたり、つくったりしている組織や機会をとらえて、未組織の仲間の要求をだしていく。その実現のためにたたかひっていく。A分会の若い看護婦さんや、事務員の婦人が、個性をいかして、実のびのびと発言し、仕事を引き受けているのも、そのたたかひの中で身につけた自信なのだろうと思つた。そしてグチでも、不安でも、不満でも、なんでも腹にあることはみんな出してしまふ会議、脱線を気にしない会議は、勤務中、ほとんど話しあうこともできないほどに忙しい婦人労働者を組織するには、大切なことなのだろうと思つた。そういう自由なふんいきの会議の中で、みんなの創意や智恵がひらめき出てくる。一人の指導者が、ある問題の重要性や危機感を会議の五分の四ほどもしゃべりまくるスタイルでは、みんなが持っている創意や智恵も出てこなくなってしまうのだ。

一人でもは入れる単一労組の非公然活動は、働く労働者と強慾な経営者との智恵くらべのたかひでもあるのだから、このことは、非公然分会が発展するかどうかの一つのカギなのだと思つた。

東京私学単一労働組合・盈進学園分会



十一、学園ぐるみ

公然化のよろこび

公然化への四原則を守った

勝利

# 1. 憲法では保障されていても――

これまで、主に非公然でたたかっている個人加盟労組の分会や、組合員の活動を紹介してきた。しかし、非公然の分会だけが、個人加盟労組の分会ではない。

経営者に労働組合の活動を承認させて、団体交渉もできるなら、運動全体の立場から判断して、分会を公然化して活動する場合もある。

また、日本国憲法第二十八条で、「勤労者の団結する権利及び団体交渉その他の団体行動をする権利は、これを保障する」と、厳粛に保障されている労働者の団結する権利を、経営者に確認させてたたかうことは、非公然で活動している単一労組の分会の当然の要求とも言えるだろう。経営者がこの「労働者が団結する権利」を無視したり、破壊しようとする行為は「不当労働行為」として、労働組合法で禁止されている。目ざめた労働者ならばみんなが知っている必要がある労働組合法第七条では、(1)労働者が組合を結成しようとしたり、組合に加入したり組合活動をしたからと、首切りやその他の不利益な取扱いで労働者を圧迫すること。(2)労働者

を雇うのに組合を脱退することとが、組合に加入しないことという条件をつけること。(知ら  
ないでこのような誓約書に署名押印しても、法律違反で効力はない。従う必要はない)(3)労働  
組合と団体交渉をすることを不当に拒否すること。(4)労働組合の結成、運営はたいして妨害、  
干渉をくわえること。(5)労働委員会の求めにおうじて出頭し証人に立った労働者に不利益な取  
扱いをすること。などは「不当労働行為」として、「使用者は……してはならない」と明記さ  
れている。

もしも経営者たちが、このような「不当労働行為」をしたら、組合または労働者は、労働委  
員会や裁判所に提訴して、経営者がこういう行為をやめ、組合や労働者がこうむった不利益を  
回復するように命令してもらうことができる。経営者がこの命令に違反するときは処罰される  
のである。

しかし法律というものは、身のまわりの現実を見てもわかるように、労働者や労働組合の力  
が強くなって、始めて実施させられるのである。青葉幼稚園の先生たちや、大輝交通の服部昌  
克さんなどが、経営者の「不当労働行為」を提訴して、首切りや、下車勤を撤回させることが  
できたのも、単一労組の団結力や、職場や地域の労働者の強い支援があったからで、もしも、  
泣き寝入りして転職してしまえば、「不当労働行為」はそのまま、まかり通ってしまうのであ  
る。アメリカに従属した日本の独占資本家たちが、権力をにぎっている現在の日本では、憲法

や労働組合法、労働基準法などの法律はあっても、「不当労働行為」や労働基準法違反が堂々とまかり通っている場合があまりにも多いのである。

日本の経経者たちは、数百万の労働者を労資協調の御用組合に組織して、たたかえないようにしているだけでなく、千八百万人もの労働者を一人ひとりバラバラの未組織にしておいて、低賃金も労働強化も首切りも意のまま、ボロもうけをしている。経経者たちはこのボロもうけをまもるために、自分たちは業種別、地域別の経営者団体をつくって固く団結している。経営者団体の最高機関の一つである日経連の指導のもとに、警察、御用弁護士、反共評論家、組合破壊の専門家を手足に使って、労働者をどんなにひどい低賃金、労働条件でも文句を言わずに働き、経営のつごうでいらなくなれば、おとなしく首切られていく労働者にしておこうと、たくさんのお金を使って日夜研究し、必死になって努力しているのである。そして労働組合をつくろうとする労働者を見つけると、たちまちのうちに集中的な「アカ攻撃」をして、周囲の労働者から切り離して首切ってしまうと、絶えずねらっているのである。

だから、憲法や労働組合法で、労働者の団結する権利が保障されているからと、十分に力をたくわえないうちに安易な気持ちで公然化することは、経営者がしかけているワナに自分から、かかっていくようなものである。では、どのくらいの力関係と、どういう条件のときに公然化しても良いのだろうか。一律に基準をつくれぬ、難しい問題である。

東京私学単一労組では、その貴重なたたかひの経験をまとめて、非公然分会の公然化は、人数が多くなつたからとか、非公然の月日が長かつたからということだけでは決められないとして、「公然化への四つの原則」をかかげている。

### 公然化への四つの原則

- ①分会の中に、どれだけ中核が組織されているか。
- ②分会員の学習はどれだけ進み、高まっているか。
- ③職場の統一はどのように進んでいるか。職場の力関係はどのようになっているか。  
(組合員内部の統一。組合員が組合員をふやすテンポ、組合員と未組織の統一)
- ④地域の状況を変えるぐらいの力になっているか。

表現がちよつと抽象的で、実際に、個人加盟労組の活動にとりこんでいる人でないと、具体的には分りにくいかも知れないが、安易に考えて公然化するものでないことは分るだろう。この「公然化への四つの原則」が確立されるまでは、ある程度に組合員がふえたところで非公然活動に行きづまると、公然化すれば活動しやすくなると考えたり、組合員の一部が首切られたり、配転されたりすると、反発的に分会を公然化してしまつたり、非公然活動に徹底しきれな



いで、なしくずしに半公然化してしまふことがあつた。その結果は活動がいつそう困難になつてしまつた。その貴重な経験をまとめてみちびき出したのが、この「公然化への四つの原則」である。

ほかの産業の個人加盟労組も、私学単一にまなんで、この「公然化への四つの原則」をかかげている。四つのうち一つでも欠けたら、時期尚早という、かなりきびしいのだが、この「公然化への四つの原則」に従つて、完全な準備と必要な条件があつて、劇的で感激的な公然化に成功する分会も、つぎつぎに誕生してきている。

東京都武蔵野市八幡町のアメリカ軍宿舎グリーンパークの近くに、高校から幼稚園まである<sup>えい</sup>進学園の私学単一<sup>えい</sup>労組・<sup>えい</sup>進学園分会もその一つである。

一九六六年十月十八日朝。それまで二年以上も地道な非公然活動をつづけてきた<sup>えい</sup>進分会は、倉橋治分会長以下三十名の連名で、堂々と公然化した。それは三日後の二十一日に五百五十万人の労働者が、さまざまな形で、ハベトナム侵略反対一〇・二一統一ストライキをたたかおうとしている直前であつた。

この朝、<sup>えい</sup>進分会の組合員は、前夜までにいっさいの準備を終えて、二年余の非公然活動の

つみ重ねに十分の確信をもちながらも、緊張と期待にいっぱいになって登校した。盈進学園の経営者は、創立四十年になる学園の創立者で、いまも学園理事長をしている丸山鋭雄（としお）氏で、丸山理事長は高校、中学校、小学校の各校長と幼稚園長を一人で兼ね、経営面は夫人の丸山常任理事が担当している文字どおり個人経営だった。

一時間目の授業が終わった直後に、この丸山理事長に、組合結成（公然化）を通告にいく倉橋分会長など五人の先生はとくに緊張していた。学園でも、分会でも一番古参の萩原一雄先生でさえ、自分で落ち着いているつもりで、一時間目の授業に、よそのクラスの出席簿を持って行ってしまったほど、あがっていた。十年間の教員生活でもめつたにない緊張だった。それだけ公然化のこの日を迎える喜びと感激は強かったのである。

十時三十分。丸山理事長は、表面はびっくりしたふうも見せないで、組合結成の通告書を受けとって言った。

「主事と相談してから、後で返事しよう」

「いや、これは経営者の理事長が返事することで、主事に相談する性質の問題ではないでしょう」

と、先生たちに言われて、理事長はやっとなあわてだした。

その直後、「私たちは、私学単一労組・盈進<sup>えいしん</sup>学園分会を結成しています。本日、大会を開き

ます。みなさんの参加をおまちしています」という、倉橋分会長以下三十名が連名の白いピラが、高校、中学、小学、幼稚園、事務、用務、給食の全職場にもれなく、組合員の手で配布された。学園の中に目に見えない活気がみなぎりだした。

組合公然化大会は午後三時五十分から、高校三年C組の教室で開かれた。高校、中学の教職員のほか、用務員、給食員もふくめて、幼稚園、小学校の教職員もぞくぞくと集まってきた。在籍八十五名のうち五十名以上が集まった。小さな教室はよろこびと感激で紅潮した顔、顔、顔でいっぱいになった。

「全教職員会議より出席率が良いな」

と、だれかが言ったほどの大盛況だった。

公然化大会は約一時間ほどの討議で、十三名の分会執行委員や分会役員を承認、私学単一労組と分会の活動基本方針、本年度活動の具体的目標、①公費助成獲得運動の推進。②教育諸設備の拡充設備。③受持ち時間数の適正化と研究日の確保。④経済的諸問題、などが確認された。大会の途中で、組合の公然化を知った同じ私学で働く仲間たちから、こころのこもった激励電報、祝電がつきつきと到着して、全員の拍手の中で披露された。その中には、すぐお隣りの武蔵野女子学院分会の「組合大会を祝す。今後とも固く手を組んで共にたたかおう。ガンバレ」という電報や、立華学園分会の「クミアイタイカイオメデトウ。トモニゼンシンシヨウ」

という祝電もあって、参加者の感激と決意をふかめた。

そして公然化大会の直後、その場で八人の人が正式に加盟する手続きをした。その中の四人は給食係の婦人だった。翌日も四人、そのつぎの日も四人と加盟し、二十七日には小学校の教職員七人がそろって加盟した。そして十日後には、組合員は六十二名に拡大した。公然化大会後、二倍化を達成したのである。

この六十二名の中に、給食員四名、用務員四名も加盟して、学園ぐるみの組織になっているのは、個人加盟労組の特長である。公立学校の日教組や、日高組などは教職員だけの労働組合で、用務員や給食員あるいは事務職員を未組織にしたり、別の組合をつくらざるを得ないようになっている。個人加盟労組だけが、同じ職場で働く労働者は、臨時工であれ、用務員であれ、みんな一つの労働組合に組織することができるのである。

また八十歳に近い数学の教師に、加入をすすめるために、個人加盟労組の規約を持って行くのと、「わしはそんな規約など読まなくとも、組合に参加する」と言って、私学単一労組の最高年令の組合員になった。

こう書いてくると、万事調子よく進んで、簡単に公然化に成功したように、思われてしまうだろう。しかし<sup>た</sup>盈進学園分会が、公然化にこぎつけるまでの非公然活動のつみ重ねはなみたい

ていのものでなかったのである。その非公然活動の積み重ねと、力の蓄積があったからこそ、確信にみちて公然化に成功し、公然化後わずか十日間で組合員を二倍化する成果もおさめることができたのである。盈進<sup>えい</sup>学園分会の成功は、さきに紹介した「公然化へ四原則」を忠実に、徹底して準備し、十分な条件をみたしてきたところに秘密のカギがあるのだ。

たとえば非公然当時の盈進<sup>えい</sup>分会の合言葉は「おれたちは悲壮な気持ちで公然化するのはやめよう。公然化するときは、全員が勝利の確信に燃えてやろうじゃないか」だったという。この合言葉で、だれかがあせりがちになるときは、お互いにおさえ、励まし合ってきたのであった。

## 2. 盈ちあふれそして進む

では、盈進学園分会の公然化までの活動は、もっと具体的にはどうだったのだろうか。

同分会で、最初に私学単一労組に加盟し、現在では私学単一労組の組織部長をしている萩原一雄さんに、公然化までの経過や、活動の蓄積ぶりを詳しく話してもらったので、紹介しよう。

萩原さんが、盈進学園の国語の教師として入職したのは十年前だった。それから一九六〇年ごろまで、大学卒の初任給は九千六百円だったというから、びっくりする低賃金だ。びっくりするのはそれだけでなく、夏休み後登校してみると、丸山理事長の独断で、教師の顔も知らない生徒が入ってきている。ふつうの生徒なら、なんとかなるが、あらゆる学校を放校されてきて、親の金の力で、こっそり入学してきたチンピラヤクザみたいな生徒は、最初からまじめに勉強する気はなくて、教師を教師と思わず、授業時間中は授業のじやまのしどろしどろだった。当

時は安い月給で使う関係で婦人の教師が多かった。男の教師でも教室を静かにできないのだから、婦人の教師では授業どころではなかった。

それでも理事長兼の校長は、金さえ取れば良いんだと言わんばかりに、知らん顔をしているのだ。父兄からも、こどもが勉強できない、あまりにも常軌を逸した生徒を入学させないでくれと苦情が続出してくる。たまりかねた先生たちは、教員会議で話しあって、みんなで、いっせいに授業放棄をした。それは経済要求はしない。外部とは連絡をとらないという形の、教師の教育者として発言力を最低ぎりぎり要求する自然発生的なストライキだった。そのときは、生徒の入学については、教員会議の意見を尊重するということでおさまった。

しかし、その後の教員会議も、理事長兼校長がいつも議長で、一方的に上意を下達するだけだった。その後も新しく入った教師は、不良化した生徒の多いのと給料の安いのにびっくりして、一日でやめてしまう人も多く、一年も勤めていれば良い方だった。萩原先生のように十年も勤めているのは例外のほうだったから、教員の顔ぶれがいつも変わっていて定着しなかった。そして卒業生名簿には、退学した生徒の名前がのっていたり、先生たちが顔を見たこともない名前がのっていた。このことはどう考えたらよいことなのだろうか？わたしには、能力があっても貧乏で泣く泣く進学をあきらめた労働者を、低賃金でこき使っている資本家が、労働者を搾取したその金で、自分のドラ息子や不良娘のために、卒業免許を買ったのだとしか思え

ない。ふつうに働いている労働者では、私立高校の入学金と三年間の月謝、学資、寄附金だけでも大変だ。卒業免状がいくらで売買されたのか見当もつかないが、ふつうの労働者では、逆立ちしても出ない金額であることは、まちがいないだろう。

また萩原先生は、武蔵野警察署の防犯課へ不良ががった生徒のもらい下げに、いく度も行ったことがあるという。

「これでは学校ではなくて、少年鑑別所だよ」

と苦笑いして言う同僚もいた。そのうえ、先生たちの賃金は、大学を卒業していても一万円以下。研究用の本を買っていたら野天で水ばかり飲んでいなくてはならない。真剣に教育内容の向上に取りくめるような状態ではなかった。

有志の先生たちは、なんとかして労働組合をつくりたい。労働組合が欲しいと考えていたがどうやってつくれば良いのかわからなかった。労働組合をつくるには、企業の従業員全部、学校でいえば教職員全部の意志がまとまらなければ、できないものと思いきんでいたのである。ところが、高校生が急増するころから入ってきた先生たちは、みんな、「労働組合をつくるような活動は致しません」という誓約書を取られていた。正直な先生たちは、そんなものは法律的には無効なものだということを知らず、労働組合をつくりたくとも、その誓約書を取られてい

るからだめだと考えているのだった。



それでも先生たちの良心は、経済要求は後でも良い。すこしでも良い教育をしたい。という方向で真剣な努力が始まった。まず、理事長兼校長の一人舞台だった教員会議で、ごまかしのきかない真剣な問題で、すこしづつ教員の発言する機会をとって行った。つぎに生徒の生活指導にとりくんだ。そして生活指導委員会をつくった。ふつうの私学では生活指導委員会は、経営者側がにぎっているのだが、えい進学園では良心的な先生たちが生活指導委員になって働いた。その一方では、各教科で研究会をつくった。最初にできたのが国語で「新古今和歌集」の研究会を続けた。それに続いた社会科では、十数名の先生たちが一年以上も「憲法問題」にとりくんだ。

これらの活動の中で、先生たちは、自分たちの要求が正しく、当然の権利でもあり、義務でもあることに自信をもっていった。

二年前の一九六四年の夏休みに入る前、八人の先生たちは、どうしても労働組合をつくらなければいけない、と話しあった。しかしまだ念頭にあるのは、学校中の教職員が一度にそろって参加する企業内労働組合だった。八人の先生が知っている私学の労働組合は、みんな企業内労働組合だったのである。

「どうすればつくれるのだろうか？」

八人の先生は、ネコの首に鈴をかけることでどうどうめぐりの議論をしているネズミのよう

な気持ちだったという。夏休みに入ってまもなく、萩原先生は、東京私教連（東京私学教職員組合連合）の組合員である友人から、

「一人でも入れる私学単一という労働組合があるんだけど、ぜひ、入れよ」

とすすめられた。一人でも入れる労働組合なんて、まったく意外だったし、どんな活動をするのか皆目見当もつかなかったが、信頼している友人のすすめでもあったので、萩原先生は、生まれて始めて労働組合に加入した。あとの七人の先生たちも続いて私学単一労組によるこんで加盟した。始めは手さぐりのようだったが、私学単一労組こそ、八人の先生たちが、ながいあいだ求め続けてきた労働組合であることが分ってきた。

企業別、学校別でない個人加盟労組の特長は、地域の三多摩支部で、ほかの学校の先生たちと同じ組合員として活動できることだった。そして活動しているうちに、えいしん盈進学園のある三多摩の私学の学校内のようにすが分ってきた。給与や生徒定数など、えいしん盈進学園より良いところも、八王子実践のようにもっとひどいところのあることも分った。私立高校の先生は学校を転々と変えながら、すこしでも良い高校に変わり、最後には公立高校の教諭になるチャンス<sup>を</sup>をねらっているという傾向があった。しかし、周辺全体の私学の実態が分つてくると、転々と動くのは全体を良くするのに少しでも役立っていない。それよりも、自分たちの学校を、地域全体の学校を良くするように努力するのが、教員自身のためでもあるし、生徒にたいする教師の責任で

もあることがよく分つてきた。八人の先生たちは、腰をすえて単一労組の活動にとりくみ始めた。

ここで特に記しておきたいことは、東京私教連の一組合員が、萩原先生に、私学単一という労働組合のあることを紹介して、加盟をすすめたのが、最初のきっかけだったということである。これは東京私教連が、未組織の私学にたいして、私学単一の加盟を呼びかける方針を出していたのを、その一組合員である先生が実践した結果なのである。

このような方針を出している組合は、全印総連、出版労協、全自交、全建労、全医労などの労働組合があるが、すべての産業の労働組合が、周辺の未組織経営の労働者に、個人加盟労組への加盟を呼びかけて、バックアップするようになれば、個人加盟労組の組織化が急速にひろがり、企業内労働組合の労働者たちも、未組織に足を引っぱられるということがなくなってくる。既存の労働組合が、このような支援活動をするのは、労働者の連帯心のあらわれであるし、ほんとうに大切なことだと、<sup>えい</sup>進学園分会の誕生のきっかけからも痛感される。

ちよつと脱線したけれど、個人加盟労組に加盟した八人の先生たちは、図書室を使ったり、保健室を使ったりして、毎日のように組合員を拡大していった。有利だったのは、八人の先生がみんな教職員の中心になっている、古参のベテラン教員で、理事長がケチでなければ職制になつている人たちだったことで、それで拡大のテンポは早かった。

そして教員会議、職員会議、さきにあげた生活指導委員会に、教員の発言権をたかめ、教育内容の充実と向上をめざす非公然組合の方針を入れて行つた。各研究部をさかんにして、各研究部連絡係で『<sup>えい</sup>進ニュース』という職場新聞も合法的に発行した。

また高校教員の受持ち授業時間は、公立高校などは一週十六、七時間なのに、私立の<sup>えい</sup>進学園では二十一時間前後だった。このため教員が授業内容を研究するどころか、疲れきつて欠勤が多くなり、一日六時間のうち四時間も自習というひどいことも起きた。非公然組合は、このことを教員会議の問題にして、一週十八時間までに下げること成功した。

一九六五年十一月からは、『<sup>えい</sup>進ニュース』を日刊化した。学内のさまざまな動きとともに、他校の年末一時金の要求額を表にしたりした。また学校の行事計画、時間割りの修正をする企画委員会を、学年主任と教科主任とでつくって、県案の賃金問題にもタッチしていった。学年主任と教科主任は一名をのぞいて、全員が非公然の組合員だった。この企画委員会をとうして、非公然の組合は年末一時金二カ月分プラス一万円。給与体系の作製と明示を理事長に要求、その内容を、『<sup>えい</sup>進ニュース』で事務員、給食員、用務員をふくむ全員に配布した。それは全職員の要求だったので、強く支持された。

校長兼理事長と校長夫人の常任理事は、「高校だけなら出してやるが、どうして事務員や用務員のことまで心配するんだ」

と、教員と現業員を分けて、対立させようとした。しかし、用務員や給食のおばさんたちの要求もふくめて、学園ぐるみでたたかうのが個人加盟労組の方針で特長だった。そしてついに全職員が一率に差別なく、年末一時金二カ月分プラス二千円をかくとくした。前年までは〇・三カ月分ぐらいだったから、みんな大よろこびだった。公然とした労働組合はなくとも、非公然の組合員が未組織の人たちの声をよく聞き、その要求を実現させるために団結をかためてたかった成果だった。さらに六六年春には、平均七千円の賃上げもかちとった。非公然の組合員は職場の太陽のように活動し、未組織の人たちに信頼されるようになった。

また教育問題でも、入学時の成績でA・B・Cなどのクラスに分けるコース別教育、進学組、就職組に分けて差別する教育は、小人数の生徒に「人間教育」をする学園創立の精神に反すると、みんなで反対してやめさせた。教育の受け持ち時間が少しでも短くなって、より充実した授業ができるようになった。それにつれて授業内容もよくなり、非行生徒は目に見えて少なくなった。教員と生徒の信頼しあう交流もすすんだ。学園内のふんいきまで明るく変わってきた。そして先生たちは、学園内の職務の分担や責任者も、みんなで民主的に選出する制度までもかちとった。

ここまでくるには、「私学単一はアカだ」という反共攻撃に負けて、企業労組をつくったほ

うが良いと、脱落した人もごく一部にあったが、公然化とともに復帰し始めている。

こうした活動の積み重ねで、組合員の学習も進み、中核も育ってきた。盈進学園分会は、おなかの中の赤ちゃんが、健康に育って月満ちて、元気な声で誕生するように公然化したのである。ここまで、公然化までの経過や、非公然分会のあらゆる公然組織を使つての活動や、一年近くも続いた日刊の「盈進ニュース」の活動を聞くと、最初に聞いた、非公然当時の合言葉——「おれたちは悲壮な気持ちで公然化するのはやめよう。公然化するときは全員が勝利の確信に燃えてやろう」——が、やせがまんではなくて、自信に満ちていた言葉だったことがよく分る。

盈進学園のあまり聞きなれない「盈進」という名前は、学園創立のときに徳富蘇峰が、中国の古典の中にある、

「原泉混々として、昼夜を捨てず、科に盈ちて、しかる後に進み、四海に放る」

という言葉から取って命名したのだが、私学単一労組・盈進学園分会も、まさにその名のとうりに、「公然化への四原則」に十分にみちて、あふれだすようにして進んで、喜びと感激にみちた公然化に成功させたのだ。それで公然化の喜び、感激といつても、望外の成功で涙を流して喜んだという性質のものでなく、非公然当時の長く、地味な活動の蓄積が、やっと晴れてむくいられた、静かで深い喜びだという。

盈進<sup>えいしん</sup>学園分会がこの時期に公然化したのは、世田カ谷区で、四名の解雇をふくむ六名の不当処分と、ねばり強<sup>つよ</sup>くたたかっている青葉学園分会を、労働者の公然とした連帯で支援するという意味もあったという。私学単一労組では、盈進<sup>えいしん</sup>学園分会に続いて、東部支部の愛国学園分会も、「四原則」に従って公然化している。

萩村先生は最後にこう言っていた。

「公然化後、青葉学園の先生を呼んで、学内で、青葉支援の集会を開いたり、ベトナム侵略反対一〇・二一ストライキを支持する集会を学内で、堂々と開けたときはうれしかった。また新しい自分たちの組合旗を公然とかかげて集会に参加したときも、旗をながめてしみじみと喜びをあげました。けれどもたたかいはこれからです。わたしたちはさらに前進する目標をだして、着実にいままでどりに慎重に、分会の強化をはかっています」

東京私学単一労働組合は、私立学校に働いている人なら幼稚園、小学校、中学校、高等学校、大学、各種学校、児童福祉施設など教育に関係のあるすべての職場のだけれども、一人でも加盟できる組合ですと、つぎのように加盟をよびかけている。

『私たちの組合は、ひとりの権利であっても、それが侵害されたときは、組合員全員でその人の権利を守ります。』

私たちの組合は、すべての差別教育、軍国主義教育に反対し、民主主義教育をすすめるため努力しています。

私たちは、あなた自身とあなたたちの愛する生徒たちの未来のために、いっしょになって私学の現状をなおしていきたいのです。

みなさん！

私たちの「合言葉」は「みんなで話し合い、みんなで方針をつくり、みんなで闘い、みんなで成果をあげ、みんなで総括していこう」というものです。

みなさん！

私たちは、みなさんに、心から加盟をよびかけます。

今こそ、東京私学労働組合に結集しましょう！』

この労働運動の新しい歴史をつくる呼びかけは、私学単一労組だけでなく、産業別の各個人加盟労組から呼びかけられ、いま、東京から全国に、野火のように広がるようとしている。



全国金属労働組合・下丸子地域支部



十二、夜明けをめざす

労働者の合言葉は

“すべての職場に

組合員をつくらう”

## 1. 企業のワクを越えた大きな組織へ

川崎市鹿島田の全国金属労組・大和電気支部は、組合員の九割が若い婦人で、経営者の偽装倒産による全員解雇に反対、工場再開を要求して、すでに四年間もたたかっている。その大和電気のとまりは塀一つはさんで、同じ電機産業の日立製作所・川崎工場であった。巨大企業である日立の労組事務所は、鉄筋コンクリート建てのりっぱな労働会館で、大和電気と百メートルも離れていないところに建っていた。そして大和電気の婦人労働者たちが怒りの火の玉のようになつて、必死でたたかっているとき、日立のりっぱな労働会館はまるで無関係のようにひっそりとしていた。日立の労働組合はすぐとなりで闘争中の大和電気の労働者になんの支援もしないのである。

企業がちがひ、労働組合もちがえば、知らん顔もあたりまえになっている。しかし私はそれを目の前にして、大和電気の婦人労働者たちが必死でたたかっているときに、すぐとなりの日立の労働組合が知らん顔をして、それがあたりまえになっていることが、実に奇妙でおかしい。

という感じに強くうたれた。

その時と前後して、わたしは茨城県日立市の日立製作所海岸工場の労働会館へ、組合幹部を訪ねたことがある。海岸工場は日立製作所の中核工場で、その労働会館は川崎工場のよりもりっぱで大きかった。わたしは組合三役の一人に会ったが、その机やいすは大和電気の社長のものと同じぐらいにデラックスだった。四年前のその当時に、日立市内の日立製作所の各工場には約二万二千人の本工労働者のほかに、多いときは一万五千人の臨時工や社外工が働いていた。そのほか二百以上もある下請け工場で約二万人の労働者が働いていた。そのうち労働組合に組織されているのは、二万二千人の本工労働者だけで、三万五千人の臨時工、社外工、下請け労働者は未組織で、いつ首切られるか分らないのに、たたかう組織がなかった。

私はそのころ新聞記者で、日立の組合三役の一人に、三万五千人の臨時工、社外工、下請け労働者を首切りから守るために、どんな努力をしているのかを質問した。しかし、「臨時工の本工採用に努力している」という返事しか聞けなかった。そしてその後の四年間に三万五千人の臨時工、社外工、下請け労働者のほとんど大部分は首切られてしまったのである。

私は、日立の労働組合が特に悪いのだとは思わない。戦後につくられた日本の労働組合の大部分が、日立と同じように本工や本職員だけの企業内労働組合で、そのような企業内労働組合では、労働者全体の生活と権利をまもるためには闘えないことを、日立の例で言いたかったの

である。

企業内労組にはこのほかに、いろいろな弱点がある。たとえば、組合幹部が首を切られ、「首を切られたものは従業員ではないから、組合役員としてみとめない。したがって団体交渉には応じられない」と、資本家が団交を拒否する口実にすることも珍しくない。こうして企業内労組は、本工や本職員の首切りにも反対する力が弱くて、各個に撃破されてしまうのである。また企業に従属した労働組合は、工場閉鎖や企業解散になると、労働組合も解散せざるを得なくなってしまう。日本炭鉱労働組合（炭労）は、かつて四十万人以上の組合員を組織していたが、大量首切りや山の閉鎖で、今日では六万数千人に減ってしまった。離職した炭鉱労働者もいるが、下請け炭鉱や社外工で働いているものもある。しかし炭労が企業内労組であるために、組合員ではなくなってしまったのである。こういう例は、ほかの産業でも少なくはない。そしてこれらの弱点が、二千八百万人の労働者のうち、一千八百万人もの労働者を未組織のままにしてきたのである。

個人加盟の産業別労組は、企業内労組のこのような弱点を克服して、本工、臨時工、社外工の差別も、思想、信条、宗教の差別もなく、また巨大企業、零細企業の区別もなく、同じ産業で働くすべての労働者を、単一の労働組合に組織していく大きな展望と目標をもって生まれてきた。しかし、戦後二十年間も企業内労組の労働運動が続いてきたので、その考え方の影響を

克服するのは容易なことではない。

また既存の企業内労組のほうでも、個人加盟の産業別労組が理解しにくく、したがって協力もしにくいという条件もある。北海道で個人加盟の産業別労組の全空知炭鉱労組を組織している森谷雅春副委員長は、つぎのような経験を報告している。

「……組合結成後間もないある日、美唄炭鉱労組から組合にたいし文書でつぎのような質問がありました。その内容は『貴組合の結成を御祝いし、今後の御健闘を期待します。ところで現在の炭労支部、組合員は貴組合に加盟できますか、もしもできるとなると二重加盟ということになり、異議がでてくると思います。また当組合との関係もできますがどうか』というものでした。組合は早速電話で……『わが組合は炭労の組織を抜いたり、一人ひとりの労働者をこちらの組合に加盟させたりする方向をとりません。炭労は階級的に大いに発展して下さい。私達は未組織の労働者を戦列に加えてたたくたいです。共に頑張りましょう』と回答しましたところ、明るい返事で『よく判りました。ありがとうございました』ということでした。われわれはこのことがあってから、ただちにすべての炭鉱労働者や労働組合にたいし、いまおこなっている個人加盟の組合結成の趣旨を理解してもらうため、二人の役員を、空知の各炭鉱に派遣しました。このことは、中傷し妨害をおこないつつあった石炭資本の工作をぶち破り、新組合の組織活動を正しく理解させるうえで大きな役割をはたしました。そのうえ美唄炭労、

夕張炭労、平和炭労、清水沢炭労、茶志内炭労や各地区労を含めた五十数組合より組合の結成祝い激励ということで、十数万円のカンパが寄せられました」

このような例もあるのだが、まだまだ既存の企業内労組やその組合員の理解や協力はおくれている。企業内労組の活動は十年、二十年と経験してきたベテラン組合幹部でも、個人加盟の産業別労組の任務や活動は理解しにくいのである。しかし既存の労組や組合員の協力は、盈進学園の例でも分るように、個人加盟の産業別労組の発展のためには、非常に大きな役割を果たすのである。

また企業内労組の弱点のほうの影響は、個人加盟の産業別労組の活動をしていても、強くあらわれてくる。というのは、いっしょけんめいに個人加盟の産業別労組の活動を、職場を基礎にしているつもりでいて、知らず知らずのうちにいつのまにか、自分の企業の経営者とだけたたかう考えになってしまうのである。公然化の問題を考えると、賃上げの要求額を決めるときも、自分の企業の条件を中心にしてしまうようになる。産業全体や地域の闘争に参加するのは、自分の企業とは直接関係がないように思えたり、すぐに効果がないような気がして、消極的になってしまうのである。

これでは、せっかく個人加盟の産業別労組に参加して、その活動をしていても、企業内労組と同じようになってしまう。組合員を職場の過半数にして、早く公然化することを活動の目的

にしてしまったり、公然活動と非公然活動を段階的に分けたり、機械的に考えてしまうのも、このような企業中心のものの考え方から生まれてくる。この企業中心のものの考え方をなくすことは、個人加盟の産業別労組を飛躍的に発展させるために、いままとも重要な問題となっている。

もし労働組合が、自分の企業の経営者とたたかうだけの姿勢になっていたら、どうなるだろう。労働組合が資本家のまるがかえの御用組合になって、骨抜きにされる危険もある。中小企業だったら、親会社の単価切り下げとたたかうことができない。政府や資本家全体の低賃金政策や高物価政策とたたかうことができない。炭鉱の地下労働者や交通運輸の労働者は、自分たちの生命すら守ることができない。労働組合は、資本家全体や政府、自治体などともたたかわなければ、労働者の生活と権利をほんとうに守ることはできないのである。

これらのことをよく考えてみると、未組織労働者の組織をめざす個人加盟の産業別労組は、一つの工場に百人の組合員をつくるよりも、百の工場に百人の組合員を組織するほうが、はるかに大切に重要な活動であることが分ってくる。

東京・大田区の全国金属労組・下丸子地域支部では、個人加盟の産業別労組の活動が、知らず知らずのうちに、自分たちの工場の経営者だけを相手にする企業主義になる問題を、真剣に討論しながら、その克服をめざしてたたかっている最中だった。個人加盟の下丸子地域支部は組



合員八十名で一九六二年夏に発足した。そのうち六十名は二つの工場分会の合同労組の性格で、純粹に個人加盟の組合員は二十名だった。そして結成三カ月後には早くも組合員二百名になり、五年後の現在では約八十の工場に七百人をこえる組合員がいる。そして公然化している分会も二十三分会になっている。

ある日、よく闘っている組合員から問題が出された。

「個人加盟の産業別労組の組合員は、喜びも苦しみもいっしょにするのがほんとうだ。それなのにこのごろは各分会内部の事情ばかりならべて、闘っている仲間を真剣に支えていないんじゃないか。これでは企業内労組の集まりと変わりが無いと思うんだ」

別の組合員からも、同じ問題が出された。

「自分たちの職場に分会ができて、その組織のおかげで自分たちだけ利益があれば良いという考えでは、組織の拡大が進まないんじゃないか」

それを聞いてみんなは、真剣に話しあった。そして自分たちの活動やものの考え方が、知らず知らずのうちに企業内労組と同じようになってきていることに気がついてきた。いつのまにか、工場ごとの分会を、独立した労働組合のように考えてしまっていたのだった。これでは企業のワクをこえた個人加盟の産業別労組として、大きく発展するはずがない。それから真剣な討論がくり返され、いまでも続いている。本工、臨時工、社外工などの身分上の差別がなく、大企

業、零細企業、失業中の差別もなく、すべての労働者が一つに団結してたたかうのが個人加盟の産業別労組のあり方だと、頭ではよく分っているつもりでも、完全にそれに徹底するのは容易なことではなかった。まず第一に、周囲の労働組合のほとんど全部が企業内労組で、戦後二十年以上もそれで活動してきた経験や、ものの考え方の影響はほんとうに根強くしみこんでいた。それに経営者や、新聞・テレビ・週刊誌などは、毎日のように「うちの会社では……」という企業本位の考え方を宣伝している。ちよつとでも油断していると、すぐにその考え方の影響を受けてしまうのである。そして、「うちの会社だけ良ければ……」とか、「おれだけ良ければ……」という考えに負けてしまうのである。

## 2. 非公然でもしごとく、しなやかに

下丸子地域支部の仲間たちは、このような考え方を克服するために、まず昨年の定期大会で、地域を分けて八つの地域協議会をつくった。そして公然分会を中心にして、その地域の非公然分会を結合、しっかりと団結して闘うようにした。地域の未組織の労働者たちにたいする宣伝活動では、非公然の組合員も自分たちでピラをつくって公然とまいて活動した。また組合員を拡大する活動では、公然分会の組合員も非公然で活動した。百パーセントうまくいっているわけではない。

昨年の年末闘争では、四つの工場の経営者にたいして、統一して団体交渉をした。これには約百人の組合員が参加した。かつてなくもり上がった団体交渉だった。一月の衆議院選挙のときには、同じ大田区内の糍谷こうちや地域支部と協力して、社会党、共産党、民社党、公明党、自民党の各党に二十四項目の公開質問をみんなで討議してだした。それはどの項目も、政府にたいする労働者の切実で具体的な要求だった。

そのうちのいくつかを紹介してみよう。

五問 憲法は表現、集会、結社の自由と労働者の団結権を認めているが、ピラまき、ピラ貼り等を不当に制限し、事実上労働者の団結権を犯している。特にピラ貼りは国会議事録でも明らかにされているように、軽犯罪法の適用から除外されているにもかかわらず、不当にも官憲の弾圧が続いている。今すぐ中止すべきであると考えますがどうか。

九問 年次有給休暇は公休同様に扱われてしかるべき性質のものであるが、多くの場合特に労働組合のない企業では、制度はあっても利用が制限されているのが現実である。有給を与えるかわりに皆勤手当、精勤手当を支給しない企業はザラにあり、昇給や賞与の考課の対象にされるばかりか、配置転換まで行っている企業があり、まことに不当であると考ええる。又、女子の生理休暇も不当に制限をうけているばかりか、最近ますます圧迫がひどくなっている。我々は労働衛生と母体保護の観点から充分休養出来るように保障（有給で）すべきであると考えますがどうか。

十五問 中小零細企業に働く労働者は長時間労働、低賃金のなかで、最近ますます労働密度が高められているにもかかわらず、赤字経営が多くなっている。これは不当な単価切り下げ、融資の制限など、独占本位の政策に起因していると思えるが、このような企業で働く労働者の全

般的労働条件の具体的向上をはかるにはどうするか。

二十四項目の公開質問は、このほかベトナム戦争や汚職の問題から、物価問題や内職の工賃のことまで、どれも労働者の生活に切実な関係のあることばかりだった。この公開質問に、自民党は回答せず、公明党は期日までに回答がまにあわないという返事だった。地域支部は社会党、共産党、民社党からの回答を、組合員だけでなく、未組織の労働者にも知らせる活動をした。このような活動は、企業内だけに目を向けているのでは、出てこないことだった。

さらに下丸子地域支部では、こんどの春闘の闘争方針案では、組織拡大の基本方向の第一として、**へすべての工場に必ず組合員をつくること**をうちだした。そして八つの地域協議会ごとくに、労働者のサークルや交流会をつくり、ハイキングを計画したりしながら、公然分会も非公然分会も協力して、たえず未組織の労働者たちに働きかけている。組合員ならばだれでも組織拡大の活動ができるように、未組織の職場の調査表もつくられている。その調査項目を見ると、その職場の労働災害、健康管理という生命を守ることから、基準法は守られているか、年次有給休暇や生理休暇があるかどうか。賃金や諸手当の実情はどうか。食堂、更衣室、風呂、手洗場の設備はどうか。強制労働がないかどうか。人員の移動はどうか。系列化や親会社との関係はどうか。寮や社宅はどうか。最近に単価の切り下げがなかったか。など、たくさんの項目があつて、未組織の職場の要求やなやみが綿密に調査できるようになっている。そしてこの

調査にもとづいて、友人や知人になった未組織の労働者に、地域支部の分会が活動しているところの実情と比較しながら、個人加盟の産業別労組に加盟していくことの大切さを訴えていくのである。

未組織の労働者は、たくさんの要求をもっているが、その第一の要求は、「労働組合をつくりたい」という要求だという。未組織の職場では、矛盾がいっぱい山積していて、年配の労働者をふくめて、「なんとかならないものだろうか」という気持ち強い。これらの事実は、未組織の労働者たちが、確信のもてる呼びかけや説明を待ち望んでいることを示している。下丸子地域支部の組合員は、すべての工場に組合員をつくろうを合言葉にして、きのうも、きょうも自分たちでつくったピラをまいたり、友人、知人を紹介してもらっては、一日の労働のつかれも忘れて活動しているのである。

組織拡大の活動としては、このほかにも、組合員のいる企業で過半数の組合員を組織すると、公然化している分会では臨時工、パートタイム、第二組合員、未組織の人に働きかけること、などの活動がある。

下丸子地域支部の森下信晴書記長は、最後にこう言っていた。

「いま私たちの地域支部では、活動的な組合員はまだ全組合員の三分の一ぐらいです。中小

企業や零細企業の労働者は、職場の労働条件がとてひどいので強い不満もっています。それで個人加盟労組に入ると、職場の仲間たちを十分に組織できないうちに、また自分も十分にきたえられないうちに、経営者とはげしく衝突してしまふ傾向があるんですね。それでたちまちに経営者の分裂攻撃をゆるしてしまったり、自信を失ってしまう結果になるのです。戦闘的ではあるけれど、自分の経営のおやじとだけたたかう、企業主義が強いです。これが組織の拡大をはばむことにもなっているのですよ。支部ではこの点を昨年ごろから真剣に考えて、企業主義から抜け出す努力をしています。企業内労組と産業別労組のちがいを、頭で知るだけでなく、からだでも理解するようになれば、全組合員が活動するようになって、すべての工場に必ず組合員をつくろうという合言葉を実現できると思うんです。』

私が下丸子地域支部の組合事務所を訪ねたとき、その朝、一経営者が三カ月前にデッチあげた暴力事件で、三人の組合員が東調布警察に不当に逮捕されたところだった。それから三時間もたっていないのに、急を聞いた若い組合員が十人以上も集まっていた。そして渋谷委員長を先頭にして抗議に出発し、夜は東調布警察署前で、抗議をかねた春闘総決起集会を開くのだと話しあっていた。

となりで全員解雇反対のはげしい闘争が起きているのに、知らん顔をしていた日立川崎工場の企業内労組と、仲間の不当逮捕に抗議するために職場を抜けだしてきた個人加盟労組の若い

労働者たちの不屈な表情は、わたしの頭の中できわめて対照的だった。日本のこれからの労働運動の筋金になって発展させていくのは、どっちだろうか。答えはもう出ていると思った。

個人加盟の産業別労組の労働者は、夜明け前の冷気に身をひきしめながら、すでに夜明けを感じとっている夜明け前の労働者だと思った。既存の企業内労組の労働者も、同じ方向をめざしてたたかってこそ、夜明けを感じとることができるのだろう。

未組織の労働者がいるすべての工場で、個人加盟の産業別労組の組合員をつくらう。そのために、企業内労組の組合員も、個人加盟労組の組合員も、力をあわせてがんばらう。



勝利のためにあらゆる要求をもちよって



十三、全都単一労組一万人決起集会

氷雪と

寒波の中に

燃える闘魂

# 1. 一九六七年二月一二日

日曜日。

この日は、全都単一労働組合連絡会に結集する十二の単一労組の労働者が、春闘の勝利と組織の強化をめざして、午後一時から東京・大田区の大田体育館で「全都単一労組一万人決起集会」を開く日である。この朝、まぶしい雪晴れを期待して起きたのだが、二日前からぶっ続けの雪はまださかんに降っている。わたしの住んでいる日野市の辺では、もう二十センチ以上の積雪だ。テレビでは十数年ぶりの大雪だと言っている。後で新聞で読んだのだが、気温も一日中氷点下で、新記録の寒さである。まったくあいにくな雪と寒波であった。

わたしは、日野駅から東京南部の京浜急行梅屋敷駅下車の大田体育館まで、およそ五十キロあることや、天候のことも考えて、三時間前の午前十時ごろに家を出た。積雪のために国電中央線が間引き運転をしていたり、品川駅で切符を買うのに時間がかかったりして会場につくま

でに二時間半もかかった。品川から京浜急行電車に乗ると、決起集會に参加する労働者の姿が目立った。乗客の三分ノ一ぐらいがそうだった。あとの三分ノ一は大森競艇へ行く人たちで、大森海岸駅で降りた。こんな雪降りの日に競艇があるのかと、わたしは驚いたが、それよりも強く感じさせられたのは、決起集會に参加する単一労組の人たちの服装と、競艇に行く人たちの服装がきわだってちがうことだった。それは金持ちと貧乏人の服装のちがいでない。高級乗用車を乗り回している連中と働いている労働者の服装のちがいでない。同じように低賃金で苦しみ、同じように質素な服装であつて、この人は単一労組の人、この人は競艇に行く人と一目で見分けられるのである。

まず競艇に行く人たちは、競輪でも同じだが、ズボンにアイロンをかけてない。よれよれのひざのふくらんだズボンだ。靴もいつ磨いたのかわからない。背広でも、ジャンパーでも、オーバーでも、みんな早く、くたびれさせてしまっている。頭の髪もきちんとしてる人はめつたにいない。新しい服を着ていても、服の手入れや、服の着方に無神経になっているところがどこかに必ずある。

単一労組の人たちは、値段の高いものを着ているのではないが、むぞうさにジャンパーを着ていてもすきがない。髪もきちんと分けている。身びいきでそう感じるのではない。

もっと注意深く見ると顔つきまでちがう。競艇にいく人たちの顔はにごっている感じで精神的な輝きがない。生きる目的を見失ったすさまじさが、顔全体をとろんとさせている。単一労組の労働者たちの顔には、うてばひびく生きいきとした充実感がある。それでいて新興宗教の信者たちの服装も顔つきも均質化したのともちがう。一人ひとりに個性がある。同じ低賃金の労働者なのに、どうして顔までちがっているのだろうか。

エロとナンセンスでいっぱい週刊誌やスポーツ新聞は、無責任に賭ける賭けるとあおっている。公営ばくちの競輪、競馬、競艇の賭けごとに熱中している労働者は、それ以外のことはなにもかも考えないようにされている人たちだ。単一労組の労働者たちはその反対である。だが労働者を苦しめているのか社会を変えるにはどうすれば良いかを考えている。新興宗教の信者が一つの教えだけを盲信して、社会を科学的に考えないのともちがう。単一労組の労働者たちは、自分たちと直接関係がないような、アメリカのベトナム侵略戦争でも、紀元節でも、それが労働者の低賃金や無権利状態とどう関係があるのかを追究してたたかっている。公営とばくの賭けになにもかも忘れていくのと、なにもかも考えて、受け身でなく、社会を変えていく人間のちがいが、顔つきまで変えていることは、なんと感動的なことだろう。

小さな梅屋敷駅で多勢の労働者が降りて、わたしの乗ってきた電車はほとんどガラガラになった。雪は小降りになっていたが、まだやみそうもない。雪がカチカチに凍りついてる舗道を、一団の労働者にまじって大田体育館に向かったが、ゴム長靴にパイルの靴下をはいた足が早くも冷たくなってくる。正午ごろの気温としては、東京で経験したことがない寒さで、戦後にちよつと暮らしたことがある長野市の冬のきびしさを思いだした。

## 2. 胸をうつピラ、ピラ、ピラ

大田体育館の前では、ピラをまく人たちが雪の中で列をつくっていた。受け付けは産業別の単一労組ごとにあった。わたしは組合員でないので、報道関係の受け付けで参加費百円を払って入った。何人もの顔見知りの人たちとあいさつする。会場の中は、じっと腰かけていられないほど底冷えがする。

わたしは開会まで、もらったピラをていねいに読んでみた。結成してまもない個人加盟の単一労組である全信労東京金融労働組合のピラがあった。このピラをくばっていたのは美しい娘さんだった。ピラには

「……立派な建物のなかで背広姿やきれいな事務服で働いている金融労働者の生活は、ハタ目にはよく見えても、本当のところはたいへん苦しくなっています。……いま東京都内の信用金庫、信用組合、約百企業三万人のなかまが、まだ未組織のままにおかれており、これらのなか

まを個人加盟の労働組合に組織することは、たいへん重要な任務だと私たちは考えています。

「一万人集會に参加のみなさん。みなさんの家族や友人で未組織の金融機関に働く人がおりましたら、ぜひ紹介して下さい。私たちもみなさんと共に都内のあらゆる産業に働く三百五十万の未組織労働者の結集のために奮闘することをお約束します」

と書いてあった。

東京図書館労働組合のガリ版の『統一』という新聞では、Sさんの「ひとりでも入れる組合と私」という手記がのっていた。

「中学を出て、ポツと神田の印刷屋に住み込みで私は入った。暮れになると毎日朝六時から夜一時まで昼休み三十分を除いては立ちづめの仕事が続いた。私はその中でひたすら「一人前の職人さん」になることを考えて黙って働いた。紙を運ぶ手がすり切れて、ふいてもふいても血が出て、眠くてぶったおれそうになっても、なんぼ残業しても住み込みということで残業代など一銭もつかなくても、これに耐えられなくては「職人」になれないと思って黙って働いた。

そんな時、近江絹糸の人権ストの話聞いた。私は労働組合を身近かに感じるようになった。それから三年たって「一人でも入れる出版印刷製本産業労組」のピラを電柱に見出したとき私は心がおどるのを感じた。私は働くようになって始めて年次休暇を知った。祭日に休養す



るのも知った。残業代が時間によって払われた。五百円のモチ代が一カ月分の年末手当になった。そして何よりも、お互いにはり合っていた働く者同志が心から話し合い、手を結びあうことの強さを知った。あれから、もう十年になるという。その単一労組が一人も二月十二日、大田体育館に集まって決起集会を開くという。私は始めて組合を知った時のように再び心のおどるのを覚えた」

Sさんの手記にあるように、単一労組の中では一番古い十年の歴史を持つ、東京出版印刷製本産業労組のものでは、経営者の組合破壊とたたかっている中央区築地の一九堂分会のピラと北部支部・三立分会のピラがあった。三立分会は機会があれば、このルポルタージュで取材したいと考えていた凸版印刷の下請け工場で、女性ばかりでがんばっている分会だった。取材できなかつたので、ピラの全文を紹介しておこう。

私達は、凸版印刷・板橋工場の臨時雇として働いていましたが、六年前、凸版の組合で臨時雇を本雇にするように闘った時に、会社は合理化を進めるために本雇にせず、新しく三立検品という会社をつくり、凸版の本雇並みにするという約束で、私達は三立検品へ移されました。こうした中で五年前、女性ばかりで組合をつくり、闘っています。昨年凸版で、製本課をなくすという大合理化案が出されたのにもない、三立検品でも、あたらしく総務課長

というのをおくようになりました。

それからは、しめつけがひどくなり、最近ではそれにハクシヤをかけ、ますますひどくなっています。毎朝、朝礼をやり、「今はたしかに賃金がひくい。そのためにもっとみんなで苦しみ、仕事を頑張ってやりましょう」「上司に対して失礼な事があつたら許さない」「おもてであつた時、必ずあいさつを……」等と息もつまるような異常な職場になつて来ました。

組合に対する攻撃もひどく、総務課長が入つてから、社長は団交に顔を出さず、会社より委任されたという形で、総務課長が団交に出ています。そして今迄、組合と会社で確認してきた事を、「私は知らない。これからは許さない。方針がかわつた」と、ふみにじつてきています。又、就業中の組合の緊急連絡、集会場所について確認書がとつてあり、今まで行なつてきた事でも、

○就業中の電話使用は急用のみ課長の許可を得て行う。ただし組合に関する電話はいっさい許さない。

○定時後の会社施設の使用は禁止する。ただし昼休みはよい。昼休み施設使用の際は必ず総務課長の許可を得る。総務課長不在の場合は使用してはならない。(私達は組合事務所もありません)

○団交申し入れは、四十八時間前とし、出席人数と名簿を提出すること。

○面会はいっさい許さない。

○急病の場合、たとえかかりつけの病院が近くにあっても、会社の指定病院以外は許さない。

等を、一方的に出し、確認書迄もふみにじり、不当ないがかりをしています。凸版印刷の下請けで公然化して闘っている組合は三立分会だけです。そのために会社はどうかして組合をつぶそうとやっきになっています。私達はこうした会社の不当な行為を絶対に許す事はできません。当然の権利である組合活動を守るために、組織拡大とともに頑張ります。

皆さんのご支援とご指導をお願いします。

最後に抗議先として、会社名と住所、社長名と佐原久という総務課長の名前が書いてあった。この佐原久はおそらくは日経連の手兵で、組合破壊で高給をとっている専門家だろう。人間らしい血や涙は一滴もなくなっていて、憲法に保障されている労働者の団結権をいかにして奪い、破壊するかということを日夜研究している奴なのだ。その海千山千の悪い奴と、東京北部の一角で婦人ばかりの労働者が、労働強化を押しつけられながら、きびしいたたかいを続けているのである。

また江東金属労働組合・後藤ナット分会のピラは、福島県の中学を卒業してすぐ就職してきた少年たちが、「朝は六時ごろから起こされ、工場や社長宅のそうじをやらされます。朝食もおちおちできません。工場には七時半には入らなくてはなりません。夜は残業で門限は十時で、十時をすぎると五百円の罰金をとられます。私たちには一日中、朝から夜まで自由な時間がありません。寮はロウカの両側にベットを置いてあるだけです」このため「仲間同志のケンカがたえません」という、ひどい状態をなくすために十二月十二日に組合を結成した。すると会社は、組合を認めておいて一週間後の夜十二時ごろに、少年たちの親を福島県から呼びだして、「こどもたちがアカになった」と宣伝、何も知らない親たちを通じて、組合員を脱退させた。そして残った五人を、「責任をとれ」と首切った。五人は全員十七、八歳だという。五人は不安と苦しさに泣きながら、すでに二カ月たかかっていると訴えている。その少年たちが、自分たちでいっしょう懸命に切ったらしいガリ版の字と、東北の人らしく、「い」と「え」が反対になっている文章を読むと、胸がジーンとしてくる。がんばれ！と思わず、声をかけたくなくなる。この会場の中のどこかに、たくさんの仲間たちに接して、胸をおどろかせているのだろう。

東京私学単一労組のピラは、東京代々木の東京高等服装女学院の広藤先生への退職強要に反

対するものだった。この学院では三千名の生徒に事務員をかねた先生が三十名足らず。宣伝では一クラス五十名なのに百名から二百名もつめこんで、授業料などの年間収入は五千万円以上。必要経費は約二千五百万円。つまり収入の半分二千五百万円をまるもうけして、さらに授業料値上げを計画、じゃまになる広藤先生の退職を強要していることを、詳細に事実と数字をあげて訴えていた。

また暴力的な組織破壊を訴えているのは、東京自動車交通労働組合の各分会のピラに多かった。東自交では全員解雇のさくら分会をはじめ二十九職場五十六人に不当解雇が出ていた。とくに新星分会の不当解雇では、都労委への最終答弁書で、会社側は東自交などの単一組合は労働組合法で認められる組合ではないと言っているのは、その背後で指導している日経連の単一労組に結集する労働者全体への挑戦であった。

わたしがピラを読んでいる間にも、記録的な雪と寒波と交通難の中を、広い東京の南端である会場につきつきと集まっていた。そして広い体育館の一階を三分ノ二ほど埋めて開会になった。およそ二千名ぐらいだろうか、一人ひとりがこのルポルタージュで取材してきたような、あるいはピラに書いてあったような、たたかひの経験を積んできている労働者なのである。まだまだ多くの組合員は、きびしい非公然活動の中にある。日曜日といっても、休めない中小企

業や医療関係の労働者も少くない。それにこの記録的な雪と寒波で自動車などは走れないところもある。その中を参加費と交通費を自弁で二千名も集まってきているのだ。参加費と交通費自己負担で、この寒気の中を、交通便利といえない東京の南端へ、二千名も集められるような労働組合が企業内労働組合の中にあるだろうか。わたしは単一労働組合だからこそ、この日の条件の中で二千名も集まったのだらうと思う。参加者の中で、全員が赤い鉢巻をしている東京保育所労働組合の人たちの姿が目立った。

### 3 「入る時は一人でも……みなさん、ともに頑張ろう」

集会は、日本映画テレビ産業労組の島田耕書記長の司会で始まった。十年ほど前からの知人で、やさしい感じのする人なのだが、壇上に立った声は、にこりがなく、しかもはりがあって力強い。この人も見かけに似ぬねばり強い活動家だ。

きょうの決起集会の実行委員長で単一労組の育ての親である杉浦正男さん（東京出版印刷製本産業労組委員長）が、拍手にむかえられて壇上に立つ。まだ五十二歳の若さだが白髪が照明にはえて美しい。産別会議の副議長のころは白い毛がまじっている程度だったように覚えていゝる。人間を変えていく単一労組のたたかいは喜びも苦労も深いのだろう。未組織の労働者が一人組織されるごとに、杉浦さんの髪は一本づつ白くなったのではないだろうか。白くなれば、後はきょうの雪のように美しく、きびしくなるだけなのだ。

「……一人でもはいれる労働組合というキャッチフレーズは、都内のはとバスの『一人でものれる観光バス』という宣伝文句から、だれかが考えついたのです。しかし言葉は同じよう

も、一人でものれる観光バスは客同士は最後まで他人です。一人でもはかれる労働組合は、はいる時は一人でも、あとは心から信頼してなんでも話しあえる、ともにたたかう仲間になるところがちがうのです。……十年前、三十五人で出発した単一労組は、いまは東京だけで一万五千人の仲間ができています。単一労組のたたかいは労働運動のなかで未開拓の分野です。みんなよく学習し、たたかいの経験を交流する必要があります。きょうの決起集会を成功させた階級的、戦闘的連帯の精神で、あらゆる弾圧をはね返し、春闘の勝利と組織の拡大強化をめざして、単一労組をさらに大きく発展させましょう。みなさん。ともにがんばろう！」

とあいさつする杉浦さんの声は、十年目の大きな一里塚をむかえて、さらに大きく発展していこうとする深い感慨がこもっているように聞こえた。

続いて社会党の大柴しげ夫氏からの激励電報が紹介された後、共産党の塚田大願氏があいさつした。衆議院選挙で東京南部の候補者だったので、ともに選挙をたたかった人たちの拍手もまじっていた。

「……みなさんの力こそ、日本の夜明けをよぶ火だねです。これからの奮闘を期待するとともに、共産党はその先頭に立ってたたかうことを誓います」

短いけど、力強い激励だった。神奈川県や新潟県からも、単一労組の仲間がこの集会に参加していますと、司会者に紹介されて、ならんですわっていた十人ほどの人が席から立って、拍



手につつまれた。兵庫県の個人加盟労組連絡会など、全国各地の単一労組から祝電が読みあげられた。

ここで、司会者が女性に変わった。幕が一度おろされて、すぐにまた上がった。広い舞台に、折りたたみイスに腰かけた十二人の人が、半円形にならんでいた。全都単一労組連絡会に結集している十一の産業別個人加盟労組の委員長や書記長だった。十一の単一労組とは、

全国金属労組東京地本（代表・下丸子地域支部）

全印総連・東京出版印刷製本産業労組

全国建設及建設資材労組

全自交・東京自動車交通労組

東京化学産業労組

日本映画テレビ産業労組

私教連・東京私学単一労組

東京医労連・東京医療単一労組

東京都保育所労組

東京商業労組

全信労東京金融労組

以上の各労組だった。司会者が一労組三分間づつ、その切実な要求を表明するように言ったのだが、経験豊富な委員長や書記長も、あまりにも多い未組織労働者の要求や、訴えたいことがあるために、ほとんどの人が二倍、三倍と時間を超過してしまうのだった。

全国金属労組の代表は、港地域支部の分会が、五十万円をエサにナパーム弾をつくらされるのを、職場の討論で「人殺しの手伝いはできない」ときっぱり拒絶したことを報告した。単一労組の労働者は、ベトナム人民との国際的な連帯のたたかいでも、勇敢にたたかっているのだ。

東京医療単一労組の石坂委員長は、東京杉並で合理化閉鎖と闘争中の結核病院の大田病院で一人の患者が亡くなった。これは殺されたのと同じであると、喪章をつけて報告した。

東京商業労組の代表は、五月に全国組織の結成をめざしているとのべたあと、劣悪な条件で働いている商業労働者の要求の中には、「社長宅で私用に使うな」「既婚女性のいびりだし反対、恋愛の自由を認めよ」「始業だけでなく、終業のベルも鳴らせ」「寮の食事を犬なみにしろ」などがあると報告した。最後のは「食事を犬なみにするな」のまちがいはなかった。一瞬、耳を疑った人たちの「ひどい！」という、思わず発した怒りの声が、会場のあちこちで起こった。

東京自動車交通労組の島松委員長は、タクシー労働者の労働と生活と要求を、エバラ交通の

労働者が作詞したという替え歌を、舞台でうたった。タクシー労働者には「神風タクシーなくして、都民の命を守れ」「罰金！この悲しくて重くてしゃくなもの、なんとかしてくれ」など百二十におよぶ要求がある。それを赤、青、白、黄色の小型ののぼりに書いて会場にならべてあった。

東京都保育所労組の三上さんは壇上の紅一点だった。三上さんは、保母は十年働いても二万円ちよつとで、昇給はなく、お母さんが一人の赤ちゃんでも大変なのに、七人も受け持たされている。保母が一人でも病気すると大変だ。予備の保母さんが一人でも欲しい。保育児の受け持ち数を適正にすることは、こどもを大切にすることを一致すると、働いている父母との共闘を訴えた。

会場のただっぴろい大田体育館の館内は、暖房の設備はなく、きょうの記録的な寒さでしんと冷えこんでくる。わたしはカゼがなおったばかりなので、着ぶくれて来たのだがそれでもじっと腰かけていると、ゴム長靴の足もとからひざまで冷たくなってくる。からだのしんまで冷たくなってくる感じた。二千名の参加者も多くの人、じつとからだを固くして寒さに耐えているようだ。そんな寒さの中で全国建設労組の鈴木東京支部長——いつか、野丁場の左官のS君を紹介してくれた、自分自身もビル建築の溶接工で、ロシア語の勉強をしていた鈴木君だ——が、はち切れそうに元気な声で話した。

「みなさん。わたしたちは、この体育館もつくった建設労働者です。わたしたちの仲間は、この寒い雪まじりの風の中でも、たとえば霞ヶ関の超高層ビルでは、東京タワーの展望台よりも高い、地上百数メートルの上空で巾二十センチの足場の上で働いているのです。わたしたちの要求は大手の社員はボーナス二十四万円。現場で働いているものはゼロ。そんな身分差別をなくせ！人間の住む飯場をつくれ！朝めしにおかずをつける！……です」

寒さにふるえていたわたしは、鈴木君の話にまったく降参してしまった。続いて、たたかいの経験も豊かにつみ、組織の基礎づくりもできている東京出版印刷労組、東京私学単一労組の報告とともに、誕生して、まだ数カ月の東京金融労組、東京化学産業労組の新しい仲間の要求を総合的にまとめた決起集会の決議が読みあげられ始めた。

### 決議（要旨）

わたしたちがここでだしあった要求は、ことばで表現しきれないほど切実なものをもって、います。

わたしたちの苦しみ、なやみ、そこからでてくる要求は、ここに集まった労働者や家族だけのなやみ、苦しみだけではありません。全労働者がぶつかっている共通のなやみ、苦しみます。そのことはこんどの春闘をみればよくわかります。

わたしたち全都単一労組一万五千名は、今春闘にさいし、春闘共闘の先頭に立ち、こんごも家族はもちろん、未組織労働者の切実な要求をほりおこし、それを高くかかげ、それぞれの単一労組をますます強め、拡大し、全労働者とともに同じように米日独占資本に苦しめられている農民をはじめとする人民とかたく手をにぎり、勝利に向かつてたたかいぬきます。また地方選挙でも組合員の要求を基礎に、反動自民党を打ち破るため、たたかいぬくことを誓いました。

決議が読みあげられ、全参加者のさかんな拍手で採択されているとき、わたしは十一の単一労組のほかに、繊維労連・東京繊維被服産業労組というものの一つの個人加盟の産業別労組があることを考えていた。わたしは八王子で会った繊維被服労組のHさんの話を思い出していた。東京には約二十万人の繊維労働者が働いているが、九割の十八万人が未組織で労働組合に入っていない。十人以下の零細企業や家内工業が多く、夜十時、十一時ごろまで働いている。生理休暇も年次有給休暇もない。日曜日も満足に休めない。みんな寮や住み込みでいる。低賃金なので、自分で部屋を借りて生活することなどはできない。残業代がきちんと払われないことも、何年勤めても、退職金がいくらになるという楽しみもない。

東京周辺では就職を希望する中卒者もないので、東北の山漁村や離島から中卒の少女を集

めてくる。少女たちは東北や離島のおくれた考えに根強く支配されていて、テレビ俳優や流行歌手にあこがれながら、自分たちの境遇は「小さな個人会社だからしょうがないのよ」「不景気だし、縁故だから文句は言えないし」とあきらめて働いている。独占大企業の新製品に圧迫されて、経営者も家族ぐるみで働いているのだが、それでいて保守的な勢力や考えに強く支配されている。八王子でもこの産業は自民党の票田になっている。働いている少女たちは、長時間労働と寮生活のあけくれなので、外部との接触は少ない。個人加盟労組に入ってもらうのは非常に困難だ。まして、経営者を独占資本とたたかう方向に向けなければ、企業ごとつぶされてしまうのだから、高い判断力が必要だ。そこまで婦人労働者の意識や能力を高めることは、さらに大変だろうと思える。

それでも、会社の寮の食事が、金山寺味噌ばかりで、肉など見たことがなく魚も週一回くらいだったのを、仲間の労働者と話しあって改善させることに成功したり、八王子の給食センターから三食「栄養食？」という名の弁当が配達される職場では、味がうすいので必要なしょう油や味の素を自分たちで買っていたのを、会社に負担させたりして、たたかいを始めている単一労組の組合員がいる。きょうの決起集会で報告する代表がいなくとも、繊維被服労組の仲間たちは、樹の根が地上から見えなくとも、地中深く無数の支根とひげ根をのびしているように、地味な活動を続けているのである。

#### 4. 人間の誇りをとりもどすたたかひ

わたしが、繊維被服労組の人たちのことを考えているうちに、決起集会の第二部が始まった。それは「たたかひの炎は燃えて」という、単一労組十年のあゆみを舞台化した構成劇だった。日本映画テレビ産業労組のそれぞれ本職の組合員が企画、進行、照明、スライド、効果音などを担当したほか、統一劇場、いちよう座、文工隊あらまが協力出演した。舞台のすぐ下では働く仲間である楽団創生やコーラスが、構成劇の効果をもりあげた。しかし、本職の人たちに負けないで熱演したのは、しろうとの各単一労組の組合員だった。自分たちが経験し、強く感じてきた苦しみやよろこびを、そのまま舞台上に再現するのだから、熱がこもり、迫真力があるのは当然ともいえたが、それにしてもさまざまな産業の人たちが一つになって、みごとに協力しあっているのは、さすがに「全都単一労組連絡会」だと思った。記録的な寒さの中で、十年の歴史をえがく約二時間半が、そんなに長く感じられなかった。また観客も舞台とまったく一つになっていた。

単一労組が生まれる前、ある大印刷工場で十七歳の臨時工の青年が、なんのよるこびもない生活に、昼休みに歌をうたいませんか、休みにハイキングに行きませんか、と手書きのピラで仲間の労働者によびかけると、職制に呼び出されて、「民青だろう」「共産党だろう」と七時間もせめつけられる。青年は、そんな社会に絶望して、神田川のドブ川に身を投げて死んでしまった事実を、舞台上で再現すると、会場のあちこちから、がまんできなくなった組合員から、「がんばれ!」「負けるなよ!」「ごまかされるなようッ」と、大きな声がかかる。それは叫ばないでいられない声援なのだが、臨時工でもはいれる組合、個人加盟労組のなかった十年前のその青年は死んでしまう。「……ぼくは、心から話しあえる仲間が欲しかっただけなのです。それが共産党だ、民青だといわれて、なにもかも分らなくなりました。さようなら……」と遺書が読みあげられる。会場はシーンとなってしまう。

東京・大田区のある病院で二十人の看護婦さんが、ただ同然の当直手当の値上げを要求した。経営者は、看護婦さんの団結ぶりに要求をのむと回答した。が数日後、一人の看護婦鬼塚文子さんが理事に呼びだされた。

理事 「君はこの病院につとめてどれ位かね」

鬼塚 「ちょうど一年目です」

理事 「うん、そうかね」(書類を見ていて目を上げない)



鬼塚 「あのう、それでどうかしたのでしょうか？」

理事 (書類から目をあげて) 「その態度が気に食わないんだ。何かにつけて反抗しようとする。看護婦は看護婦らしく、やさしく、従順。これが当病院の方針だ。……君がみんなを扇動して当直手当で値上げを要求させたのだろう。君は病院の気風にあわないから、やめてもらおう」

鬼塚 「エッ」

理事 「文句はないだろうね。ほかの者には黙ってやるから、自分からやめることにして、辞表を書きたまえ」

鬼塚さんのたたかいは始まった。医療単一労組本部に連絡して、翌日から鬼塚さんは、白衣の胸と背に不当解雇反対のゼッケンをつけて、診療室前にすわりこむ。理事、診察しながらへまばかりやる。鬼塚さんへの支持は高まってくる。支援の手紙が届けられる。手紙を届けた郵便配達労働者も、鬼塚さんを励ます。手紙を読んで感動した鬼塚さんは更衣室にかけこんで、泣きだしてしまふ。不当解雇反対のたたかいは病院内外に広がる。経営者は二人のガードマンをやとい、私服警官まで呼びこんだ。

この鬼塚さんの役を演じたのは、鬼塚さん自身だった。すらりとした、白衣の似合う美しい娘さんだった。

八名の先生たちの首切りに反対して、もう六カ月以上もたたかっている世田ヶ谷区・青葉学園の構成劇も、生徒と先生たち自身が訴えるもので感銘が深かった。こうして雪にも寒波にも負けずに燃えあがる個人加盟労組の闘魂は舞台の上も下もなく、展開されていった。

会場には家族づれの人もいた。壁ぎわに立って構成劇を見ていた三人の親子づれは、タクシ―労働者の一家だった。たくましいお父さんの背におぶわれた六歳ぐらいの男の子はジャンパーの腕に、「全自交・曙交通」の赤い腕章をまいてもらっていた。「ぼうや、おもしろいかい？」と聞くと、こっくり頷いた。「うん。おもしろい」とはつきりした声で返事をした。小さな子どもに分る内容ではなかったので、わたしはびっくりして、男の子の顔を見直した。子どもも、奥さんも熱心に舞台を見つめていた。たたかう父親の生き方を、家族が理解する生活をきき知っているのだろう。その三人の親子づれに、わたしは大輝交通の服部さん親子を思い出した。男の子を軽がると背負っているこの背の高いタクシ―労働者も、取材すれば、服部さんのような感動的なたたかいの経験を聞くことができるのだろう。いや、この決起集会に参加している二千名の一人ひとりが、歴史を変える主人にふさわしい物語りをもち、それをさらに豊かなものにしてしようとしているのだと、わたしは思った。

集会の最後に、「がんばろう！」の歌をうたったとき、わたしは、まだ小人数の東京化学産業労組の人たちと腕をくんだ。二千名の参加者は、「決起集会の第三部だ」と、表に出てデモ

行進の隊列をつくった。ふと見上げると、大田体育館正面のひさしに、三十センチほどに伸びたツララの列が、夕やみの中に数百本もならんで光っていた。

元気な歌ごととシュプレッヒコールが、雪と氷と寒波にとざされた夕やみの工場地帯に続いた。デモコースの途中には、会社側の暴力的な組合破壊とたたかっている全自交・翼交通労組があった。雪で自動車の交通が少くなっている京浜国道の反対側の翼自動車交通K・Kの社屋や構内には、十数本の日の丸が乱立していた。そして粗末な木造小屋の組合事務所には数本の赤旗が立っている。この会社の社長は、組合破壊に血迷って、酒を吞んで組合事務所に入ってきて、ストーブをひっくり返したり、組合旗に火をつけて、プロパンガスのタンクの前を走ったという奴である。

翼交通労組の組合員は二十人ぐらいが歩道に横にならんで、デモ行進を出迎えている。一メートル四方ぐらいの白い板に、一字づつ大きく「決起集会の成功おめでとう」と書いて、高きかかっていた。デモ行進の隊列から「暴力はやめろ!」「暴力絶対反対!」「がんばれよう!」「がんばれえー」のシュプレッヒコールが起きたのは当然だ。手をふり、赤旗をふって激励しあう。わたしが入れてもらった映産労の隊列のうしろ、全国建設労組の列の中で、だれかが「畜生! 頭にきちゃうな」と叫んでいた。きちがいざたとしか思えないバカでかい日の丸の旗が、ところ嫌わずの感じで十数本も乱立しているのを見たためだ。

手を振り、拍手し、赤旗を振っている翼交通労組の組合員の列の中に、小学校一年生ぐらいの女の子が立っていた。

「ほら、お父さんの仲間の人が、お父さんたちにがんばれって、言ってくれる人たちが、あんなにたくさん、たくさんいるんだよ」

と、その組合員の父親が、女の子に話しているのが聞こえるような気がした。デモ行進の解散点は多摩川の六郷土手の近くだった。デモが終わったのは午後七時で、すっかり暗くなっていた。解散点で簡単な会合を開いているかたまりの中に、医療単一労組A病院分会の看護婦さんたちの集団もあった。オバQのマンガをつくっていた畠山さんもいた。

畠山さんにきょうの感想を聞くと、「とにかくすばらしくて、あすからのたたかいの勇気がいっそうわきました。わたしには、安保闘争や三池闘争以来の労働者のたたかいの歴史を、構成劇で見てよく分ったのが収穫」と言っていた。A病院分会の看護婦さんには、「おじさんのルポルタージュ、いつ本になるの」とさいそくされた。

二千名の労働者たちは、東京の最南端から雪と氷の中を、一万五千人の仲間や未組織の仲間が待っている全東京都に、めいめいの決意を深めて考え深い表情で散っていた。黙々と歩いていく人たちにまじって、わたしは国電蒲田駅に向かって歩きながら考えていた。この次の決起

集会には、文字どおり一万人の仲間が集まるのはまちがいない。千駄ヶ谷の東京体育館で数万人の大集会を単一労組の組合員と家族で開く日も、そう遠くはないように思う。そのためには十二の単一労組が拡大強化されて、もっと多くの工場、職場に個人加盟の産業別労組がつけられるだろう。そしてけさ、京浜急行電車の中で見た、公営バクチャやパチンコに熱中して、なにもかも、生きる目的でさえ忘れようとしている未組織の仲間にも呼びかけていく必要があるのだろう。

それは千八百万人の未組織労働者が、すべての働く人民と力をあわせて、人間が、人間らしく生きていく権利を奪い返すたたかい。人間が、人間の誇りを取り戻すたたかい。人間が、人間を差別することを許さないたたかいなのである。

それは戦争気ちがいや、金もうけ気ちがいに、人間のいのちと幸福を求める権利は地球よりも重いことを、承認させるたたかいなのである。

一人でもはかれる労働組合は、その任務をもって生まれ、その任務をりっぱに果せる労働組合なのである。わたしは、雪と氷の街をからだ中が冷くなって歩きながら、一人でもはかれる

産業別労働組合が、日本の労働運動にやがて筋金を入れていくだろうという期待で、こころの中は熱くなっていた。

一人でもはいれる産業別労働組合の仲間よ

からだを大切にして、がんばろう！

杉 浦 正 男

東京出版印刷製本産業労働組委員長

東京の個人加盟産業別労働組合のすぐれたたたかひの教訓が、山岸一章さんの筆によってこの本のなかに生々と再現されたことを全国の組織労働者、また未組織労働者を組織しようとして努力している人たち、あるいは自から労働組合をつくりたいとのぞんでいる労働者にかわって、心から喜んでおります。

この本は組織化のための武器としてただちに役立つばかりでなく、多くの人たちに明るい展望と、限らない激ましと、確信を与えてくれるからです。

みなさんは、この本を読んで一人でもはかれる労働組合、すなわち個人加盟産業別労働組合とはどんな労働組合であるかを、大体つかまされたことと思えます。が、もっと突っこんでこの組合の組織形態のことや、性格等についても知りたいと思われる方が多いと思えますので、個人加盟産業別労働組合とはどんな特徴をもった労働組合なのかについて簡単に説明しておきましょう。

みなさんは、企業内組合のことはよくご存知でしょう、また未組織労働者も労働組合を想像する場合、たいがい企業内組合を念頭に浮べます。それとの比較の上にたつてご説明した方がよくわかるのではないかと思いますので、そこからはじめましょう。

現在ある日本の労働組合の大多数は企業主を対象につくった労働組合です。企業内につくられた組合の宿命として、どうしても企業の中だけにとちこもったり、考え方もその影響をうけます。これを克服し同一産業に働く労働者が産業別に力を合せてたため、おなじ産業のほかの企業内組合と連合し、全国組合をつくり、企業内にとちこもろうとする弱点を補ってききました。ですから組織図を示すと次のようになります。

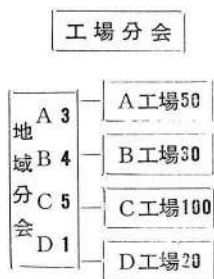
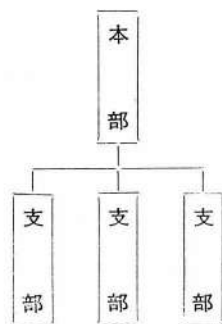


基本は一番下の企業内組合です。その上に地方毎に連合会をつくり、それが全国的に結集して産業別の全国組織という形をとっています。全国組織はさらに総評なり総同盟なりにはいつているという形態です。



企業内組合の弱点としてあげられるなかに、労働者が労働組合に加入する場合、自覚を前提にしていないという問題があります。ある会社に入社するとその労働者が知らない間に自動的に組合員にされてしまいます。給料日になって組合費が差引かれていることではじめて、労働組合員になったんだな、ということを知ったという例さえあります。

もう一つの弱点としてこの組合は結果的には企業のなかの本工だけしかはいれない仕組みになっています。ですから試用期間中のものである、臨時工、嘱託、アルバイト、その工場内へ通ってくる社外工などは組合にはいれません、このように自分の企業のなかの未組織労働者を組織のなかに入れることができない労働組合ですから、階級的な立場にたつて、近辺にいる山の未組織労働者を組織するなどということに、なかなか眼がむかないことは当然です。一方個人加盟産業別労働組合ですが図解してみると次のようになります。



企業内労働組合とちがい、まず企業の外に労働組合が生れ、その組合があらゆる工場の労働者に呼かけ組合員に加入させて行きます、組合員の範囲には制限がありません、本工はもちろん試用期間中のもの、臨時工、嘱託、アルバイト、社外工、失業中のもの誰でもはいれます。加入する場合、一人でもはいれるところから個人加盟の労働組合といえます。

一人でもはいれるということは当然のことながら、自分は労働組合にはいるんだという自覚を前提にします。したがって組合費も給料からの天引ではなく自発的に払い込みます。組合員は自分の要求をかちとるために、未組織労働者との統一行動をくみ、その中で組合員を拡大しなければたかえませんが、そこでたえず組織拡大を考えるようになります。このことはこの本をよむことでおわかりになったことと思います。

そして個人加盟産業別労働組合は東京では金属、印刷、自動車、商業、医療、私学保育、建設、トラック、化学などのあらゆる産業にわたってつくられました。東京の活動の経験は全国に波及して各地に個人加盟産業別労働組合が生れています。

ここでお断りしておきますが、この組織形態はなにも珍しい組織形態というわけではありません、戦前の日本の労働組合はみんなこういった形態でしたし、フランス労働総同盟、イタリア労働総同盟をはじめとする全世界の労働組合はほとんどが個人加盟で産業別労働組合という形態をとっているのです。むしろ日本のように企業毎の労働組合という組織形態のほうが珍

らしい存在なのだといえます。

さらにこの組合の性格を一言でいってみると、階級的な観点にたった労働組合ですし、その運営は民主的に行われている労働組合であるといえます。

この組合は本文の中にあるように、生れてきた経過をみればわかると思いますが、組織をもたないが故に悲惨な立場におかれた未組織労働者が、自からの堪えがたい苦しみを解決するなかでつくりました。成長してきた道のりの中で資本による妨害、切りくずし、弾圧、などにあり、不屈のたたかいを堪えぬいてきた組合です。組合員の階級意識も必然的に高くなります。

またこの組合は労働者の生活に忠実であり、労働者の権利を守るといふ点では一人の首切りといえども許しません。労働者の利益をかちとるため、たえずその産業の労働者の統一を目ざし、既存の企業組合と力を合せて、未組織労働者の組織化のために先頭にたつたたかっている労働組合です。

いま東京の個人加盟産業別労働組合は「私の要求運動」という運動を展開しています、労働組合は労働者一人一人が作っているものです。ですから一人一人の要求が基礎になることはあたりまえです。この運動は組合員の要求はもちろん、未組織労働者の要求をも引きだし、要求を引きだしたところでは要求討論のなかで内容をふかめ、かちとるための行動をおこしています。この運動は組合員と未組織の労働者の別なく、一人一人が気持と気持を通じあい団結をふかめ

ています。こういった活動こそ真に民主的な労働組合といえると思います。このように個人加盟の産業別労働組合は、経営内、経営外をとわず未組織労働者の生活を高めるためたえず努力を払っています。

労働組合は階級闘争の学校であるという言葉の通り、個人加盟産業別労働組合の組合員は企業をのりこえた連帯活動のなかで階級的にも育っていきつつあります。そのことはこの本の内容がよく証明していると思います。

山岸さんの書かれたこの本はスペースの関係から個人加盟産業別労働組合のすべてが語りつくされていないのが残念です。たとえば個人加盟産業別労働組に対する資本の妨害、そのなかで起るいろいろな障害、それに堪える組合運営、弾圧や分裂、それとどうたたかいたか統一をかちとつたらいいか等々、私たちが組合づくりの中でつかまねばならない沢山の問題があります。それらはちかく労働者教育協会が発行する拙著『組合活動のしかた』に詳しく書いておきました。山岸さんの書かれたこの本と併読していただければ御参考になると思います。

最後に私はこの本を通じ、すでに労働組合に加入していらっしやる多くの労働者のみなさんが、個人加盟産業別労働組合というものを知って下さり、苦しんでいる未組織労働者の組織化にのりだしていただくこと、またどうやったら労働組合をつくることができるかについて思いなやんで多くの未組織労働者のみなさんが、すでにある個人加盟産業別労働組合に一日も

早く加入し、自分の生活を守るための努力をはじめ、武器としてこの本を活用されるとともに、もっと沢山の労働者にこの本を広めていただくことをおねがいたします。

やま ぎし かず あき  
山 岸 一 章

1923年5月生。住所 東京都日野市姥久保団地9号7

作家 日本民主主義文学同盟常任幹事

主な作品 『詩と竹と英雄の国—ベトナム』 『黙秘』  
『墓碑銘』



たたかう個人加盟労働組合

1967年6月19日 初版

定価 300 円

著 者 山 岸 一 章

発 行 者 長 原 洋 子

発 行 所 株式会社 太 郎 書 店

東京都千代田区九段南4-5-10齊藤ビル

電話・東京(03) 262-3874

振替番号・東京 68678

落丁乱丁本はおとりかえいたします。



太郎書店